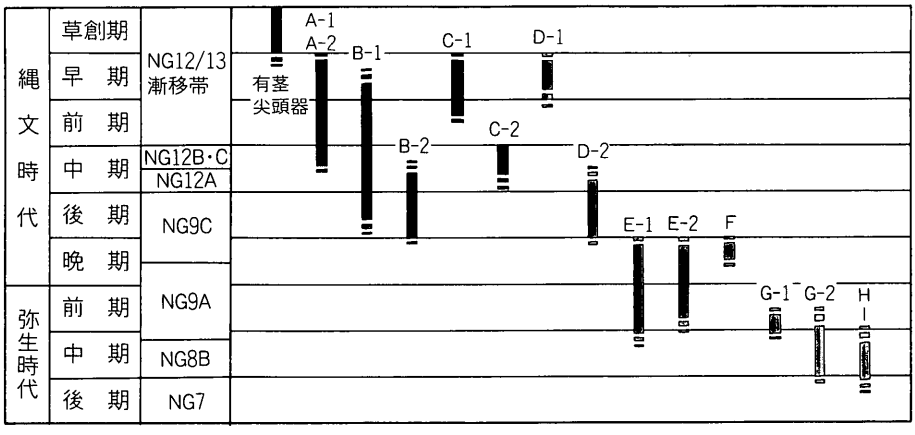


図197　石鏃型式の変遷

E－2類・F類が現われ、再び型式のバリエーションが増加する。資料の最大長の平均は25.1㎜、重量の平均は1.15gで、さらに大形化が進んでくるが、これは弓が改良されていくぶん強力になった結果かもしれない。技法的には、前段階と同様、押圧剥離単位が細かくていねいに仕上げられたものもあるが、やや大きく粗いものも少なからず見られる。当該層位出土資料は、縄文時代後期前半～晩期前半の年代観が与えられる。また、この時期の資料のうち、縄文時代晩期前半に属するF類の中には、極少数ではあるが、他地域産、たとえば讃岐地域の金山産サヌカイトではないかと思われる石材を使用しているものが存在する。それ以前の石鏃の石材がほぼ二上山産サヌカイトであると考えられるのに対し、若干の石材の移動が行われていたことを示唆している。

長原9A層出土資料では、引き続きE－1類・E－2類が存在するが、B－1類・B－2類・D－2類・F類が消滅する一方で、新たにG－1類・G－2類が現われ、前段階までの石鏃型式がすべて凹基無茎式であったのに対し、初めて凸基無茎式が出現する。型式のバリエーションは再び減少する。出土資料の最大長の平均は32.8㎜、重量の平均は1.83gで、凸基無茎式の出現とも関連してさらに大形化が進んでおり、それに伴って押圧剥離単位もさらに大きくなっている。この時期の石鏃の大形化は、佐原(1964)や森本(1986)によって指摘されているように、弓矢が強力な戦いの道具としての機能を有するにいたった結果によるものであろう。これらの資料に与えられる年代観は、縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭・畿内第Ⅱ様式期と考えられる。また、他地域の金山産サヌカイトを石材に利用した資料あるいは讃岐地域からの搬入品ではないかと考えられる資料が少数見られ、この時期の畿内地域において見られる流通圏の拡大、すなわち、稲作の伝播に伴う土器や石器・石材の西

方からの移動現象(菅、1992)とも重なってくるものと思われる。

長原8B層出土資料ではG－２類があり、弥生時代中期・畿内第Ⅲ・Ⅳ様式期の年代観が与えられる。長原７層以上出土あるいは出土層位不明でこの時期に相当すると考えられる資料には、Ｈ・Ｉ類が見られ、初めて有茎式が現われる。長原8B層出土資料における最大長の平均は42.4㎜、重量の平均は2.03g、一方、この時期に相当する資料における最大長の平均は44.7㎜、重量の平均は4.05gで、相当な大形化・重量化が進んでおり、これは前段階の石鏃の武器化がさらに進んだ結果であると考えられる。有茎式出現の要因は今のところ明らかでなく、おそらく石鏃の重量を保ち貫通力を高めることと装着方法の変化によるものと思われるが、有茎式石鏃が縄文時代から存在する伊勢湾以東の地域からの影響も考えなくてはならないだろう。特に大形で重量のある石鏃の中には、鎗先等の機能をもつものや、儀礼的な祭器としての性格をもつものもあったのではないかと考えられる。この時期の石器は確実に大形化する段階にあり、石鏃の押圧剥離の単位は全般的に大きく粗くなっているが、大形品の中には精巧に成形されたものもあり、これは単に石器製作技法の退化ではなく石鏃自体の大形化に伴う石器製作技法の変革ととらえた方がよいのではないかと思われる。また、この時期の石器生産集団が、高い技術を維持しつつ生業の一つとして他地域へ搬出する石器を製作する集団と、ある程度の自給はするものの高い技術を有する大形石鏃や石剣等は搬入品に頼っていた集団とに二極分解し、両者の間を石鏃を中心とした石器類が商品的価値をもつ道具として流通していた可能性(菅、1988)が再確認できた。

今回、一つの試みとして行った石鏃の成形技法の類型化および分析は、層位ごとの出土数が少なかったため、充分なものにはならなかったが、一応の興味深い結果を導き出すことができた。長原9C層～12BC層出土および長原12A～12／13漸移帯一括出土で長原12BC層の時期に相当すると考えられる石鏃においては、統計学的な精度には若干疑問が残るものの、ａ型すなわち一方の面から両側縁の成形を行ったのち反対の面の両側縁の成形を行う技法に集中する傾向が見られ、特にａ－１型の頻度が高かった。一方、他の技法については、若干の偏りはあるものの、特に集中する傾向は見られなかった。このことは、長原遺跡における縄文時代中～後期にかけての石鏃成形技法が、ａ型を一般的とするものであったことを示しているのではないかと思われる。なお、型式と成形技法の相関関係についても着目してみたが、今回の分析結果では明確な関係は検証できなかった。しかし、今後このような視点に立つ分析を繰返し行った資料の蓄積により、石鏃の製作技法や製作者の利き腕の問題あるいは製作技術集団の特性の解明に大いに役立つものと期待される。

5．おわりに

今回の石鏃資料を考察するに当り、課題として残ったことについて触れておきたい。実際の石鏃資料では、C－1類・D－1類・F類・G－1類のように比較的短い期間に特徴的に現われる型式が存在する一方で、そのほか多くの石鏃は機能面での有効性を重視した結果であろうが、その型式変化の時間幅が土器等に比較して非常に長い。それゆえ、石鏃単独での編年作業にはどうしても限界があり、石鏃の所属時期を考察するに当っては、共伴関係にある土器の編年に頼らざるを得なくなる。したがって、石鏃の編年作業を進めるためには、所属時期のはっきりしている土器との共伴関係にあり、良好な形で検出された資料の蓄積が非常に重要であることがわかった。また、従来、打製石鏃は、機能面・技術面が優先され、土器に見られるような精神的な部分が型式において表われにくいとされてきたが、実際はそうではなく、たとえば弥生時代中期の石鏃では、機能面や技術面のみならず、その製作集団がもつ精神文化がある程度反映されていると考えられる型式差異の存在が指摘されている(松木、1989)。本稿では、分類および時期的変遷を考察する上で参考とするための資料が、所属時期が比較的明確にされている良好な単純資料を求めるがゆえに、畿内以外の地域にも及んだ。しかし、石鏃型式の分布範囲、すなわち地域差の及ぶ範囲がどの程度の拡がりをもち、また、それらの並行関係が実態がどうなっているかまでは分析できなかった。石鏃の型式的差異の時間的あるいは空間的な反復が、絶えず一定の期間あるいは一定の地域で繰返し起っている以上、石鏃を巡る地域間の交流がある一定の幅や拡がりをもって行われていたことはまちがいなく、それらを解明していくことが、今後の石鏃の型式学的研究の進展につながるものと考えるものである。

本稿を執筆するに当っては、川崎保(長野県教育委員会)、村田幸子(大阪府文化財調査研究センター)の各氏から有益なご教示を賜った。末筆ながら記して感謝の意を表します。

(菅榮太郎)

註)

(1)讃良川遺跡の資料については、塩山則之氏、濱田延充氏(寝屋川市教育委員会)のご厚意により実見させていただいた。

(2)有茎尖頭器と考えられるAC491を、本報告書の編集者は石鏃に分類している。

(3)長原遺跡においては、サヌカイト製のほかチャート製の有茎尖頭器が2点出土している。

表22－1　打製石鏃・有茎尖頭器観察表（その１）

遺物番号	出土層位（ＮＧ）	型式		最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	風化度	剥離技法	時期	備考
AB46	8B	凸基無茎	G-2	44.00	12.80	4.10	1.88	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-2	弥生III～IV	
AC92	8B	凸基無茎	G-2	40.85	14.50	4.30	2.18	ｻﾇｶｲﾄ（金山）	C	a-1	弥生III～IV	
AC96	9A	円基無茎	G-2	31.80	11.95	4.15	1.54	ｻﾇｶｲﾄ	C	b-3	弥生II～III	
AQ49	9A	尖基無茎	G-1	46.20	18.80	3.90	2.81	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	弥生Ⅰ末～II	作用部を鋸歯状に整形
AE288	9A(8C＊)	尖基無茎	G-1	(37.85)	16.70	4.20	(2.19)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-2	弥生Ⅰ末～II	切先一部欠損
AG80	9A	尖基無茎	G-1	35.00	17.15	4.45	2.43	ｻﾇｶｲﾄ	C	b-2	弥生Ⅰ末～II	作用部を鋸歯状に整形
AC105	9A	平基無茎	E-2	30.60	15.40	5.30	1.82	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	弥生Ⅰ末～II	
AL133	9A	平基無茎	E-2	33.45	13.85	3.75	1.35	ｻﾇｶｲﾄ（金山）	B	b-1	弥生Ⅰ末～II	讃岐地域からの搬入品
AH34	9A	平基無茎	E-2	19.90	17.70	4.20	1.03	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	弥生Ⅰ末～II	未完成品である可能性あり
AC98	9C	平基無茎	E-1	28.45	16.00	3.65	1.39	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-2	縄文晩期	五角形鏃の1種
AB70	9C	平基無茎	E-2	30.50	19.50	3.90	1.65	ｻﾇｶｲﾄ（質不良）	C	b-1	縄文晩期	片面の体部中央が磨滅．側縁部に抉り
AC110	9C	凹基無茎	F	23.35	15.00	4.00	1.07	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文晩期前半	側縁一部欠損（新欠）
AC116	9C	凹基無茎	F	27.60	16.60	5.05	1.48	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-4	縄文晩期前半	
AC106	9C	凹基無茎	F	(21.10)	(14.05)	3.35	(0.90)	ｻﾇｶｲﾄ（質不良）	B	a-1	縄文晩期前半	切先基部一部欠損（基部新欠）
AD191	9C	平基無茎	E-1	20.90	13.50	3.30	0.75	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文晩期	
AC112	9C	凹基無茎	D-2	24.20	18.70	3.75	1.12	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	縄文後期後半	切先を鋭く整形
AE289	9C	凹基無茎	D-2	27.60	21.30	4.00	1.43	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文後期後半	側縁一部欠損（新欠）
AE292	9C	凹基無茎	D-2	22.15	(13.65)	2.60	(0.59)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	縄文後期後半	切先を鋭く整形．逆刺片方欠損
AE299	9Clw	凹基無茎	B-1	23.55	(16.20)	3.30	(0.79)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-2	縄文後期	逆刺一部欠損
AC115	9Clw	凹基無茎	B-1	17.90	14.55	2.75	0.41	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期	
AG86	9C	凹基無茎	B-2	(23.15)	(15.75)	2.40	(0.64)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	縄文後期後半	逆刺双方一部欠損
AB65	9C	凹基無茎	B-1	29.55	16.95	3.35	1.03	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文後期	捩じれたような成形．側縁一部欠損
AE386	12A	凹基無茎	B-2	29.75	(21.40)	5.25	(2.12)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-4	縄文中期後半	切先を鋭く整形．逆刺一部欠損
AB68	12A	凹基無茎	B-2	21.40	13.00	3.05	0.62	ｻﾇｶｲﾄ（質不良）	B	c-2	縄文中期後半	捩じれたような成形．左右不対称
AB69	12A	凹基無茎	B-2	25.45	17.30	2.50	0.82	ｻﾇｶｲﾄ	A	b-1	縄文中期後半	切先を鋭く整形
AB98	12A	凹基無茎	B-2	24.25	19.50	3.85	1.48	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期後半	切先欠損後に再整形？
AB66	12A	凹基無茎	B-1	(27.50)	(19.10)	2.50	(0.83)	ｻﾇｶｲﾄ	A	a-4	縄文中期後半	切先欠損（新欠）．逆刺一部欠損
AC129	12A(10＊)	凹基無茎	B-2	(22.95)	16.95	3.40	(0.83)	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文中期後半	作用部を鋸歯状に整形．切先一部欠損
AB133	12A	凹基無茎	B-1	20.35	(17.10)	2.65	(0.70)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期後半	逆刺一部欠損（新欠）
AC114	12A	凹基無茎	B-2	(24.25)	19.80	3.70	(1.14)	ｻﾇｶｲﾄ	B	b-1	縄文中期後半	切先一部欠損
AB95	12BC	凹基無茎	B-1	32.40	14.45	3.35	0.88	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期前半	作用部を鋸歯状に整形
AC144	12BC	凹基無茎	B-1	26.00	17.15	3.75	1.16	ｻﾇｶｲﾄ	B	b-1	縄文中期前半	
AC172	12BC	凹基無茎	B-1	22.90	17.40	2.70	0.72	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文中期前半	
AB120	12BC	凹基無茎	A-2	17.40	(15.00)	2.25	(0.38)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	縄文前～中期	逆刺片方欠損
AB94	12BC	凹基無茎	B-2	(16.10)	12.95	2.55	(0.42)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期前半	切先欠損
AE328	12BC	凹基無茎	B-2	(20.0)	15.25	3.70	(0.83)	ｻﾇｶｲﾄ	B	c-1	縄文中期前半	切先一部欠損
AD157	12BC	凹基無茎	D-1	18.55	12.25	2.50	0.30	ｻﾇｶｲﾄ	AA	不明	縄文早～前期	風化顕著．剥離単位の判別は困難
AC154	12BC	凹基無茎	B-1	21.60	11.10	2.25	0.37	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-4	縄文中期	逆刺一部欠損（新欠）
AB91	12BC	凹基無茎	A-1	18.10	20.75	4.10	0.98	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-3	縄文前～中期	
AQ50	12／13	凹基無茎	B-1	32.05	19.65	3.85	1.59	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文前期	やや大形
AE373	(12／13)	凹基無茎	B-1	30.25	14.65	4.30	1.17	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-4	縄文前期	
AB104	12／13	凹基無茎	A-2	16.95	21.20	2.80	0.59	ｻﾇｶｲﾄ	B	c-1	縄文前期	
AE491	12／13	有茎尖頭器		(31.80)	(19.30)	5.25	(3.04)	石英	A	b	縄文草創期	有茎尖頭器の押圧剥離技法．小形品？
AC94	12／13	凹基無茎	B-1	(28.55)	(24.45)	3.05	(1.47)	ｻﾇｶｲﾄ	B	b-3	縄文前期前半	切先逆刺欠損．大形石鏃
AQ48	12／13	凹基無茎	B-1	35.95	16.50	4.00	1.52	ｻﾇｶｲﾄ（質不良）	A	c-1	縄文前期	左右不対称
AC99	12A～12/13	凹基無茎	D-2	21.65	(10.20)	2.50	(0.40)	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文中期後半	逆刺片方欠損（新欠）
AC139	12A～12/13	平基無茎	F	22.55	14.30	4.15	1.12	ｻﾇｶｲﾄ（金山?）	C	c-1	縄文晩期前半	
AC132	12A～12/13	平基無茎	F	23.72	16.20	3.95	1.17	ｻﾇｶｲﾄ（金山?）	C	c-1	縄文晩期前半	
AC140	12A～12/13	凹基無茎	D-2	18.35	13.10	2.60	0.44	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-4	縄文中期後半	逆刺一部欠損（新欠）
AE476	12A～12/13	凹基無茎	B-2	(19.30)	17.85	3.45	(1.22)	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-3	縄文中期	体部上半欠損
AE442	12A～12/13	凹基無茎	B-1	(26.70)	(15.00)	2.40	(0.86)	ｻﾇｶｲﾄ	C	b-1	縄文中期	切先逆刺一部欠損．薄い剥片を使用
AC113	12A～12/13	凹基無茎	B-1	(21.30)	17.70	2.50	(0.74)	ｻﾇｶｲﾄ（質不良）	B	a-1 or c-1	縄文中期	切先基部一部欠損

表22－2　打製石鏃・有茎尖頭器観察表（その２）

遺物番号	出土層位（ＮＧ）	型式		最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	風化度	剥離技法	時期	備考
AC165	12A～12/13	凹基無茎	B-1	(20.35)	14.70	3.40	(0.77)	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文中期	切先一部欠損（新欠）
AC135	12A～12/13	凹基無茎	B-2	22.10	15.40	2.85	0.72	ｻﾇｶｲﾄ	B	c-1	縄文中期	
AC104	12A～12/13	凹基無茎	C-2	24.95	13.15	1.90	(0.43)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期	逆刺一部欠損
AC242	12A～12/13	凹基無茎	B-2	26.90	19.05	3.25	1.00	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-4	縄文中期	
AC130	12(10＊)	凹基無茎	C-2	(18.55)	16.55	2.95	(0.98)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文中期	体部上半欠損
AB107	12A～BC	凹基無茎	C-2	31.30	13.85	3.60	1.30	ｻﾇｶｲﾄ	A	a-1	縄文中期	切先一部欠損（新欠）
AE392	12A～12/13	凹基無茎	B-1	18.25	14.05	2.65	0.39	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文前～中期	
AF54	12A～12/13	凹基無茎	B-1	19.90	15.70	3.40	0.61	ｻﾇｶｲﾄ	C	b-2	縄文前～中期	逆刺一部欠損（新欠）
AE492	12A～12/13	凹基無茎	B-2	(26.65)	17.75	2.80	(0.82)	ｻﾇｶｲﾄ	B	c-2	縄文中期	体部中央で折損（新欠）
AC186	12A～12/13	凹基無茎	B-1	(19.85)	(13.05)	3.00	(0.63)	ｻﾇｶｲﾄ（金山?）	B	a-4	縄文中期	切先逆刺一部欠損
AC244	12A～12/13	凹基無茎	A-1	(15.80)	16.05	3.05	(0.56)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文前～中期	切先欠損
AC243	12A～12/13	凹基無茎	B-1	(20.05)	19.10	2.70	(0.89)	ｻﾇｶｲﾄ	C	b-1	縄文前～中期	切先欠損
AB108	12A～BC	凹基無茎	A-2	19.50	19.40	3.35	0.92	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文前～中期	切先一部欠損（新欠）
AE412	12A～12/13	凹基無茎	C-1	18.65	(13.70)	2.30	(0.37)	ｻﾇｶｲﾄ	A	a-4	縄文前～中期	逆刺一部欠損（新欠）
AE401	12A～12/13	凹基無茎	A-1	20.40	(16.00)	3.25	(0.52)	ｻﾇｶｲﾄ	A	b-1	縄文前～中期	逆刺一部欠損（新欠）
AE345	12A～12/13	凹基無茎	C-1	17.65	14.30	3.65	0.54	ﾁｬｰﾄ	C	b-1	縄文前～中期	丁寧に整形．搬入品の可能性あり
AD151	12A～12/13	凹基無茎	D-1	(17.50)	13.55	2.75	(0.37)	ｻﾇｶｲﾄ	B	c-1	縄文早～前期	切先一部欠損（新欠）
AF51	12A～12/13	凹基無茎	A-1	18.70	(16.55)	2.35	0.60	ｻﾇｶｲﾄ	B	b-1	縄文前～中期	基部一部欠損
AC245	12A～12/13	凹基無茎	A-1	16.65	15.15	3.25	0.65	ｻﾇｶｲﾄ	A	a-1	縄文前～中期	
AD154	12A～12/13	凹基無茎	A-2	15.85	(11.35)	2.90	(0.47)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄文前～中期	逆刺片方欠損．階段状剥離顕著
AF53	12A～12/13	凹基無茎	D-1	26.50	19.20	4.00	1.01	ｻﾇｶｲﾄ	B	b-1	縄文早～前期	
AC257	12A～12/13	凹基無茎	D-1	26.50	(16.40)	3.00	(0.75)	ｻﾇｶｲﾄ	B	a-1	縄文早～前期	逆刺片方欠損
AC262	12A～12/13	凹基無茎	D-1	24.90	(11.25)	2.60	(0.38)	ｻﾇｶｲﾄ	A	b-2	縄文早～前期	逆刺片方欠損．側縁一部欠損（新欠）
AE526	12A～12/13	凹基無茎	B-1	(40.75)	21.60	4.60	(2.62)	ｻﾇｶｲﾄ	C	b-3	縄文前期前半	大形石鏃．押圧剥離単位大
AC236	12A～12/13	凹基無茎	C-1	31.00	17.00	4.15	1.43	ｻﾇｶｲﾄ	B	b-1	縄文早～前期	細かく丁寧な押圧剥離
AC131	12A～12/13	凹基無茎	A-1	20.00	17.80	3.30	0.86	ｻﾇｶｲﾄ（質不良）	C	a-3	縄文前期	
AG85	1	有茎	H	48.00	13.10	6.70	4.12	ｻﾇｶｲﾄ（金山?）	C	b-2	弥生Ⅲ～Ⅳ	非常に肉厚
AL194	7	有茎	H	51.15	14.85	6.15	4.05	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-2	弥生Ⅲ～Ⅳ	2次堆積により体部表面磨滅
AL200	7	有茎	I	43.25	20.65	5.20	3.69	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-4	弥生Ⅲ～Ⅳ	
AL128	2-4	有茎	I	31.10	16.60	4.40	1.83	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	弥生Ⅲ～Ⅳ	
AM27	2	----	---	15.70	12.00	2.20	0.40	ｻﾇｶｲﾄ	C	a	弥生？	製作中途破棄品である可能性あり
AE212	7	尖基無茎	G-2	(30.70)	14.60	4.30	(1.98)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-3	弥生Ⅲ～Ⅳ	基部側縁にﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞ．切先基部欠損
AE528	層位不明	有茎	(I)	(19.90)	(17.40)	(4.60)	(1.36)	ｻﾇｶｲﾄ	C	不明	弥生Ⅲ～Ⅳ	有茎鏃の茎部のみ残存
AH37	層位不明	有茎	I	(25.95)	17.30	3.70	(1.34)	ｻﾇｶｲﾄ（金山?）	C	b-1	弥生Ⅲ～Ⅳ	両面に大きな主要剥離面残存
JAE18	12	----	---	26.45	(17.80)	2.40	0.89	ｻﾇｶｲﾄ	C	不明	縄文？	製作中途破棄品．薄い剥片を使用
AF13	8B(8A＊)	有茎	I	50.20	23.05	8.00	6.56	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-3	弥生Ⅲ～Ⅳ	大形で重厚
AL135	9	平基無茎	E-1	(26.00)	(17.70)	3.95	(1.44)	ｻﾇｶｲﾄ	C	c-1	縄晩～弥前	切先基部一部欠損（基部新欠）
AL125	2-4	平基無茎	E-2	(24.10)	6.10	4.15	(1.23)	ｻﾇｶｲﾄ	C	a-1	縄晩～弥前	切先一部欠損（新欠）

註）

1）**出土層位**の＊印は、出土層位が水成層であるＮＧ８Ａ層・８Ｃ層・９Ｂ層・１０・１１層であり、陸上成層である直下の地層に読み換えた層位であることを示す。

2）**型式・剥離技法**の分類は、本文中で示した分類基準による。

3）**最大長・最大幅・最大厚**において、各部位の欠損により正確な数値の計測が困難な資料については、現存値を（　）で囲んで表わした。

4）**重量**は電子天秤により100分の１ｇまでの重さを計測した。なお、各部位の欠損により正確な重量の計測が困難な資料については、現存値を（　）で囲んで表わした。ただし、欠損部位の割合が微小で復元値と大きく差がないと判断した資料については、そのままの数値を表わした。

5）**石材**は、すべて裸眼での観察による。なお、石材は蛍光Ｘ線分析等で分析することにより、一層厳密な産地同定が可能である。

6）**風化度**の基準は、例えばサヌカイトでは、灰色または黒灰色を呈しほとんど風化が進んでいないものをＣ、灰白色を呈し相当風化の進んだものをＡ、その中間でやや風化の進んだものをＢとした。また、剥離単位の判別が困難なほど風化が著しいものはＡＡとした。その他の石材はサヌカイトの例に準じた。なお、観察はすべて裸眼による。

7）**備考**には、各資料に特記すべき事項（資料の特徴および各部位の欠損状況等）がある場合に記した。

第３節　南口古墳の墳丘外部施設の復元と長原古墳群における位置づけ

今回の南口古墳(長原古墳群 181 号墳)の調査範囲は、古墳全体の約 1／3 にも満たなかったが、全長約34.3m、墳丘の回りに馬蹄形の周濠を巡らせた帆立貝形の前方後円墳であることが判明した。また、古墳の時期は周濠から出土した須恵器や埴輪類などから 6 世紀の中葉とみられ、長原古墳群の中ではもっとも新しいの古墳の一つであることも明らかとなった。ここでは埴輪類や須恵器、一部の木製品などの出土状況からみた古墳の外部施設の復元と、長原古墳群における南口古墳と七ノ坪古墳の位置付けをしておきたい。

１．古墳の外部施設の復元

南口古墳の墳丘は古代の水田の開発によってその大半が削られていたが、一部で墳丘の盛土や外堤が確認されたほか、周濠内から円筒埴輪や形象埴輪のほか、須恵器・土師器・韓式系土器・木製品などが比較的まとまって出土した。なお、本古墳の埋葬施設については調査区が後円部の中心よりやや東にずれていたこともあって痕跡すら確認されなかった。また、葺石についても石材が出土しなかったことから存在しないものと考えられる。以下、円筒埴輪や形象埴輪の出土状況を検討しながら古墳の外部施設についてみることにする。

１)埴輪類

円筒埴輪は南周濠の外堤から検出された３本を除いて原位置を保っていたものは確認されなかった。また、後円部および前方部前面の円筒埴輪の一部は墳丘や外堤から周濠内に転落した状態で出土したが、これ以外のものは周濠内に堆積した長原 7B 層上半部の上部や上位の 6B 層内をはじめ、くびれ部の斜面から遊離した状態で出土した。今回は、墳丘周辺および周濠の円筒埴輪の分布状況を考慮して、円筒埴輪は墳丘および外堤に樹立されていたものと想定したい。そのばあいの円筒埴輪の使用本数は、外堤と同様に40cm間隔で樹立されていたと仮定すると 150 本前後になると概算される。

次に形象埴輪であるが、南口古墳では人物・馬・家・盾・衣蓋・甲冑など各種の形象埴輪が出土している。これらが出土した位置は南周濠(盾・石見型盾・甲冑・家・馬・人物)、くびれ部(盾・石見型盾・衣蓋・家・人物・馬)、東側墳丘斜面・東周濠(盾・石見型盾・家・馬)の３個所であり、特に南周濠およびくびれ部に集中する傾向がうかがわれた。なお、形

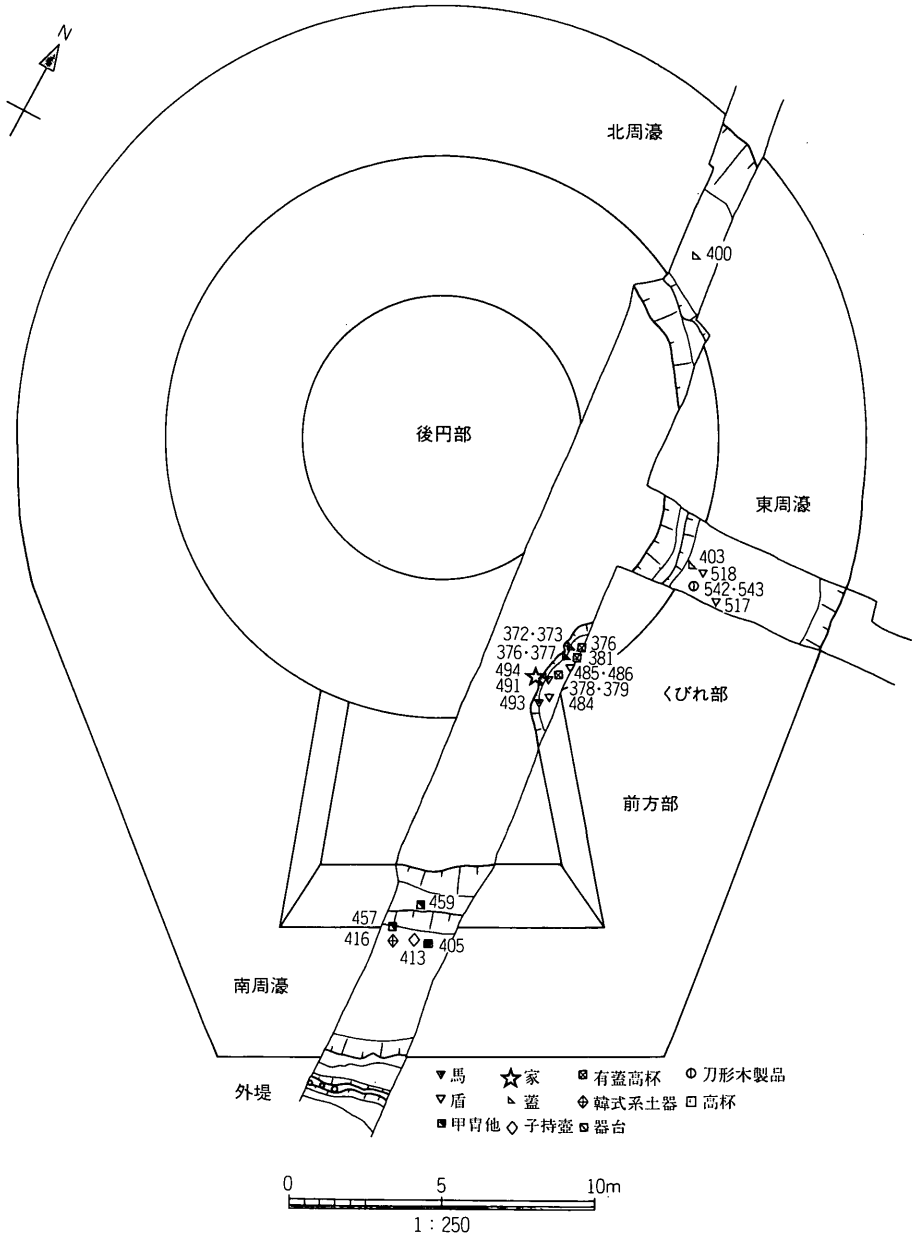


図198　南口古墳形象埴輪・須恵器ほか分布図

象埴輪の多くは破片であり原位置を保ったものは確認されなかったが、くびれ部では出土状況からみて墳丘から転落したと考えられる。また、人物・衣蓋・甲冑などの中には同一個体と思われるものが墳丘および周濠内に広範囲に分布しており、埴輪本来の位置を復元しがたいものもあった。図198は調査時に個体別に取上げられた出土地点の明確な形象埴輪

についてのみ示したものである。くびれ部の馬形埴輪の足493・頭494、東周濠の鞍517・障泥518などは２個体分の破片であり、出土位置からみてくびれ部および後円部の東側に置かれていたものと思われる。馬形埴輪とともにくびれ部から東周濠内にかけて出土した家491、石見型盾484～486・盾477などもくびれ部の東側に置かれていたものであろう。なお、前方部の南斜面から南周濠内で出土した草摺や甲冑をはじめ、石見型盾・盾・甲冑・家・馬・人物など、調査時に一括で取上げられた形象埴輪についても前方部の周辺に置かれていた可能性があるが、詳細については明らかでない。

２）土器類および木製品

南口古墳の築造時期を示すものとみられる有蓋高杯381・382・408、同蓋375～377・403および高杯の脚部405・407・409、子持ち壷413、器台脚部415をはじめ、有蓋高杯の杯部および蓋の可能性がある372・373・378・379・401・402など、TK10型式に属する一群の須恵器は、形象埴輪と同様にくびれ部および東周濠付近からかたよって出土した。このほか、南周濠から出土した韓式系土器の有蓋短頸壺416や後円部直上（長原２層下部）から出土した須恵器の瓢383、杯身380、北周濠から出土した須恵器の蓋400についても墳丘上に置かれた土器の一部であった可能性がある。また、東周濠内から出土した２点の刀形木製品も形象埴輪や須恵器などとともに付近の墳丘上に置かれていたもので、葬送儀礼や墓前祭祀に伴うものとみて大違ないであろう。

３）梶２号墳および長原131・190号墳の埴輪類

次に、南口古墳の墳丘外部施設の復元や形象埴輪の意味を考える際に参考にした大阪府守口市の梶２号墳（守口市教育委員会、1991・1994）および長原古墳群中の131・190号墳の円筒埴輪と形象埴輪の出土状況を紹介しておきたい。

梶２号墳は６世紀初頭に築造された帆立貝形の前方後円墳で、後円部の直径21.6m、くびれ部幅7.0m、周濠を含めた古墳の全長は36.9mで、墳丘の回りには馬蹄形の周濠が巡っている。ここでも埋葬施設は墳丘の大半を失った後円部では確認されていないが、前方部の南東部において組合せ式の木棺が１基検出されており、周濠内では須恵器や副葬品の一部とみられる鞍金具の破片、鉄鏃なども出土している。

この梶２号墳の周濠では円筒埴輪と形象埴輪が多量に出土しているが、このうち円筒埴輪は朝顔形埴輪とともに周濠内の墳丘側と周濠の外縁部の近くから列をなして検出されて

いる。これに対して形象埴輪は、図199に示したようにくびれ部の西側から家・大刀形埴輪が、くびれ部の東部から人物・衣蓋・盾・靭・大刀・鳥・犬・猪・鹿・牛・馬形埴輪などがまとまって出土している。このような形象埴輪の分布状況について、東西くびれ部の形象埴輪の器種が大刀形埴輪を除いてまったく違うことや、両くびれ部の形象埴輪が接合しないことから、報告者はこれらは当初からくびれ部に置かれたものであり、特に形象埴輪が集中する東側くびれ部では葬送儀礼が行われていたと指摘している。

一方、朝顔形埴輪を含む円筒埴輪群は分布状況を考慮して、墳丘上および周濠外に樹立されていたものとみられているが、西周濠については埴輪の分布密度が低いことから、周濠外の円筒埴輪はまばらに樹立されていたようである。したがって、梶２号墳では、報告者も指摘しているように、墳丘および周濠外(外堤？)には朝顔形埴輪を含む円筒埴輪が樹立されており、くびれ部から後円部の西部には家、衣蓋、大刀形埴輪が、くびれ部から後円部の東部には家３、大刀１、盾・靭・衣蓋各４、人物(男子３体以上、巫女２体)、犬１、馬２、鹿１、牛１、猪２、鶏１、鳥１？などの一群の形象埴輪が置かれていたものと考えられる。なお、報告者は特に触れていないが、東西くびれ部より出土したMT15型式の須恵器(杯身・装飾付壷・瓿・器台・甕)についても形象埴輪が集中するくびれ部の東側を中心に置

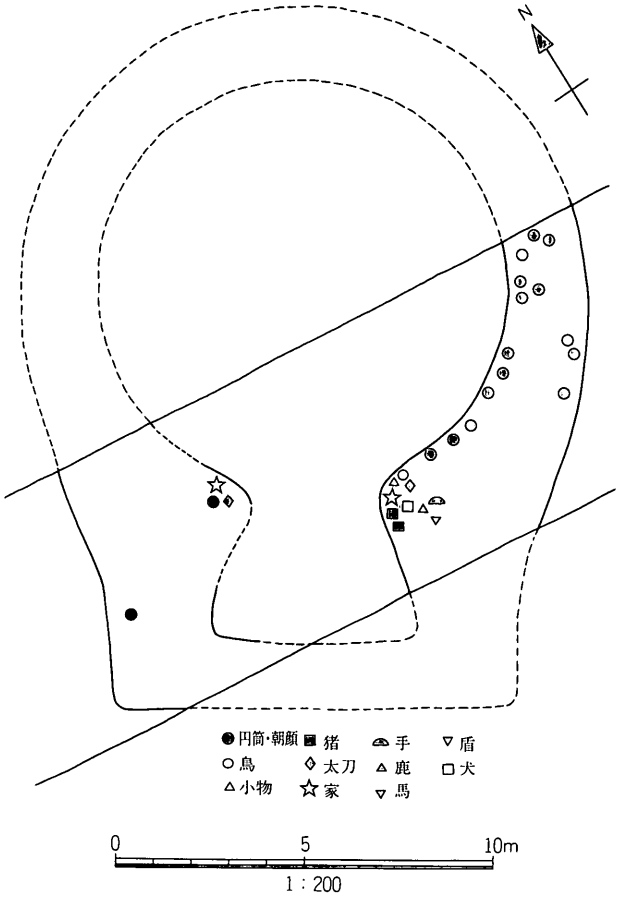


図199　梶２号墳主要埴輪類出土位置略図
(守口市教育委員会1991に加筆)

かれていた可能性がある。このほか東西くびれ部以外にも後円部の東周濠からTK10型式の完形の杯蓋、器台および装飾付筒形器台の破片が出土しているが、これらも墳丘あるいは周濠内に置かれていたもので、須恵器に見られる型式差は古墳が築造されたあとの追葬や墓前祭などが行われたことを物語るものかもしれない。このように梶２号墳は畿内地域の６世紀初頭の帆立貝形の前方後円墳における形象埴輪の組成や設置状況の実態を知ることのできる重要な古墳の一つといえるのである。

次に長原古墳群における例をみることにする。本古墳群では南口古墳の南270mに位置する５世紀後半の190号墳や、東南340mに位置する131号墳で、南口古墳の形象埴輪の配置状況に類似したものが確認されている。なかでも190号墳は墳丘の北側に造出し、周濠の外側に外堤を設けた一辺約14mの方墳で、墳丘上には円筒埴輪列が残っていた(久保和士、1992a)。ここでは造出しの基部から形象埴輪が転落した状態で、基部から墳丘の東側にかけて衣蓋・巫女が、同西側より甲冑・盾・鶏・犬などの形象埴輪が出土している。

131号墳でも円筒埴輪列の内外から盾・靭・馬・人物などの形象埴輪とともに、須恵器の甕が設置された状況で検出されており(櫻井、1993)、形象埴輪と須恵器の甕が並列された例として注目される。

帆立貝形の前方後円墳のくびれ部や方墳の墳丘を巡る円筒埴輪列の内外に、形象埴輪が配置されることが古墳時代のどの段階から始まったかについては断定しがたいが、大阪府下では遅くとも５世紀末～６世紀初頭にはこういった例が登場している。また、梶２号墳や南口古墳のような帆立貝形の前方後円墳と造出しが設けられているとはいえ方墳の長原190号墳から出土する形象埴輪が、量の違いこそあれ器種や設置場所において大差のない点は、被葬者の階層が同列視されるか否かを含めて、今後とも留意すべき問題であろう。

以上南口古墳の墳丘外部施設の復元に当って関連する諸古墳を合わせて検討した。南口古墳の墳丘は残りが悪く、円筒埴輪や形象埴輪の多くが遊離資料であったため、それらの配置状況についてはあくまで推定復元の域をでなかった。しかし、南口古墳の墳丘外部施設の主体を占める円筒埴輪や各種の形象埴輪は、その供給先や古墳が築造された６世紀中葉の埴輪がもつ意義などを究明する上で、重要な考古資料の一つといえる。

２．長原古墳群における南口古墳の性格

１)長原古墳群の築造経過

長原古墳群は長原遺跡内に所在する古墳に対する総称で、1994年度までの調査によって、

206基の古墳が確認されている(櫻井、1993)。古墳群は各古墳から出土した埴輪類や須恵器を基礎にして1～4期に大別されており、4世紀後半代の1期に属する古墳としては、直径40m以上の円墳と推定されている塚ノ本古墳1号を筆頭に、東向きの造出しを設けた直径47mで円墳の一ケ塚古墳85号、直径19.6mの円墳の高廻り2号墳170号、一辺15mの高廻り1号墳169号などがある。ついで、初期須恵器(TK73型式～ON46段階)の登場から定形化した須恵器(TK208型式)を伴う時期(2期)に、規模の不明なものを含め60基ほどの一辺7～10m未満の方墳が、さらに、5世紀の後半から6世紀の初頭の須恵器(TK23型式・TK47型式)を伴う時期(3期)に、前段階とほぼ同規模の方墳が44基築造されている。その後は内部主体が横穴式石室で、6世紀初頭の須恵器(TK47型式・MT15型式)を伴った帆立貝形の前方後円墳である七ノ坪古墳130号が、そして古墳群が終焉を向えた6世紀中葉(4期)に帆立貝形の前方後円墳である南口古墳や一辺約10mの153号墳などが築造されている。つまり、長原古墳群を形成する主たる古墳の造営期間は、塚ノ本古墳が築造された4世紀の後半から七ノ坪古墳が築造された6世紀の初頭(1～3期)以前と理解されている(櫻井、1993)。長原古墳群の主たる古墳といえる小方墳は2～3期の間に築造されたようであり、この間の古墳の被葬者は古墳群の西方および東方に位置する集落(櫻井、1993)や、長原遺跡近隣の集落の集団と係わりのある人物と推定されている。

ただし、6世紀初頭以前に築造された古墳の数は、今後の調査で確認されるであろう数を含めると300基以上に達するものと想定されること。本古墳群の南方約1.5kmには5世紀代の中央権力を把握した大王の墓域である古市古墳群が位置しており、その群形成が始まるころの古墳とされる津堂城山古墳と長原古墳群の盟主墳ともいえる塚ノ本古墳の築造時期が大差なく、その後の両古墳群の盛衰も軌を一にしていることから両古墳群の被葬者の間には密接な関係があったものと思われる。

2)七ノ坪古墳と南口古墳の性格

長原古墳群は1期の塚ノ本古墳と一ケ塚古墳を核として、これの中程を境に東西2群に分布する傾向にあり、各群中には数基の方墳で構成される小単位が存在することが指摘されている(櫻井、1993)。そして、東西2群とも小方墳の築造が終焉を向えるころ、塚ノ本古墳のある東群に七ノ坪古墳が、ついで一ケ塚古墳のある西群に南口古墳が築造されている。

東群に位置する七ノ坪古墳は、長原古墳群Ⅲ期の方墳群の築造が終わりを向える6世紀

の初頭に築造された墳丘長24.4mの西向きの帆立貝形の前方後円墳である。内部主体は片袖式の横穴式石室で、金銅製の馬具、銀象眼が施された鞘金具、鍔のある鉾など、府下の当該期の中小首長の古墳と比較しても遜色のない内容の副葬品を伴っている。さらに、七ノ坪古墳はこれまでのところ長原古墳群で最初に築造された前方後円墳である可能性が強く、塚ノ本古墳を盟主とする東群の首長系列の最終に位置する在地首長の古墳と考えられる。

一方、西群に位置する南口古墳は周濠から出土した須恵器（TK10型式）からみて、七ノ坪古墳よりやや遅れて築造された南向きの帆立貝形の前方後円墳であり、七ノ坪古墳の西方320m、方墳群の分布域よりやや離れた地点に単独で位置している。本古墳と同時期の古墳は七ノ坪古墳の北側30mに位置する小方墳の153号墳以外にはこれまでのところ確認されていない。

南口古墳の被葬者の性格については、埋葬施設が確認されていないため、上述した七ノ坪古墳に比べて不明瞭であるが、帆立貝形の前方後円墳で、円筒埴輪が樹立された外堤があり、各種の形象埴輪をはじめ、刀形木製品や有蓋高杯を主体とする供献土器、後述する馬の犠牲を伴うことなどを考慮すれば、長原古墳群の西群の首長系列の最後に位置する在地首長墓としての内容を備えた古墳といえよう。ところで、南口古墳に先行して築造された七ノ坪古墳の位置する東群では、これまでのところ同古墳に後続する６世紀中葉の首長墳は確認されていない。同様に西群においても南口古墳に先行する６世紀初頭の首長墳は確認されていないため、６世紀の第１四半紀から第２四半紀における東西両群の首長墓は東群から西群に時期を追って移った可能性もある。６世紀代の帆立貝形の前方後円墳は当時の古墳秩序体制の中においては中小首長、つまり、通常の前方後円墳を築造することが許されなかった首長層の古墳として位置づけられる。こういった前方後円墳の墳形や規模についての規制は、５世紀初頭から６世紀中頃にかけて畿内政権からその翼下の首長層に対して出されたものと想定されている（小野山節、1970）。長原古墳群でも塚ノ本古墳や高廻り１・２号墳および一ケ塚古墳などの首長墓系列に位置づけられる古墳はこういった規制が及んでいるとみることができる。つまり、長原古墳群では東西両群ともに古墳時代中期の前方後円墳体制下にあっては、通常の前方後円墳は築造されることがなく、古墳群の形成当初は大型円墳か方墳が首長の墓として採用されたものと思われる。古墳時代中期の社会は和田晴吾（1992・1995）が説くような畿内地域の大王および大首長を頂点にして、そのほかの中小首長層を政治的に序列化した「首長連合体制」であったと思われるが、このような体制にも６世前半頃、つまり長原古墳群が終焉を向えるころに変動が生じたようで

ある。

6世紀になって七ノ坪古墳や南口古墳が築造された歴史的な背景については詳細な検討を加えていないので速断しかねるが、両古墳は墳形が帆立貝形の前方後円墳であり、ともに単独墳で周辺に小型の方墳を伴っていないこと、それまでの墓域から離れた場所（5世紀後半代の集落域）に築造されていること、七ノ坪古墳は内部主体に横穴式石室を採用していることなどが特徴として指摘できる。これらの諸点を考慮すれば、両古墳の被葬者は旧来の政治秩序から脱却した首長であるとともに、当地で初めて前方後円墳の築造を容認された首長であったと考えられるが、墳形が帆立貝形であることや全長が40mにも満たない点は、当時の政権による古墳の規制を受けた結果と考えられる。このような状況は既述した守口市の梶2号墳や豊中市の新免古墳群（豊中市教育委員会、1988）をはじめ、帆立貝形古墳を盟主墳とする6世紀初頭の近畿地方の中小古墳群でも確認されており、同一地域内の首長系列の古墳に見られる墳形や規模の違いなどは、当時の社会体制や被葬者の階層差を如実に物語っているものと考えられる。以上のように、長原古墳群でもっとも新しい古墳の一つである南口古墳は、6世紀中葉における長原地域の動向のみならず、当時の社会体制を解明する上で重要な位置を占める古墳といえるのである。

本文を作成するに当っては、守口市教育委員会平野通洋・藤村瑞穂氏から梶2号墳について種々ご教示いただいた。記して謝意を表したい。

（田中清美）

第４節　南口古墳出土の円筒埴輪の分類と位置づけ

Ⅲ章では南口古墳で出土したおもだった埴輪の様相を記述した。その中で、円筒埴輪は技法の面で数種類に分けられることや、形象埴輪は器種が豊富で分布に差が認められることに関して簡単に触れた。本項では円筒埴輪に主眼を置き、口縁部とタガの形態、外面調整などから分類を行い、出土地区による偏りの有無を検証する。また、南口古墳の埴輪が長原古墳群でこれまでに出土した埴輪群の中でどのような時期に位置づけることができるのか再検討する。

１．円筒埴輪の構成要素の細分

円筒埴輪を分類するに当り、まず円筒埴輪を構成するいくつかの要素、すなわち１)口縁部の形態、２)タガの形態、３)基部の形態、４)調整技法のそれぞれの特徴を呈示した上で細分する。

１)口縁部の形態

口縁部は端部の形から大きく７つに分類することができる(図200)。

イ　口縁端部が外側へ下がっているもの

ロ　口縁端部の上面がほぼ平坦になっているもの

ハ　口縁端部が明瞭な端面をつくらず、丸くおさめられているもの

ニ　口縁端部が短く内側に屈曲しているもの

ホ　口縁端部が外側に丸く肥厚するもの

ヘ　外側に向って口縁部が短く屈曲し、かつ明瞭な端面をもつもの

ト　口縁部上面の下にタガを１条巡らすもの

これらのうちイ～ハは南口古墳で普遍的に存在するものであるが、残りのニ～ホはそれ

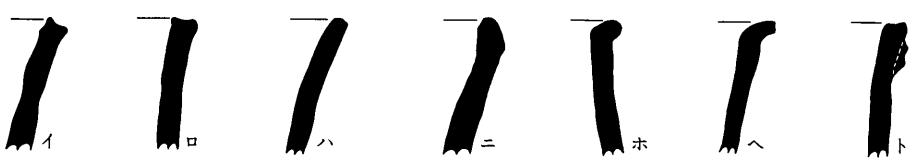


図200　口縁部の断面形態

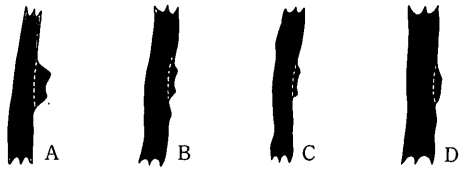


図201　タガの断面形態

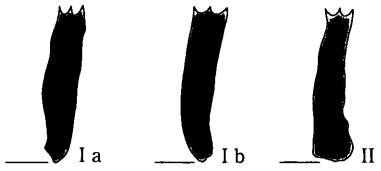


図202　基部の断面形態

ぞれ１、２片しか出土していない。特に口縁部の61％を占めるロは、長原古墳群全体に対象を拡げても散見できるものである。ロの端面に注目すると、まっすぐなものや外側へやや下がりぎみなもの、凹むものなどに細分することが可能である。しかし、同一個体でも部分によりその差は認められるため、意図的なものではないと判断し、ここでは一括して取り扱うことにする。

２）タガの形態

タガはその断面の形態から４つに分類できる（図201）。

A　胴部からタガの先端までが8㎜前後で断面形が台形を呈するもの。上辺が下辺より突出度の高いものが多い

B　胴部からタガの先端までが4㎜前後で、断面が台形を保っているもの

C　突出度はBとほぼ同じであるが、断面が不定形で端面が明瞭でないもの

D　突出度はB・Cとほぼ同じで、断面が低い三角形をなすもの

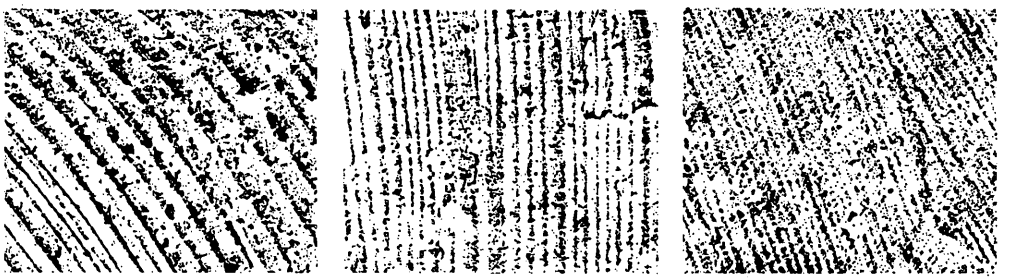
大きくはAと残りの３類に分けられ、後者が大半を占める。このほか、最下段のタガに断続ナデ技法を用いているものが数例ある。タガの上下にはタガそのものの形をなさない余分な粘土が多く付着しており、強く横方向にナデ付けられている。また、タガが波打った状態で付けられているものも多く粗雑化がめだつ。しかし、胴部からタガがはずれたものは断続ナデが使用された一例だけである。

３）基部の形態

基部は断面形態から大きく２つに分類することができる（図202）。

Ⅰ　底部調整が行われることによって、基部の先端が細くなっているもの。基底部作成の最終段階で施されるユビオサエと、埴輪の重みの加減で内側にやや屈曲するものIaと外側に屈曲するものIbがある

Ⅱ　基部がその上部よりも厚くつくられているもの



粗(3～4本／cm)　　中(6～7本／cm)　　密(10～11本／cm)

図203　ハケの種類（原寸）

基部の破片は合わせて14個体しか出土しておらず、そのうち13個体が底部調整を施すＩである。資料の増加によってさらに細分が可能になると推測されるが、Ｉが大勢を占めることは変らないと思われる。なお、Ｉについては調整の面で板状工具によるケズリとナデに二分することができる。しかし、資料数が限られている上、断面形ではほとんど差が認められないことから、今回は一括して扱うことにした。またＩの内面には、タテ方向のシボリメが基底部の中ほどまで顕著に残る。

４）調整技法

調整技法は外面調整と内面調整に分けて記述することにする(図203、図版67)。

外面調整は基底部で工具によるケズリやナデアゲ、口縁部でナデを用いる以外はタテあるいは左上がりのハケを施している。ハケの原体の幅は確認できたもので約3.5cmであった。ハケメはその粗密で３種類に分けることができる。

粗　ハケ原体の密度が1cm幅に３～４本のもの

中　ハケ原体の密度が1cm幅に６～７本のもの

細　ハケ原体の密度が1cm幅に10～11本のもの

内面調整はおもにナデを施し(図版67上段)、中にはヨコハケを用いるもの(図版67中段)や粘土紐の痕が顕著に残るもの(図版67下段)がある。円筒部からタガがはずれたものが皆無に近いことは前述したが、その一方で粘土紐の継ぎ目で剥がれた破片は多数存在し、内面調整の点でもかなり省略化が図られていることがわかる。

２．円筒埴輪の種類と地区ごとの分布状況

１）各要素の組合せによる分類

これまで、円筒埴輪のいくつかの構成要素について細分を行ってきた。ここでは、各要

素がどのように結び付くか検討することにする。ただし、基部と内面調整に関して、前者は胴部まで状態がわかるものがⅠに限られることから、また後者はナデを主に行い、一個体内で部分的にハケ調整(例；438)や粘土紐の継ぎ目(例；423)が見られることから今回は分類に加えない。

まず、口縁部とタガとハケの３つの要素に注目し観察をした結果、今回出土した埴輪では次の10通りの組合せが確認された。表示のしかたは左から口縁部－タガの形態－ハケの粗密の順である。

イ－Ａ－密(423)

イ－Ｂ－密(424)　　ロ－Ｂ－密

ロ－Ｂ－中(435)

ロ－Ｂ－粗(525)　　ニ－Ｂ－粗(521)

ロ－Ｃ－密(520)

ロ－Ｃ－中(522)

ロ－Ｃ－粗

ロ－Ｄ－粗(434)

(　)内は各組合せの一例を示し、Ⅲ章の遺物番号に一致する。

しかし、口縁部から胴部までが残存する大きな破片は数が限られているため、ほかにも組合せが存在する可能性が考えられる。またその一方で、組合せが成り立たないもので明らかになっていないものもあると思われる。そこで次に、口縁部とハケ、タガとハケの２つの要素の組合せを検討してみた。その結果をまとめたものが表23、図204・205である。分析に使用した資料総数は199個体である。口縁部をもつ胴部片は、口縁部・タガの両方でカウントしているため、表の合計では資料総数よりも多くなっている。なお、口縁部のホ・ヘ・トについては前二者には密なハケが、残りのトには粗いハケが施されている。

表23をみると、組合せのパターンとして口縁部についてはイ－粗・ハ－密、タガについてはＡ－粗は存在せず、またイ－中・Ａ－中・Ｄ－密という組合せが少ないことがわかる。逆に、組合せが成り立つものを口縁部を中心にみていくと、まず、外傾する口縁イはタガがしっかりしたＡや台形を保つＢと結び付きやすく、ハケメは細かいものが多いことがわかる。一方、ハについては、ハケメが密なものはなく、粗いものと中間ぐらいのものが同じ割合で組み合う。口縁部の大半を占めるロはすべてのハケメのものが存在し、タガについてもＡ～Ｄのいずれとも結び付く可能性が考えられる。ただし、出土した資料から設定

表23　口縁部・タガ形態別個数一覧（全体）

	口縁部			タガ			
	イ	ロ	ハ	A	B	C	D
粗	0	18	8	0	16	11	10
中	2	11	8	3	18	15	13
密	8	16	0	26	13	6	2
	10	45	16	29	47	32	25

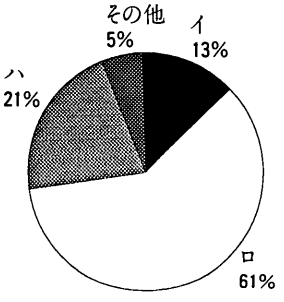


図204　口縁部の比率

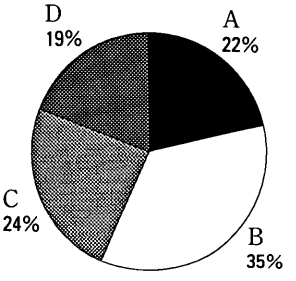


図205　タガの比率

した型式ではAと結び付くものは存在しない。その一方で、タガAは細かいハケが施されるものが多く、これは口縁イと共通する性質であり実際組合せとしても成り立っている。このことから、口縁ロにタガAが結び付くことは少ないと考えられる。

実際の資料では10通りのパターンが考えられたが、この分析からイ－AB－細の組合せの独自性がきわだつとともに、口縁ロに伴う組合せの多様性や占める割合の大きさが明らかになったと思う。また、ハ－CD－粗という組合せも成り立つ可能性も高くなった。しかし、南口古墳のごく一部の、しかも破片資料をもとに検討したことであるから、これらの10をこえる組合せがすべて工人集団、あるいは工人の違いを指し示すようなものとは考えていない。特に、口縁ロをもつものの優位性に関してはこの調査区でのみいえるとも考えられ、組合せの多様性についても製作の上での分業体制の在り方、たとえば円筒部をつくる人間とタガを付ける人間が異なる、といった状況を推測すると組合せはかなり少なくなる。また、口縁ロからなる組合せと、それに対峙する形で口縁イや口縁ハからなる組合せを設定してきたが、胎土の面では粒子の大きさで差が認められるものの組成そのものは非常に類似している。焼成はいずれの埴輪も同じで、同じ窯で焼きあげた可能性が考えられる。以上からこれらの関係は緊密なものであったと思われる。ただし、この口縁イ～ロに基づく大きな3区分(仮に型式とする)についてはハケ原体によっても裏付けられており、少なくとも、3つの互いに密接な関係をもつ生産者の単位があったと思われる。

2)地区ごとにみた円筒埴輪

88－54次調査で出土した埴輪のうち、原位置を保っていたものは3個体にすぎない。その上大半が破片資料である。しかし、埴輪自体があまり磨滅をしていないため、本来並べられていた位置からあまり動いていないものと考えられた。そこでここでは特にハケの粗密(口縁イ～ハに伴う型式)に注目し、各地区の分布状況をみていくことにする(図206、表24)。

(1)　2区南周濠外堤

南周濠外堤で分析が可能な資料は口縁部が3点、タガをもつ破片が6点(うち基底部が4点)のみである。そのため、結果はあくまで参考資料に過ぎない。口縁部ではイ－中が2点、ロ－中が1点である。タガをみてみるとB－中が1点あるだけで、残りはC－中である。外堤出土の埴輪の特徴は、ハケがすべて1cm幅に6～7本の中間のもので、タガはCが多いことである。

(2)　2区南周濠・南側墳丘斜面

南周濠および南側墳丘斜面で分析した資料は口縁部が29点、胴部が51点である。

口縁部に注目すると、形態では外傾するイはほとんどなく、ロとハで型式の成り立つものは4～6個体で

表24　地区別にみた口縁部とタガの状況

		口縁部			タガ			
		イ	ロ	ハ	A	B	C	D
南周濠・墳丘	粗	0	6	4	0	5	5	6
	中	0	4	4	0	7	3	8
	密	2	5	0	13	2	0	0
		2	15	8	13	14	8	14
くびれ部	粗	0	3	0	0	5	0	0
	中	0	1	0	0	2	0	0
	密	2	3	0	4	3	0	0
		2	7	0	4	10	0	0
東周濠・墳丘	粗	0	3	0	0	1	3	0
	中	0	1	2	3	4	4	1
	密	4	4	0	8	5	3	0
		4	8	2	11	10	10	1
北周濠・墳丘	粗	0	6	4	0	5	3	4
	中	0	5	2	0	5	8	4
	密	0	4	0	1	3	3	2
		0	15	6	1	13	14	10

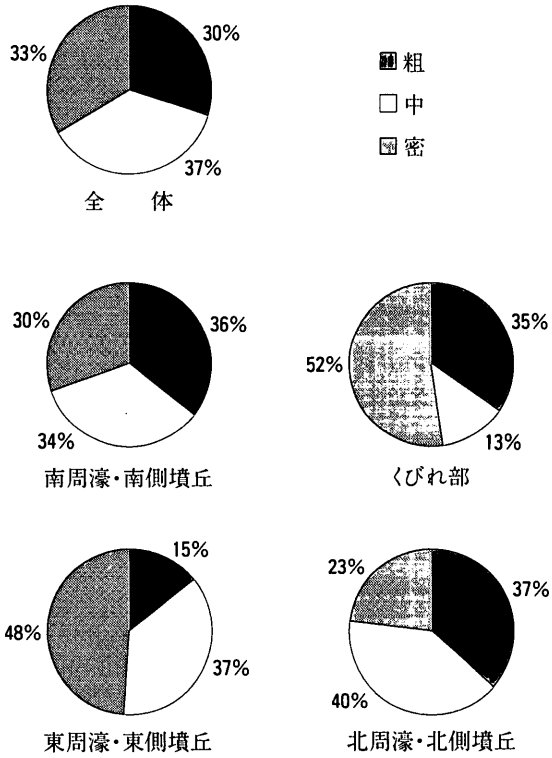


図206　地区別にみたハケの粗密の比率

ほぼ同数の割合で存在する。タガをみると、A－密の個数がもっとも多い。この結果は口縁部のイが少ないことと矛盾しているようにも思われる。しかし、南口古墳の段階では一括成形が基本で、実際途中でハケの原体を変えている例は認められなかったため、本来口縁イの占める割合はもう少し大きかったと考えるのが妥当である。ほかのタガについては、組合せが実際に1)で確認できたものは満遍なく存在する。ハケの比率をみてみると、粗・中・密の割合が拮抗しており、南口古墳全体で見た比率とよく似た傾向を示している。

(3)　2区くびれ部

くびれ部で分析した資料は口縁部が14点、胴部が14点である。

くびれ部では口縁ハ、タガC・Dが認められず、表24では非常に偏った分布をすることがみて取れる。ハケの比率で比べてみても、中間の粗さのハケの割合が南口古墳全体での比率の約1／3でしかないのに対し、くびれ部では13%である。また、密なハケの割合が半分以上を占めている。

(4)　4区東周濠・東側墳丘斜面

東周濠および東側墳丘斜面で分析した資料は口縁部が15点、胴部が31点である。

くびれ部ほど偏りは見られないが、口縁ハ、タガDの個数が少ない。ハケの比率をみると、中間の粗さのハケは全体の比率と変らないが、密なハケが約半数を占め、粗いハケの占める割合が15%にすぎない。

(5)　3・5区北周濠・北側墳丘斜面

北周濠および北側墳丘斜面で分析した資料は口縁部が20点、胴部が38点である。

口縁部に注目するとイが存在しない。また、タガはDの占める割合がB・Cと変らないのに対し、タガAは1点しか出土していない。ハケの比率をみてみると、タガAが少ないことが反映され、密なものの割合が全体の比率よりも10%少なくなっている。

これまで各地区ごとに円筒埴輪の様相をみてきた。その結果、地区によりハケの粗密しいては、その上に成り立つ埴輪の型式の分布に偏りがあることがわかってきた。まず、南周濠・南側墳丘斜面はほぼ南口古墳全体の状況と変らないが、くびれ部や東側周濠・東側墳丘では密なハケの比率が約半分を占め、特に前者では中間の粗さのハケが全体の13%にすぎない。一方、北周濠・北側墳丘斜面では密なハケの割合が少ない。これをいい換えれば、南周濠・南側墳丘斜面では口縁イ～ハに伴う型式の埴輪がほぼ同じ割合で存在し、くびれ部と東周濠・東側墳丘斜面ではイ型式が大勢を占め、北周濠・北側墳丘斜面では反対にイ型式がほとんど存在しないということになる。今回の調査は南口古墳のごく一部の調

査であるために、厳密なことはいえないが、破片資料でも分布の差が確認できた。

3．南口古墳の埴輪の位置づけ

長原古墳群の円筒埴輪については、すでに多くの検討がなされ編年案も示されている(猪熊朝美、1978；鈴木秀典、1978；田中清美、1982；積山洋、1992)。もっとも新しい積山(1992)の編年に照らし合わせると、南口古墳は4式に相当する。この4式はD類に属する埴輪からなる。すなわち外面はタテハケの一次調整のみで、タガは低く口縁部は直立ぎみで、基底部に断続ナデや板状の工具によるケズリがしばしば用いられることが特徴で、川西(1978・1988)の編年のⅤ期の規準とほぼ共通している。ただし、川西編年ではTK23型式からこの種の埴輪が出現するとするのに対し、長原地域では1段階早いTK208型式から始まることが特徴であるとされている。しかし積山編年で問題になるのは、TK208型式～TK10型式までの埴輪が一型式で扱われていることである。そのため、細かい古墳の年代は須恵器に頼らなければならないのが現状である。南口古墳に共伴する須恵器はTK10型式と考えられることから、4式でももっとも新しい時期に位置づけられる。そこでここでは、南口古墳の埴輪がほかの4式の埴輪、特に古い型式の須恵器と共伴するものと差が認められるかどうかを検討する。

長原古墳群の中で4式の埴輪をもつ代表的な古墳としては、3・27・57・60・63・84・131・153・190号墳があげられる。なお、200号墳までの古墳の内容については大阪市文化財協会(1993)で一覧表にまとめられているので参照していただきたい。これらの古墳で190号墳が外堤・造出しをもつ以外、ほかはすべて小型の方墳である。このうち、57号墳はON46段階～TK208型式、63・84号墳はTK23型式、3・131・190号墳はTK23型式～TK47型式、27・60号墳はTK47型式、153号墳はTK10(TK47)型式の須恵器が共伴している。

次に注目されるのは埴輪の器種構成で、特に朝顔形埴輪の存在に関してである。ほかの形象埴輪はその所持如何で、古墳のランク等の問題も考える必要が生じてくる。しかし、朝顔形埴輪は4式以前の古墳では普遍的に見られるものであり、その欠落は時期的なものと考えてよいと思われる。そこで実際にこれらの古墳で朝顔形埴輪の有無をみてみると、3・131・190号墳までは見られるが、それ以後の古墳では出土していない。

また、朝顔形埴輪が消滅する前後に、円筒埴輪に変化が起っている。それまで、口縁部が胴部からまっすぐに立上がり、端面が平坦な口縁口が主体であったのに対し、口縁部が

外反する円筒埴輪、すなわち口縁イと設定したものの比率が徐々に増してくる。円筒埴輪の基底部についても、ヘラや板状の工具でナデ上げたりするいわゆる底部調整が施されるようになってくる。84号墳の段階から底部調整を用いる例が出現するようであるが、全体に占める割合はさほど大きくなく、大半はタテハケの一次調整で基部が厚いものが占めている。ただし、TK10型式の須恵器を伴う153号墳で出土した埴輪の基底部も、タテハケのみであることから、小型の円筒埴輪には最後まで底部調整が行われない可能性も考えておかなければならない。しかし、206号墳の墳丘のわきから出土した小型の円筒埴輪には底部調整がなされている。なお、206号墳の周濠からはMT15型式の須恵器が出土している(未報告)。

最下段のタガに断続ナデや押圧技法が施されたものは27号墳から見られる。また、前述した206号墳の資料にも押圧技法が用いられている。

これらの指標に今回南口古墳で出土した埴輪の状況を重ね合わすと、①朝顔形埴輪が欠如する、②口縁イが全体の13%を占める(図204)、③基底部は底部調整を施したものが大半

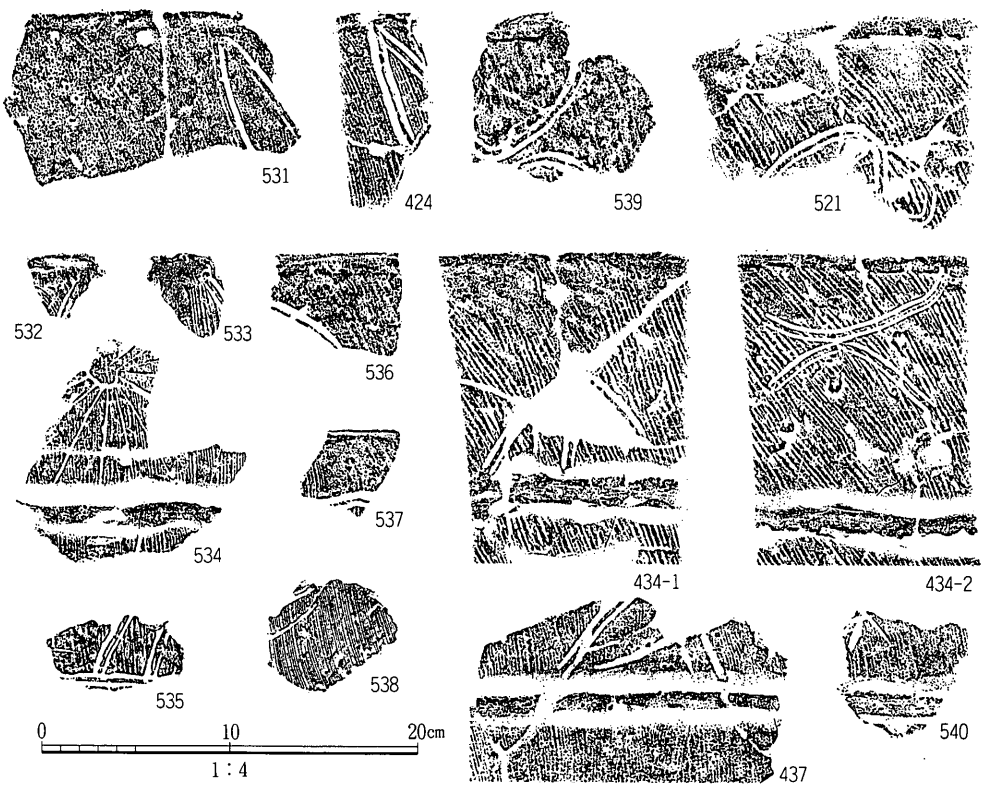


図207　南口古墳の円筒埴輪に施されたヘラ記号

を占める、④最下段のタガに断続ナデ技法や押圧技法が認められる、といった結果が得られる。以上のことから、埴輪だけに注目しても、南口古墳はもっとも新しい様相を呈しているといえる。

また、ヘラ記号の面でもほかの4式の埴輪とは違いが見られる。ヘラ記号を施した円筒埴輪は、84号墳や131号墳で多く見られるが、記号自体は「U」字形や「X」・「Y」といった単純なもので種類も限られている。一方、南口古墳のヘラ記号(図版66、図207)は模様が複雑で多岐にわたっている。類例を周辺地域の資料で探しているが、現在のところ見つかっていない。

これまで、南口古墳の円筒埴輪の様相を概観した上で分類し、出土地区により型式の偏りがあることを呈示した。また、長原古墳群の埴輪の中でも器種構成や技法の面から、新しい特徴を備えるものであることを再確認した。しかし、今回はあくまで長原地域で出土した資料に基づいた検討であり、周辺地域の埴輪との比較や胎土分析を含めた化学的な分析を行うところまで言及するにはいたらなかった。これらは今後の課題としておく。

(辻美紀)

第５節　南口古墳出土のウマについて

南口古墳の南周濠から特異な状況で出土したウマの前肢骨をはじめとして、多くのウマ遺体が出土した。本小文では、これらの出土状況を検討し、当時、南口古墳にどのように馬が配置されていたのかを復元し、馬を犠牲とした葬送儀礼が行われた可能性を述べ、その意義について考えてみたい。

１．出土資料の層位的関係

南口古墳から出土した動物遺体は南周濠内に限られ、他の施設からの出土資料はない。また、同定できた資料はすべてウマ遺体である(表8)。最初に、各資料が出土した地層と遺構の層位的関係について整理しておく(図208)。

前肢骨が出土した周濠下位のSD728は墳丘裾に沿う浅い溝で、周濠底の加工時形成層(長原 7B 層上半部の下部)を切ると観察されている。長原 7B 層上半部の下部とされる埋土は長原 7B 層や長原 13 層以下に由来する偽礫からなり、墳丘縁辺の盛土とは区別できないのでこれと連続する客土と考えられる。したがって、SD728は古墳の築造が始まって後のある時期から完成までの期間に存在した溝であるといえる。同様な溝が東・北周濠でも見られるので、これらは前方後円形の墳丘裾を全周する一連の溝と推定され、古墳の築造に関するものと考えられる。

前肢骨の一部および多数の歯が出土した南周濠の機能時堆積層(長原 7B 層上半部の上部)は、層位的にSD728よりも上位で、両者の間には薄い水成層である長原 7B 層上半部の中部が堆積している。長原 7B 層上半部の上部と中部が古墳完成後に堆積した地層であり、上部には墳丘上にあったと考えられる埴輪や土器類が多く含まれているので、上部の堆積時に

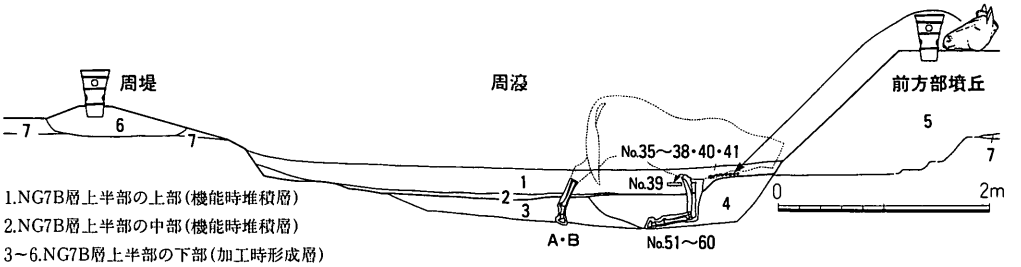


図208　資料の出土状況と配置状況（案）の模式図

は墳丘の浸食と崩壊が活発化していたのだろう。

2．出土状態の整理と各資料の解釈

はじめに、各部位の出土状態を整理し、各資料の関連性の解釈を行いたい。

まず、交連した左右の橈骨中央より遠位の前肢骨がSD728中で0.3mの間隔で揃って出土した。この間隔は推定体高129cmのウマが生体時に直立した左右両脚の間隔と同等かやや広い。左右の前肢骨はともに手根関節で折れ曲がっており、ここから遠位は前側を地面につけるように、近位の橈骨は垂直に立ったような状態であった。推定年齢はともに3.5才以上である。また、SD728の左橈骨遠位側とほぼ同位置の直上では、長原7B層上半部の上部から左橈骨の近位側が出土した。両者の骨軸の方位が近似すること、部位に重複がないことから、両者は同一骨である可能性が高い。おそらく、SD728の橈骨は古墳が完成した後周濠が機能してしばらく経ってから骨幹中央で折れたと推測される。いい換えれば、橈骨の近位側は古墳完成時からある程度の期間は周濠底から付き出ていて、後に折損したと考えられる。以上から、本資料は生体の左右の位置関係を保った前肢であったと考えられる。これらの前肢はSD728の埋戻し時に埋められたか、埋戻し後に据えられたかのいずれかで、配置された時期は古墳築造の後半から完成までのある時だといえる。

次に、前肢の東南に位置する周濠底の長原7B層上半部の下部から出土した資料を検討する。これらは実物が現存しないのがたいへん惜しまれるが、前肢との位置関係・距離・形状から考えて、本資料は前肢と同一個体の左右の後肢、特に中足骨以下の部分ではなかったかと推測される。もし、この推測が正しいならば、前後の蹄間の間隔は0.75mで、直立時の間隔よりもやや狭い。検出層準はSD728より下位であるが、前肢との関係から長原7B層上半部の下部堆積後からSD728埋積後までの期間に据えられたと考えられる。

以上の前肢と後肢の推論から、一頭分の四肢が生体時の位置関係を保った状態で存在したと考えられる。

続いて、長原7B層上半部の上部から出土した歯の検討を行う。部位が判明した歯には重複がなく、推定年齢も5才前後で近似している。9本の切歯には上下両顎の部位を含む。臼歯に下顎歯を含む確証は得られなかったが、出土した臼歯の数は22本で、ウマの上顎臼歯数である12本より多いが、その倍数である1頭分の上顎・下顎を合わせた臼歯の総数を越えていない。したがって、南周濠出土の歯はすべて同一個体の顎に植立していた可能性が高く、5才前後の若齢馬の頭部であったと推測できる。また、犬歯が出土していないの

で、牝馬であった可能性がある。

さらに、上述した「四肢」と「頭部」の関係を考えてみたい。推定年齢や大きさで両者が同一個体に由来することに矛盾する材料はない。また、近接した時間・場所に配置されたと考えられるので、同一個体である可能性がきわめて高いと考えたい。

ここで、これまでの推測による要点を整理すると以下のようになる。

①前肢の東南に位置した消滅資料を同一個体の後肢としたこと

①歯を一個体の頭部に由来するとしたこと

②頭部と四肢が同一個体としたこと

いずれも資料の質的制約や記録不足から推測の域を出ないので、証明のしようがないことである。仮定の上に仮定を重ねていることは否めない。しかし、比較的良好な記録が残された前肢の特異な出土状況に立脚すれば、以下に述べる仮説のように、一連の行為のもとに矛盾なく各資料とその断片的な情報を説明できるのではないかと考えている。

３．本来の配置の推定

四肢は前肢の出土状況から原位置に近いと考えて差し支えなかろう。一方、頭部は、臼歯が歯列を保たない状態で墳丘裾の小範囲にまとまっていたことから、周濠内に置かれていたのではなく、周辺の埴輪片とともに墳丘上から崩落したものと推定される。また、臼歯が出土した付近の地層中に墳丘盛土に由来するような偽礫があまり多くは混っていないことから、土壙中に埋められたのではなく、地上に置かれていたと考えられる。よって、頭部の配置場所は前方部の埴輪列付近の墳丘上と考えることができる。

このように、南口古墳では前方部の周濠に一頭分の四肢が墳丘に向って生体での位置関係のまま据えられ、前方部の埴輪列の付近に頭部が置かれたと復元できる。古墳での両者の位置を見てみると、ともに中軸線に近接し前方部のほぼ正面に当る。ほかの周濠から動物遺体の出土はなく、前方部正面にこれらを置くことが意識されたものと推定できる。

４．殺馬行為の推定

まず、切断の有無を検討する。残存する骨表面には解体痕が認められなかったが、周辺では上腕骨や大腿骨などの上肢骨や椎骨や肋骨などの胴骨がまったく出土していない。しかも、同一個体と推定される四肢と頭部の配置場所は生体の位置関係を保っていない。そこで、それぞれ切断・解体されたものと推定され、切断された四肢と頭部が古墳に配置さ

れたと復元できる。また、上肢部や胴部がこれらとは別の場所にあったと推定されることも、解体や利用の状況を考える上で重要なことである。

次に、頭部と四肢の出土層位からその配置時期を限定してみよう。歯が古墳完成後に周濠に堆積した長原7B層上半部の上部から出土しているので、頭部の配置時期は古墳完成時から崩壊期の間である。一方、前肢は墳丘盛土と同時の客土であるSD728の埋土から出土していることから、四肢の配置時期は古墳築造後半から完成までの間である。頭部と四肢の配置時期が整合するのは、古墳完成時、すなわち、被葬者の埋葬時が、両者が配置された時としてもっとも可能性が高いと考える。

さて、以上の仮定を前提にした推論ではあるが、このような限定された時に解体された若齢馬は、自然に死んだと考えるよりも、殺された可能性がきわめて高いと考えられる。そこで、殺馬行為の状況を検討してみることにする。

まず、四肢が周濠底に据えられた状態を人為的な行為の結果と考えたばあい、その行為は人間が切断した馬の四肢を穴を掘って埋めたか、あるいは周濠底に突き刺したかのいずれかであるが、掘込みの痕跡を検出していないことから、後者の可能性が高い。もしそうであれば、馬が他の場所で殺された後に解体され、四肢を前後左右を間違えずに生体と同じ位置関係で前方部正面の周濠底に突き刺したという仮説が成り立つ。しかし、前肢の出土状態に見られた左右の位置関係や推定した後肢と前肢との位置関係が生体時のものとほぼ同じであること、馬の体軸線と古墳の中軸線が一致していないことからみて、人間が意識的に(計画的に)突き刺したと考えるには積極性が乏しい。

そこで、馬が周濠内に連れて来られて殺された際に馬の自重で踏込んだと考えることも可能である。すなわち、四肢の出土状態が馬が倒れた時の姿勢と一致すると考えるのである。出土状態から復元される馬の姿勢は墳丘に向って前方に前脚の甲を地面に着いて倒れた状態と推定される。このばあい、馬は前方部周濠に連れて来られて墳丘に向って殺され、周濠底に脚を踏込んで前方に倒れた後、四肢と頭部を切断・解体されたと考えられよう。しかし、この仮説にも問題がある。それは果たして殺された馬がこのような姿勢であり続け、その上で四肢を切断することが可能かどうかという点である。当然馬は暴れるであろうし、死後痙攣によって前のめりの状態を保つのは困難であるかもしれない。また、体重は300kg前後と思われるので、解体作業も容易では無かっただろう。周濠底の状況の記録がないので、これらの仮説のどれが事実に近いものかは決しがたいが、いずれにしても、通常の解体・利用行為とは大きくかけ離れたものである。

５．馬を用いた葬送儀礼の復元とその性格

以上から、南口古墳で行われた葬送儀礼に馬が関与したものと考えられ、馬を用いた葬送儀礼を以下のように推定、復元したい。

①前方部正面の周濠中で墳丘に向って馬を殺す(または他の場所で殺す)

②解体する

③切断された頭部を前方部正面の墳丘に置く

④切断された四肢を周濠底に残しておく(または生体の位置を保つ状態で突き刺す)

⑤胴部や上肢部の肉を供献したり食べる

③・④・⑤の前後関係は不明であるが以上の順序が妥当と考える。③の頭部の切断時期については、殺す手段として頭部を切り落としたか、解体の際に外したかのいずれかであろう。④の切断箇所は前肢は肘関節で、後肢は不明だかおそらく足根関節と推測される。また、⑤の行為は、これらの部位は頭部や残された四肢に比して可食部分が圧倒的に多いこと、出土土器には食物供献用のものも含まれていると考えられることから推測した。

これらの行為を連結した馬は犠牲馬と考えてよいだろう。では、それぞれの行為はどのような意味を持っていたのだろうか。桃崎祐輔(1993)が設定した古墳に伴う牛馬供儀形態の5類型(１)殉葬(２)犠牲・生贄(３)食肉供献(４)呪物(５)追葬・合葬を参考にしながら考えてみた。まず①・②の行為は、まず最初に被葬者への生贄として捧げる行為だっただろう。もちろん単に殺すだけではなく、馬の血を放出させ捧げることにも重要な意味があっただろう。③の行為は頭部に象徴的な意味を見い出していたと考えられる。長原遺跡では西地区の古墳時代集落内でも馬の頭部のみを埋納したと考えられる土壙が見つかっている(久保和士、1992c)。周濠出土の形象埴輪からみて、前方部には盾・石見型盾・家・馬・人物といったくびれ部や後円部と共通するもののほかに甲冑も樹立されていたと推測され、馬の頭部も魔除のような呪物的意味があったのかもしれない。④の行為で、周濠底に突き出た四肢をそのままにしておくことにも、四肢に象徴的な意味を持たせていたと考えられる。単に可食部分が少ないだけならば、残さずに片付けたと考えられるからである。脚は騎馬や荷馬として活躍した馬の力のもっとも象徴的な部分と考えられ、そこに意味を見い出していたのかもしれない。⑤の行為に関しては、馬肉が食物としての特別な意味を有していたのかもしれない。なぜなら、これまでに長原遺跡で出土したウマ遺体は解体痕が観察できるような良好な状態を保っていないが、四肢骨が散乱した状態で見つかっているので(久保和士、1993a)、本地域でも古墳時代に馬を食べたと考えられるが、馬は当時政治的・

軍事的にも重要な財産であり、食用の頻度は高かったとは考え難いからである。

6．古墳における馬供儀例としての意義

古墳における馬供儀の研究は、近年、桃崎(1993)や松井章・神谷正弘(1994)において精力的に進められた。桃崎は日本列島のみならず朝鮮半島や中国東北地方の出土例も集成・分析し、牛馬供儀の展開を明らかにした。まず、出土状態を吟味し、その上でこれまで「殉葬」などに結び付けられがちだった古墳出土の牛馬骨を先述したような供儀形態に類型化した。さらに、これらの「複数の性格を共有する中間的様相を示すものも多い」ことも想定している。その具体的なイメージとして、「被葬者が乗用に用いていた愛馬を冥界への案内者とするため馬具を取り外して墓前にて殺し、その血を大地に捧るべく地面にまき、その後解体して調理した肉を参列者が共食し、一部を墓に供え、さらに頭蓋骨を辟邪物として安置したようなばあい」を例示している。南口古墳で復元した儀礼の様相は犠牲・生贄の性格が第一義的で、これとともに食肉供献・呪物の各性格の複合的な様相を示すと考えられる。まさに桃崎が例示したイメージに近いものであり、考古資料から推定し得た例はきわめてまれである。また、儀礼が行われた時期や場所そして過程についても考古資料から推定できた例は数少ない。このように本例は馬供儀の全国的にも貴重な資料としての意義が深いのである。これは良好な遺存条件もさることながら、出土状態の検証によるものであり、この分野の研究において出土状態の厳密な記録が重要であることを再認した。

ところで、馬供儀の見られる古墳は九州や甲信地方に多く、近畿地方では少ないのではないだろうか。桃崎(1993)の地名表では九州27、甲信18、畿内7の古墳が集成され、「特定の地域や古墳群に集中する傾向がある」としながらも、特にこの点には触れていない。近畿地方では集落跡出土のウマ遺体は大阪府では四条畷市周辺や長原遺跡、奈良県では布留遺跡でかなり多く見られるので、これに比べると古墳からの出土例が少ないという感が強い。この問題についてここで検討する準備はないが、同様にウマと強く係わった集団でも、墓への供儀といった精神的側面では地域性が見られるのではないかと考えている。

7．南口古墳における馬供儀の特異性

長原古墳群はこれまでに200基以上が調査されたが、確実に古墳に伴うウマ遺体は南口古墳が唯一の例である。これまでに131号墳周溝の長原6B～7A層から臼歯片が(櫻井久之、1993a)、151号墳周溝の長原6Ai層から距骨が(久保和士、1993b)出土しているが、

いずれも細片であることや出土層準から判断して、古墳に確実に伴うとはいいがたい。また、本地域の古墳の周溝埋土は有機物にとっては比較的良好な遺存条件を備えており、さらにこれまでに数多くのウマ遺体が出土している集落跡での条件よりも良好と思われる。よって、長原古墳群では馬そのものを供儀する行為が稀であったと考えられ、その数少ない供儀の様相が南口古墳で明らかにできたことは重要であろう。一方、馬形埴輪を樹立した古墳は10基が明らかにされており(櫻井久之、1993c)、馬そのものの供儀に比べて数が多い。また、馬形埴輪の樹立は古くTK208型式の時期からあり、小型方墳にも認められる点で馬そのものの供儀とは様相を異にする。このような両者の様相の違いは今後の検討課題である。

では、馬の供儀を伴う南口古墳の被葬者はどのような人物だったのだろうか。桃崎(1993)は馬供儀における幼齢馬の比率の高さ、特定地域の中小古墳への集中、古代牧と隣接した分布から、「馬の供儀を伴う古墳の被葬者は馬飼育に係わる集団の一員であった可能性」が高いと推測しており、興味深い知見である。前述したように長原遺跡の古墳時代集落では馬が多く存在したことは間違いなく、しかも祭祀の場(久保和士、1993a)や井戸(久保和士、1993b)、馬墓(久保和士、1992b・c)、頭部埋納土壙(久保和士、1992c)と推定される遺構からも出土しており、長原の古墳時代社会のさまざまな場面に馬が関与していたと推測される。これらの集落を構成した集団は、単一の職掌のみには限定すべきではないが、馬の生産や管理にも深く関与した可能性が高いと考えている。以上から、南口古墳の被葬者はこのような集団の首長クラスの人物と考えられるのではないだろうか。

南口古墳の時期は6世紀中葉で、現段階では長原古墳群の最終末に相当する。集落もこの頃に画期があり、飛鳥Ⅰ期にいたって「居住および建築様式の画期的な変化があった」と考えられている(京嶋覚、1993)。しかも、飛鳥時代の集落跡からもウマ遺体の出土は頻度が低いながらも存在するが、出土状態や位置などにおいて古墳時代集落のそれと様相を異にするような状況が認められる。今後ウマ遺体の出土例の集成と各時期毎の様相を整理する作業が必要であるが、馬との係わりにおいて古墳時代集落とそれ以降の集落とでは性格を異にしていたと予察される。古墳群と、馬と活発な係わりのあった集落の終焉の時期に、南口古墳において行われたこのような馬の供儀は、葬送儀礼として重要であっただけでなく、長原の古墳時代社会の大きな変化に際して、被葬者の属した集団が自らアイデンティティーを再確認・高揚するなどの意味も有していたのではないだろうか。

(久保和士)

第6節　まとめ

財団法人大阪市文化財協会は、1988年度の長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴って、長原遺跡で16次・20件、総面積5,664㎡の発掘調査を実施した。本書で取上げたおもな報告内容を以下にまとめておく。なお、調査地ごとの遺構の層準は、表6(Ⅲ章第1節)・表7(同第3節)を参照されたい。

(1)　徹底した層位掘り調査を実施し、火山灰層などの新たな知見に基づいて長原遺跡の標準層序を部分改訂した。主たる改訂点は、長原16A層と16B層との部分不整合を低位・中位段丘構成層の境界に対比したことである(Ⅱ章)。

(2)　長原東南地区の長原12～13層で、石器の目的的調査を実施し、600点余りの石器遺物を発掘するとともに、土壌の洗浄・篩別作業を行い3,000点余りの微細遺物を捕集した。その結果、古川辺川とその前身である古川辺谷の周辺に後期旧石器時代後半～縄文時代前期以前の石器密集部が9個所以上あることを明らかにした(図209)(Ⅱ章第3節・Ⅳ章)。

(3)　剥片の属性分析を行い、(2)の石器密集部の石器群は、いずれも横形剥片剥離技術を主体とした共通の技術基盤に立脚した石器生産構造をもつと推定し、各密集部が石器生産工程の中でどの段階に位置づけられるかを検討した。また、長原12層層準で発見された縄文時代中期以前の2個所の石器密集部が、後期旧石器時代のものである可能性を示唆した(Ⅳ章第1・2節、Ⅴ章第1節)。

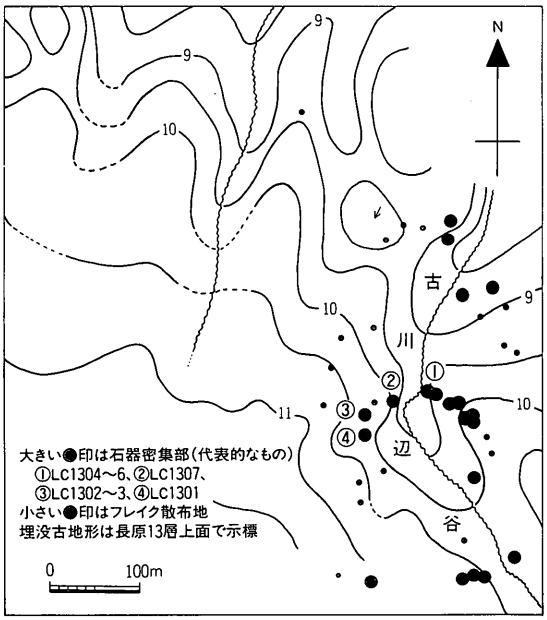


図209　長原東南地区における
後期旧石器時代後半の古地理図（趙1994に加筆）

(4)　長原12／13層漸移帯～8B層から出土した縄文時代早期～弥生時代中期の石鏃を層準ごとに詳しく観察し、形態とその変遷を検討した(Ⅴ章第2節)。

(5)　長原東南地区の長原9A層上面で、自然流路や人工の用水路を検出し、古地理復元のための基礎資料を得た(図

210；Ⅲ章第2節)。

(6)　長原東南地区の長原8B層の下部上面に、弥生時代中期後半に属する大形の方形周溝墓を2基発見し、周溝内の加工面・機能面と土器の出土状況の検討から、加工時に土器が据えられた可能性を示唆した(Ⅲ章第2節)。

(7)　長原中央地区の長原7B層の下半部上面に、南口古墳と呼ぶ外堤をもつ前方後円墳(長原古墳群181号墳)を発見し、出土遺物の検討から築造時期を古墳群の終末期に当る6世紀中頃と推定した。また、遺物の出土位置から、古墳築造当時の配置を検討した(Ⅲ章第4節、Ⅴ章第3・4節)。

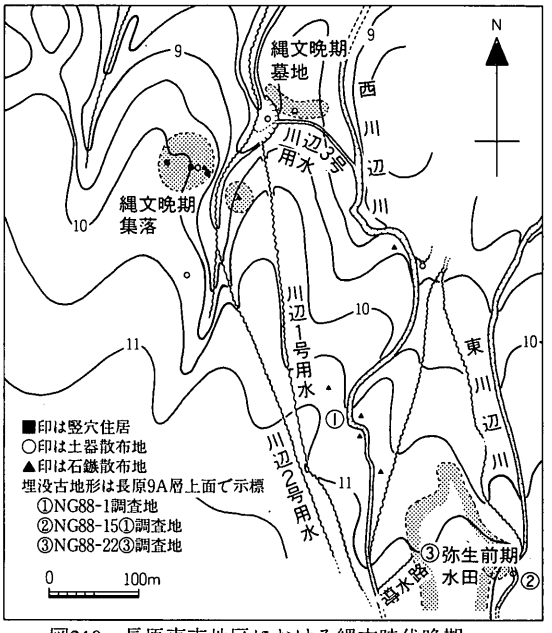


図210　長原東南地区における縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の古地理図（趙1994に加筆）

(8)　南口古墳の周溝内から発掘されたウマ遺体の出土状況から、馬を犠牲にした葬送儀礼が行われたと推定し、その意義を検討した(Ⅲ章第5節・Ⅳ章第5節)。

(9)　南口古墳の直下で、これに壊された古墳時代中期の掘立柱建物群やそれに付随する井戸や溝を発掘し、長原古墳群の形成時初期には、当該地が住居地域であったことを明らかにした(Ⅲ章4節)。

(10)　長原6層層準以上で、水田や坪境溝や島畠・井戸等を多数検出し、当地域の土地利用形態の変遷を復元するための基礎資料を得た。また、中世・近世の資料を多く記載した(Ⅲ章第2・4節)。

長原遺跡では、遺跡の発見以来、多数の調査が実施されてきた。しかし、今年度の調査を含めて、各時期の人びとをとりまいた古環境とその変遷を考えるための基礎資料が十分にそろっているとはいいがたい。正確な層序区分を基礎にして、古地理・古環境を推定し、遺構や遺物から考えられた人間の営みをこれに重ね合わせて、総合的な遺跡復元を行うことは、次年度以降の報告に託された課題である。

(編集者)

引用・参考文献

（同じ著者に同一年の文献が複数ある場合は、発表順に全章を通してa、b･･･の枝番を付した）

Ⅰ　章

・大阪市文化財協会（1982a）　『長原遺跡発掘調査報告』（改訂版）、224ps.
・大阪市文化財協会（1982b）　『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、322ps.
・大阪市文化財協会（1983）　『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、248ps.
・大阪市文化財協会（1989）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ、132ps.
・大阪市文化財協会（1990）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、318ps.
・大阪市文化財協会（1992a）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、204ps.
・大阪市文化財協会（1992b）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、166ps.
・大阪市文化財協会（1993a）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、302ps.
・大阪市文化財協会（1993b）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、295ps.
・大阪市文化財協会（1994）　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ、132ps.
・大阪文化財センター（1978）『長原』、258ps.
・大阪文化財センター（1985）『長原』（その２）、54ps.
・大阪文化財センター（1986a）『城山』（その１）、211ps.
・大阪文化財センター（1986b）『城山』（その２）、234ps.
・大阪文化財センター（1986c）『城山』（その３）、139ps.
・森本晋・岡村勝行・清水和明（1990）「長原遺跡88-４時調査地出土の旧石器」:『旧石器考古学』38、p.61-81.

Ⅱ　章

・安孫子昭二（1988）「縄文土器の型式と編年」:『日本考古学を学ぶ』(１)、p.183-202.　有斐閣.
・市原実（1960）「大阪、明石地域の第四紀層に関する諸問題」:『地球科学』49、p.15-25.　地学団体研究会.
・大阪市文化財協会（1982c）「長原遺跡南部の層序」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、p.13-20.
・小倉博之・吉川周作・此松昌彦・木谷幹一・三田村宗樹・石井久夫（1992）「大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成時期」『第四紀研究』31、p.179-185.　日本第四紀学会.
・梶山彦太郎・市原実（1972）「大阪平野の発達史－^{14}C年代データからみた－」:『地質学論集』7、p.101-112.　日本地質学会.
・梶山彦太郎・市原実（1986）『大阪平野のおいたち』、138ps.　青木書店.

・建設省国土地理院（1965）「河内低地とその周辺」:『土地条件調査報告書（大阪平野）』3Ⅱ、p.69-76.
・小林達雄・泉拓良編（1983）「縄文土器編年表」:『世界陶磁全集』1、p.313-314. 小学館.
・佐藤隆（1992）「平安時代における長原遺跡の動向」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.102-110. 大阪市文化財協会.
・佐藤隆（1994）「長原・喜連東遺跡の調査－輸入陶磁器を中心に－」:『古代末から中世前期における土器からみた貿易陶磁』中世土器研究会第13回研究会資料、p.14-19.
・佐藤良二（1989）「近畿地方におけるナイフ形石器群の変遷」:『旧石器考古学』38、p.121-132. 旧石器文化談話会.
・鈴木秀典（1982）「瓦器椀の編年」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、p.278-282.
・積山洋（1992）「層序」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.1-5.
・田辺昭三（1981）『須恵器大成』、185ps. 角川書店.
・趙哲済（1983）「遺構検出面の便宜的な呼称」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、p.31-33. 大阪市文化財協会.
・趙哲済（1994）「大阪平野の旧石器遺跡－特に古大阪平野における遺跡の立地について－」:『瀬戸内技法のとその時代』、p.243-252. 中・四国旧石器文化談話会.
・趙哲済・京嶋覚・高井健司（1992）「長原遺跡の地層」・「長原遺跡の地層をめぐる諸問題」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、p.15-32・177-186. 大阪市文化財協会.
・趙哲済・那須孝悌（1991）「考古遺跡における遺構面と遺物包含層」:『日本地質学会第98回学術大会講演要旨』、p.90-91. 日本地質学会.
・那須孝悌・樽野博幸（1981）「河内平野の生いたち」:『河内平野の生いたち』、p.4-26. 大阪市立自然史博物館.
・那須孝悌・天白俊馬（1987）「中～上部更新統および完新統」:『日本の地質6. 近畿地方』、p.157-171、共立出版
・奈良国立文化財研究所（1976）『平城宮発掘調査報告』Ⅶ、p.139-149.
・奈良国立文化財研究所（1978）『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、p.92-100.
・町田洋・新井房夫（1992）『火山灰アトラス－日本列島とその周辺』、276ps. 東京大学出版会.
・松尾信裕・森毅・山中一郎（1983）「縄文時代から弥生時代の遺構と遺物の検討」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、p.193-218. 大阪市文化財協会.
・松藤和人（1992）「大阪平野部における旧石器編年研究に寄せて」:『旧石器考古学』44、p.11-23. 旧石器文化談話会.
・森勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣（1990）「愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について」:『第四紀研究』29-1、p.17-23. 日本第四紀学会.
・森岡秀人（1985）「弥生時代暦年代論をめぐる近畿第Ⅴ様式の時間幅」:『信濃』37-4、p.243-264
・家根祥多（1982）「縄文土器」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、p.142-157. 大阪市文化財協会.
・吉川周作・井内美郎（1991）「琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序」:『地球科学』45、81-100p. 地学団体研究会.

・吉川周作・井内美郎（1993）「琵琶湖高島沖ボーリング火山灰から見た中期更新世～完新世の噴火活動史」:『地球科学』47、97-109p. 地学団体研究会.
・吉川周作・樽野博幸（1992）「大阪平野の中位段丘層と火山灰層」:『第四紀』24、61-67p. 第四紀総合研究会.
・吉川周作・那須孝悌・樽野博之・古谷正和（1986）「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山層について」:『地球科学』40-1、p.18-38. 地学団体研究会.

Ⅲ 章

・網谷克彦（1981）「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」:『鳥浜貝塚1980年度調査概報』、p.119-130. 福井県教育委員会.
・網谷克彦（1982）「北白川下層式土器」:『縄文文化の研究』3. p.201-210. 雄山閣出版.
・泉拓良・家根祥多（1985）「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」:『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ、p.163-187. 京都大学埋蔵文化財研究センター.
・伊藤純（1994）「長原遺跡東南地区南半の調査」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ、p.29-69. 大阪市文化財協会.
・加藤嘉太郎（1970）「骨格の部」:『増訂改版家畜比較解剖図説』上巻、p.2-103、養賢堂.
・川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」:『考古学雑誌』64-2、p.95-164. 日本考古学会.
・川西宏幸（1988）「円筒埴輪総論」:『古墳時代政治史序説』、p.225-360. 塙書房.
・岸本道昭（1989）「遺物」:『池園遺跡』大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第42輯、p.13-25. 大阪府埋蔵文化財協会.
・北村四郎・村田源（1979）『原色日本植物図鑑木本編』Ⅱ、545ps. 保育社.
・競争馬総合研究所（1991）『馬の解剖図譜』、24pls. 日本中央競馬会競走馬総合研究所.
・久保和士（1993b）「動物遺体」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、p.54-56・156. 大阪市文化財協会.
・倉敷考古館（1971）『里木貝塚』倉敷考古館研究集報７、119ps.
・白神典之（1992）「堺摺鉢考」:『東洋陶磁』19、p.83-103. 東洋陶磁学会.
・高橋工（1991）「埴輪」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、p.44-71. 大阪市文化財協会.
・田中清美（1993）「長原遺跡東南地区の調査」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.225-260. 大阪市文化財協会.
・西中川駿・松元光春（1991）「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」:『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、p.164-188.
・濱田延充（1993）「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」:『弥生文化博物館研究報告』２、p.111-126.
・林田重幸（1974）「日本在来馬の源流」:『日本古代文化の探究・馬』、p.217-262. 社会思想社.
・林田重幸・山内忠平（1957）「馬における骨長より体高の推定法」:『鹿児島大学農学部学術報告』6、p.146-156. 鹿児島大学農学部.

・福井県教育委員会（1979）『鳥浜貝塚』、216ps.
・北隆館編集部編（1981）『学生版日本動物図鑑』（新版）、501ps. 北隆館.
・松井章（1995）「池島・福万寺遺跡出土の動物遺存体」:『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XI、p.99-104. 大阪文化財センター.
・三好孝一（1993）「河内における弥生中期土器様相ー亀井遺跡を中心にしてー」:『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』、p.31-44. 大阪文化財センター.
・山仲進（1989）「東播系中世須恵器の分類と編年試案」:『神出1986』、p.117-132. 妙見山麓遺跡調査会.
・横田賢次郎・森田勉（1978）「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」:『九州歴史資料館研究論集』4、p.1-26. 九州歴史資料館.
・吉川周作・那須孝悌・樽野博之・古谷正和（1986）「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山層について」:『地球科学』40-1、p.18-38. 地学団体研究会.
・Driesch, A. von den（1976）*A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites.* Peabody Museum Bulletin 1. Harvard : Peabody Museum.
・Goody, P. C.（1983）*Horse Anatomy.* J. A. Allen & Company Limited, p.36-41

Ⅳ 章

・清水和明（1991）「石器遺物」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、p.35-43. 大阪市文化財協会.
・田島富慈美（1993）「有舌尖頭器における剥離面の検討ー大阪市内の出土例からー」:『旧石器考古学』47、p.185-193. 旧石器文化談話会.
・山中一郎（1994）「型式分離と属性分析」・「属性分析結果の解釈」:『石器研究のダイナミズムーボルド型式学の革新のためにー』、p.48-79・80-114. 大阪文化研究会.

Ⅴ 章

第1節

・平口哲夫（1987）「横剥ぎ技法の諸類型（その一）」:『太平臺史窓』6、p.1-12. 史窓会.
・松藤和人（1974）「瀬戸内技法の再検討」:『ふたがみー二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告』、p.138-163. 同志社大学旧石器文化談話会.
・山中一郎（1987）「森の宮遺跡出土の石器について」:『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告』、p.124-147. 大阪市文化財協会.
・山中一郎（1987）「長原遺跡出土の石器について」:『長原遺跡発掘調査報告書』、p.163-192. 長原遺跡調査会（大阪市文化財協会、1982a 改訂）.
・山中一郎（1994）「型式分離と属性分析」・「属性分析結果の解釈」:『石器研究のダイナミズムーボルド型式学の革新のためにー』、p.48-79・80-114. 大阪文化研究会.

第２節

・石神幸子（1986）「石器」:『亀井』（その２）、p.174-185. 大阪文化財センター.
・石神幸子・村上富貴子・池北孝男（1979）「狩猟具（武器）－石鏃」:『池上遺跡石器編』、p.345-459. 大阪文化財センター.
・今村道雄ほか（1981）「5C・4I地区出土の石器」:『瓜生堂Ⅲ』、p.285-301. 瓜生堂遺跡調査会.
・岩崎二郎・松尾信裕・服部みどり（1986）「縄文時代」:『仏並遺跡』、p.16-111. 大阪府埋蔵文化財協会.
・岩橋隆浩（1992）「石器」:『粟津湖底遺跡』、p.47. 滋賀県教育委員会.
・梅原末治（1935）「發見の遺物－石器類」:『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』16－京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告－、p.40-47. 京都府.
・高井健司・櫻井久之（1993）「層位発掘に基づく石鏃形態の変遷的研究」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.261-268. 大阪市文化財協会.
・佐原眞（1964）「石製武器の発達」:『紫雲出』、p.131-145 詫間町文化財保護協会.
・塩山則之（1991）「讃良川遺跡の調査」:『第９回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』、p.43-52.
・下村晴文・橋本正幸（1987）「石器－縄文早期、石器概要」:『神並遺跡』Ⅱ、p.68-88. 東大阪市教育委員会.
・陣内暢子・村上富貴子（1991）「遺構別・包含層別遺物の概略－山賀遺跡」・「遺物のまとめと考察－石器（石鏃）」:『河内平野遺跡群の動態』Ⅱ、p64-98・201-202. 大阪文化財センター.
・末永雅雄（1961）「石器－石鏃」:『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告17、p.246-247. 奈良県.
・末永雅雄（1986）「石器」:『増補宮瀧の遺跡』、p.63-66. 木耳社.
・菅榮太郎（1992）「弥生時代の石器生産と流通－讃岐平野における一様相と近畿地域との関連性－」:『考古学と生活文化』、p.579-593. 同志社大学考古学シリーズ刊行会.
・菅榮太郎（1988）「河内平野における弥生時代のサヌカイト製打製石器の検討」:『考古学と技術』、p.77-88. 同志社大学考古学シリーズ刊行会.
・鈴木道之助1883）「石鏃」:『縄文文化の研究』７、p.88-95. 雄山閣出版.
・鈴木道之助（1981）「狩猟に使われた石器－石鏃」:『石器の基礎知識Ⅲ』、p.38-51. 柏書房.
・丹治康明（1991）「石器類」:『雲井遺跡－第１次発掘調査報告書』、p.14-16. 神戸市教育委員会.
・田島富慈美（1993）「有舌尖頭器における剥離面の検討－大阪市内の出土例から－」:『旧石器考古学』47、p.185-193. 旧石器文化談話会.
・中川和哉（1986）「石器」:『磯山城遺跡』、p.127-132. 米原町教育委員会.
・中西幹人・瀬川健ほか（1980）「Ｂ地区の調査－石器類及び土製品」・「Ｄ地区の調査－石器・土製品」・「Ｈ地区の調査－石器・土製品」:『瓜生堂』、p.133-151・323-330・410-415. 大阪文化財センター.
・西口陽一・宮野淳一（1984）「第Ⅱ様式第２遺構面」:『山賀』（その３）、p.172-192. 大阪文化財センター.
・西村尋文（1984）「亀井遺跡出土の石器」:『亀井遺跡』Ⅱ、p.205-270. 大阪文化財センター
・西村尋文・宮崎泰史（1982）「検出された遺構と遺物－石器」:『亀井遺跡』、p.55-57・78-81. 大阪文化

財センター.
・長谷川豊（1975）「石器－石鏃」:『桑飼下遺跡発掘調査報告書』、p.206-208. 舞鶴市教育委員会.
・原真一（1984）「縄文晩期の遺構と遺物－石器・石製品」:『篠原Ａ遺跡』、p.27-29. 古代学協会.
・前田佳久（1993）「石器」:『大開遺跡発掘調査報告書』、p.181-199. 神戸市教育委員会.
・松木武彦（1989）「弥生時代時代の石製武器の発達と地域性－とくに打製石鏃について－」:『考古学研究』35-4、p.69-96. 考古学研究会.
・松田真一（1989）「石器－石鏃」:『大川遺跡』、p.185-192. 山添村教育委員会.
・森毅・山中一郎（1983）「石棒および石器」・「石器製作技術と原材」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、p.200-214. 大阪市文化財協会.
・森本晋（1983）「喜志遺跡'80-3区の石器」:『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要』Ⅵ、p.31-33. 大阪府教育委員会.
・森本晋（1985）「石器」:『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ－北白川追分町縄文時代遺跡の調査－、p.72-78. 京都大学埋蔵文化財研究センター.
・森本晋（1986）「石の武器－石鏃」:『弥生文化の研究』9、p.54-61. 雄山閣出版.
・矢野健一（1991）「比叡山西南麓の先史遺跡－北白川小倉町遺跡」:『先史時代の北白川』、p.26-33. 京都大学文学部博物館.
・山元敏裕（1993）「石器」:『浴・長池遺跡』、p126-136. 高松市教育委員会.
・吉川義彦（1973）「石器－石鏃」:『湖西線関係遺跡調査報告書』、p.33-36. 滋賀県教育委員会.
・渡部明夫（1987）「石器」:『矢ノ塚遺跡』、p.241-358. 香川県文化財保護協会.

第３節

・小野山節（1970）「五世紀における古墳の規制」:『考古学研究』16-3. 考古学研究会.
・久保和士（1992a）「堤をもつ古墳」:『葦火』36、p.1-4. 大阪市文化財協会.
・櫻井久之（1993b）「長原古墳群の調査」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.1-7. 大阪市文化財協会.
・豊中市教育委員会（1988）『新免遺跡第24次調査現地説明会資料』
・守口市教育委員会（1991）『梶遺跡』
・守口市教育委員会（1994）『梶遺跡第2次発掘調査概要』
・和田晴吾（1992）「群集墳と終末期古墳」:『新版古代の日本』5、近畿Ⅰ、角川書店.
・和田晴吾（1995）「中期古墳の秩序」:『第10回はびきの歴史シンポジウム考古学を学ぶ』、羽曳野市教育委員会.

第４節

・猪熊朝美（1978）「円筒埴輪について」:『長原』、p.173～176. 大阪文化財センター.
・大阪市文化財協会（1993）「長原古墳一覧表」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.292-299.
・川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」:『考古学雑誌』64-2、p.95-164. 日本考古学会.
・川西宏幸（1988）「円筒埴輪総論」:『古墳時代政治史序説』、p.225-360. 塙書房.
・鈴木秀典（1978）「まとめ」:『長原遺跡発掘調査報告』、p.120～144. 長原遺跡調査会（大阪市文化財

協会、1982a 改訂）.
・積山洋（1992）「長原古墳群と難波地域の円筒埴輪」:『古代文化』44-9、p.36-42. 古代学協会.
・田中清美（1982）「埴輪」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、p.223～229. 大阪市文化財協会.

第5節

・京嶋覚（1993）「5・6世紀の集落構成の復元とその特質」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、p.241-258. 大阪市文化財協会.
・久保和士（1992b）「動物遺体」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、p.93-94. 大阪市文化財協会.
・久保和士（1992c）「動物遺体」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、p.96-98. 大阪市文化財協会.
・久保和士（1993a）「動物遺体」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.124-127. 大阪市文化財協会.
・久保和士（1993b）「動物遺体」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、p.54-56・156. 大阪市文化財協会.
・櫻井久之（1993a）「131号墳」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.158-178. 大阪市文化財協会.
・櫻井久之（1993c）「長原古墳群の馬形埴輪」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、p.277-286. 大阪市文化財協会.
・松井章・神谷正弘（1994）「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」:『考古学雑誌』80-1、p.57-94. 日本考古学会.
・桃崎祐輔（1993）「古墳に伴う牛馬供儀の検討」:『古文化談叢』31、p.1-141. 九州古文化研究会.

あとがき

考古学分野の研究に限らず、学術世界の現在的知識は、研究の進展に伴って深化する。これは世間の常識なるものが社会の変化に伴って変化する現象と似ている。ものそのものが変わらないにも係わらず、人間の思惟を通過することによって、様々な類推が加えられ、ものの認識が変化していくのが常識であるといえる。

このような観点から、本書を編集するにあたっては、発掘現場での遺構と遺物の出土状況、および遺物の観察結果、すなわち現場で認識された事実をでき得る限り記載するようこころがけた。変化する様々なものの見方に対して基礎的となる資料を提供できる報告書でありたい、と願ったからにほかならない。特に、Ⅲ章の遺構や遺物の出土層準の記載には、長原遺跡で蓄積された地層に関する知見を基礎にして構成した。

そのために、従来の報告書とはやや異なった記述方法になっていると受けとめられたと思われる。そのような読者のために、Ⅴ章第6節で本書の全容を簡潔にまとめるとともに、Ⅲ章第1節と第3節に時代ごとの調査概要を述べておいたので、ここから読んでいただくことをお薦めしたい。また、本書を貫く層位学的・堆積学的視点を踏まえて本書を理解しようとされる読者には、Ⅱ章の地層解説から目を通していただくこをとをお薦めする。

一方、長原遺跡の1988年度は石器調査の画期でもあった。単に出土した石器遺物を記載するだけでなく、石器を製作した人びとの石割りの思想にまで踏み込んでみようと、徹底した接合関係の整理と剥片の属性分析を行った。当初の目的が十分に達成されたとは言えないが、長原遺跡の旧石器～縄文時代における石器遺跡の理解に役立てていただければ幸いである。

かくいうものの、本書に取り上げた諸資料は、発見から6年余りの歳月を経過している。果たして発見当時の鮮やかな色彩を損なうことなく提示できたか否かは、読者の判断をまたなければならない。大方の厳しい批判を乞う由縁である。

1995年3月　永島暉臣慎

索　引

B

BB7火山灰層 …… 35
B種ヨコハケ …… 58

C

C－Ⅰ期 …… 22
C－Ⅱ期 …… 22,75,81,113,129,144,157,159,185
C－Ⅲ期 …… 22,75,80,95,97,113,121,129,140,143,144,159,231
C－Ⅳ期 …… 22,89,95,97,98,113,121,129,140,143
C－Ⅴ期 …… 22,113,129

M

Ma12型式 …… 17,33,40
Ma13型式 …… 17,18
MT15型式 …… 58,63,75,154,159,167,171,226,230,392,394,405

O

ON46段階 …… 58,87,222,225,394,404

T

TK10型式 …… 58,63,75-77,81,154,159,194,196-199,391,393,395,404,405
TK23型式 …… 63,97,159,194,197-220,222,223,226,394,404
TK43型式 …… 58,63,75,81,130,141,171
TK47型式 …… 75,167,196,223,226,230,394,404
TK73型式 …… 58,63,179,241,394
TK208型式 …… 87,141,155,168,171,223,226,230,394,404,413
TK209型式 …… 58,63,129,226
TK216型式 …… 63

あ

姶良Tn火山灰 …… 35
浅香火山灰層 …… 35
朝顔形埴輪 …… 179,205
足跡 …… 22,23,25,32,33,41,43,82,85,92,93,98,101,115,147
飛鳥Ⅰ期 …… 24,61,136,225
飛鳥Ⅱ期 …… 55,61,136,225,226
飛鳥Ⅲ期 …… 23,226
飛鳥Ⅳ期 …… 23,59
飛鳥Ⅴ期 …… 59
阿蘇4火山灰 …… 35
当て具 …… 63,81,154,194,196,230
吾彦火山灰層 …… 35
粟津湖底遺跡（大津市） …… 376
暗文 …… 55,59,113,121,129,140,157,159,169,226

い

家形埴輪 …… 58,76,114,205,210,213,391
池上遺跡 …… 367
池上・曽根遺跡 …… 371,381,382
遺構検出面 …… 41,136
遺構面 …… 42,43,112
生駒西麓産 …… 70,73,74,76,80,130
磯山城遺跡（滋賀県米原町） …… 379
板状剥片 …… 268-269,271,273,277,279-281,285,287-289,291,293,295,299-301,303-305,307,309-311,316,329,333,336-338,340-347,349,350,352,353
一ケ塚古墳（長原85号墳） …… 394,395
井戸 …… 3,10,11,22,48,53,91,102,145,146,151,153,167,217,220,222,237
糸切り …… 55
石見型盾 …… 205,207,210,212,213,389-391,411

う

上町累層 …… 17
臼玉 …… 227,228
ウマ（馬） …… 191,

233,235,236,237,239-241,407-413,415
馬池谷 …… 19
馬形埴輪 …… 3,205,212,213,216,391-392,413
瓜生堂遺跡（東大阪市）…… 381-382
瓜破台地 …… 17,49

え

円基式 …… 369
円筒埴輪 …… 58,97,139,145,154,179,188,189,191,
199,200,201,204,207,212,214,216,240,
389,391-393,395,397,399,401,403-406

お

押圧剥離 …… 291,369,370,376,383-385
凹基式 …… 91
凹基無茎式 …… 368,384
大川遺跡（奈良県山添村）…… 377,379
大開遺跡（神戸市）…… 371

か

（周濠）外堤 …… 145,186,188,189,
193,199,389,392,393,395,402,404,415
瓦器 …… 22,48,
49,77,80,88,90,95,97-99,103,110,113,
121,129,131,139,140,142,143,157,159,
161,172,173,177,180,185,225,231,236
角錐状石器 …… 249,314
花崗岩 …… 174
加工時形成層 …… 43,44,65,69,188,240,407
加工面 …… 41,43,44,415
火山ガラス …… 26,29,
35,36,83,101,173,242,245,247,248
火山灰層 …… 14,26,28,29,
33,35-40,150,156,163,168,242,247,248
梶２号墳（守口市）…… 391-393,396
瓦質土器 …… 22,89,128,231
橿原遺跡（橿原市）…… 373
火葬墓 …… 3
刀形 …… 216
甲冑形埴輪 …… 210
亀井遺跡（八尾市）…… 381-382
唐津 …… 19,92,95,128
河内地方・河内地域 …… 97,104,194
河内台地・河内平野 …… 17,49
川辺１・２号用水 …… 75,104
灌漑 …… 48,241,246
韓式系土器 …… 189,193,194
完新統 …… 19,28,35,248

き

喜志遺跡 …… 371
北白川Ｃ式 …… 27,45,131,375
北白川追分町遺跡（京都市）…… 375
北白川小倉町遺跡（京都市）…… 376
北花田火山灰層 …… 35
鬼虎川火山灰層 …… 35
畿内第Ⅰ様式 …… 25,26
畿内第Ⅱ様式 …… 25,371,384
畿内第Ⅲ様式 …… 51,65,69,73,
74,76,80,87,90,131,371,381,382,385
畿内第Ⅳ様式 …… 25,51,65,69,73,74,76,80,87,90,131
畿内第Ⅴ様式 …… 24,77
衣蓋形埴輪 …… 161,210
機能時堆積層 …… 43,44,65,69,104,407
機能面 …… 43,44,65,69,367,386,415
逆刺角 …… 367
毬果 …… 32,193
旧石器 …… 1,13,14,16,28,37,39,40,45,
…… 118,145,249,267,325-328,347,349,414
供儀 …… 411-413
鋸歯文 …… 159,205,207,210
近似等高線 …… 251,255,256,259,263

く

クサビ関連資料 ……
…… 249,251,254,259,267-269,273,277,
280,281,291,293,300,301,316,349,353
管玉 …… 227,228

屈折率 …… 36,248
雲井遺跡（神戸市）…… 376
黒ボク …… 24,28
桑飼下遺跡（舞鶴市）…… 373

け

形象埴輪 …… 97,154,159,161,189,191,199,205,207,212-214,216,389-393,395,397,404,411
畦畔 …… 23,85,98,101,125,142,145,146,153,154,163,165,166,173-175,185,186,188
元祐通宝 …… 129

こ

更新統 …… 28,35,248
洪水 …… 37
神並遺跡（東大阪市）…… 377,379
五角形鏃 …… 368,373,377
古川辺川・古川辺谷 27,45,105,114,124,246,250,251,414
黒斑 …… 90,161
甑 …… 198,220,221,226,232
古式土師器 …… 135
古長瀬川 …… 17,40
古平野川 …… 17
木葉形石鏃 …… 25

さ

細石刃状剥片 …… 249
細部調整（剥片）…… 45,249,251,269,271,273,279,281,287-289,291,295,297,301,305,307,309,310,314,316,328,344-346,349,373,375
阪手火山灰層 …… 35,36,247
削器 …… 249,281,307,316,328,340,350
柵 …… 156,217,218
サヌカイト …… 51,83,91,92,93,125,133,136,139,267,288,328,329,346,347,352,370,371,376,384,386
狭山池 …… 17
作用部 …… 367
讃良川遺跡（寝屋川市）…… 376,379,386

し

滋賀里遺跡（大津市）…… 373
滋賀里Ⅳ式 …… 26,46,105,373
地震 …… 45,125,126,256
自然釉 …… 155,185
自然流路 …… 8,47,51,74,83,86,104,111,115,124,133,136,137,257,259,414
七ノ坪古墳（長原130号墳）…… 3,389,394,395,396
篠原遺跡（神戸市）…… 373
シボリメ …… 55,63,77
島畠 …… 22,48,77,80,82,83,89,92,97,103,110,121,139,161,185,236
種子 …… 32,238
使用痕をもつ剥片 …… 249,251,254,256,269,273,277,280,281,285,288,289,291,295,297,301,303,328,346
庄内式 …… 24,130
縄文土器 …… 37,45,46,87,104,118,131
条里 …… 48,51,121,175
植物遺体 …… 32,40,101,104,115,184,191,193,238
神功開宝 …… 58
刃部形成剥片 …… 249,263,303,328,349
新免古墳群（豊中市）…… 396

す

水田 …… 3,6,7,8,10,11,22-25,41,43,44,47,48,59,82,83,85,92,93,98,101,125,145,146,173,174,185,186,188,189,230,241,246
犂 …… 19,41,53,80,82,83,110,121,135,151
素掘り …… 154,155,220,223
擂鉢 …… 120,157

せ

製塩土器 …… 179,220,222
青磁 …… 142,228

石英製石鏃 …… 251,370,376
石核 …… 16,45
石剣 …… 249,314,316,385
石刃状剥片 …… 249,251,266,268,269,281,285,288,289,291,293,306,307,309,310,328,330,332,333,342,353
石錐 …… 249,251,269,271,328
石槍 …… 125,249,314,316
石鏃 …… 3,8,13,16,27,28,45,51,82,91-93,114,118,125,133,249,251,255,257,263,289,291,301,307,325-328,349,350,367-371,373,375-377,379-386,414
石鏃未製品 …… 255,291,382
石器遺物 …… 5,6,7,13-16,28,29,45,112,124,136,249-251,254-257,259,263,266-269,277,280,281,285,288,289,293,295,299-301,303,306,307,309,414
石器生産工程 …… 251,254-256,259,261,266,267,340,344-346,348-352,414
石器密集部 …… 15,45,250,251,254-257,259,263,266-268,277,280,281,285,288,293,295,299,300,303,306,307,325-328,344,345,347,349,350-352,414
石匙 …… 249,314,316
石斧 …… 26
石棒 …… 249
石核 …… 249,251,254,256,259,261,263,266-269,271-273,275,277,279,280,281,285,287-289,291,293-295,297-301,303-307,309,311,314,316,328,329,332-334,336-338,340-350,352,353
接合資料 …… 250,251,254-257,259,263,266-269,271-273,277,279,280,281,285,287-289,291,293-297,299-301,303,305-309,327,328,334,342,347,350
瀬戸 …… 119,157
瀬戸内技法 …… 267,329,340
銭貨 …… 58,113
線刻 …… 58,77,97,114,154,161,205,207,210,212,213
尖基式 …… 369
尖基無茎式 …… 370,371,382
尖頭器 …… 8,16,28,45,133

そ

双孔円板 …… 227,228
葬送儀礼 …… 241,391,392,407,411,413,415

た

高廻り1号墳（長原169号墳） …… 11,147,171,180
高廻り2号墳（長原170号墳） …… 10,11,147,171,180,394
打撃角 …… 271,337-340
竪穴住居 …… 43,44
叩き石 …… 249,259,316
盾形埴輪 …… 97,159,180,205,207,210,213,332,371,376,389,391-393,403,409,411
縦長剥片 …… 92
炭化物 …… 25-27,78,257

ち

チャート製石鏃 …… 251,370,379,386
中位段丘構成層 …… 17,18,32,35-37,40
沖積層下部層 …… 28,39
沖積層上部層 …… 19,24,35,37
沖積層中部層 …… 27,36,39
調整剥片 …… 45
長胴甕 …… 130

つ

塚ノ本古墳（長原1号墳） …… 394,395
筒形器台 …… 155
津堂城山（松原市） …… 394
坪境溝 …… 9,48,49,51,53,58,95,97,98,102,115,119,121,139,236,241
爪形文土器 …… 27,86,87

て

低位段丘構成層 …… 17,18,29,35,36,37,39,40

と

東播系 …… 87,113,175
動物遺体 …… 55,184,233,236,237,241
土器埋納遺構 …… 3,58,61,136
土壙 …… 8,11,24,46,48,51,61,80,81,88-91,93,98,104,110,121,125,135,136,141,145,151,154-156,164,167-169,174,175,185,257,409,411,413
凸基式 …… 91,92
凸基無茎式 …… 369,384

な

ナイフ形石器 …… 16,29,45,249,251,256,257,263,266,269,273,285,287-289,295,297,309,314,326-328
ナウマンゾウ …… 32,33
長池遺跡（高松市）…… 371
長原古墳群 …… 1,3,11,24,145,181,186,237,389,391,393-398,404,406,412,413,415
長原式土器 …… 25,26,37,371,373
難波累層 …… 19,24,27,28,39

に

西川辺川 …… 47,104,107,111
二上山（北麓遺跡群）…… 267,329,370,384

ぬ

布目 …… 171,177,228

は

羽釜 …… 89,120,153,231
剥片類型 …… 333-338,340-345
ハケ原体 …… 399,401
浴遺跡（高松市）…… 371
貼付け突帯 …… 104
搬入礫 …… 251,277,327,347,352,371,379,384,385

ひ

東除川 …… 17,19,146,185
微細石器遺物 …… 250,251,254-257,259,261,263,266,325,326,347,414
備前 …… 19
ピット …… 8,22,48,61,65,86,110,135,136,141,156,163,164,167,175,231
平瓦 …… 152,171

ふ

仏並遺跡（和泉市）…… 373
船元Ⅱ式 …… 28,376
布留遺跡（天理市）…… 412
布留式土器 …… 77,135,168
古市古墳群 …… 394
プロダクト・グループ …… 345-347,349,350-353

へ

平安Ⅱ期 …… 55,113,129,157,169,171,230,231
平安Ⅲ期 …… 53,55,113,120,129,170,171,177,179,225,230
平安Ⅳ期 …… 55,58,171,177,223,231
平安京 …… 177
平安神宮火山灰層 …… 35,36,40,156,247
平基無茎式 …… 368,373
平行タタキ …… 57,77,154,194,197,198,222
平城宮Ⅲ …… 23
平城宮Ⅴ …… 23,159
平城宮Ⅵ …… 23,159
ヘラ記号 …… 121,130,180,199,201,215,406

ほ

方形周溝墓 …… 3,6,9,25,44,48,49,51,61,65,67,69,73,74,122
紡錘車 …… 3
方墳 …… 6,81
北宋銭 …… 113,129
帆立貝形（前方後円墳）…… 186,389,391,393-396
掘立柱建物 …… 22,24,110,145,217,218,227

ま

曲物 …… 151
松河戸火山灰層 …… 35
丸瓦 …… 151,177

み

水差し …… 69,73
溝 …… 6,8,9,11,12,19,22,24,25,41,44,48,51,53,55,58,59,65,67,69,74,75,80-83,85,86,88-93,95,97,98,102-104,110,111,121,122,125,131,133,135,139-143,145,146,151,153-155,163-166,174,184,185,188,217,222,223,229,230,237
南口古墳（長原 181 号墳）…… 11,145,146,184,186,193,199,201,207,215,216,237,241,389,391,393-397,401,403-407,409,411-413,415
美濃 …… 19
宮滝遺跡（奈良県吉野町）…… 373

め

面取り …… 136,177

も

目的的剥片 …… 254,256,259,266,299,309,333,336,337,341,344-350,352
木葉形石鏃 …… 369,371
盛土 …… 5,65,67,95,122,186-188,191,198,220,227,228

や

八尾南遺跡（八尾市）…… 6,24,26,77
矢ノ塚遺跡（善通寺市）…… 371
山賀遺跡（東大阪市）…… 371
大和川 …… 7,17,40,88
弥生土器 …… 8,23,25,37,51,58,65,77,80,87,90,111,140,141

ゆ

有茎式 …… 369,385
有茎尖頭器 …… 8,249,257,301,312,325,349,376,377,383,386
有底剥片 …… 268,269,271,273,277,279,280,281,285,287-289,293,295,297,299,301,303,307,309,311,340,341,342,344,345,349,350,353

よ

横穴式石室 …… 3
横大路火山灰層 …… 28,35,36
横形剥片 …… 268,271,273,275,281,285,288,289,291,293-295,297,299,300,301,305-307,311,314,316,328-331,353,414
四ツ池式 …… 26
四葉地区遺跡 …… 338

り

流理構造 …… 273,287,289

れ

礫（叩き石の可能性のある）…… 249,251,257,259,263,293,295,300,301,303,307,309,316,347
列点文 …… 73,74,97,155,168,226

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume Ⅷ

A Report of Excavations made
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1988

March 1995

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

SA : Palisade or fence
SB : Building
SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SP : Pothole
NR : Natural stream
LC : Lithic concentration
SX : Other features

CONTENTS

Foreword
Explanatoriy notes

Chapter I Progress and outline of research 1
S.1 History of research at the Nagahara Site 1
S.2 Research prior to the development in 1988 4
1. Outline of research work 4
2. South-eastern sector of the Nagahara Site 6
3. Central sector of the Nagahara Site 9
4. Western sector of the Nagahara Site 11
S.3 Research on lithic remains 13
1. Progress and outline of Palaeolithic research 13
2. Method of field research of lithic remains 13
3. Numbering of lithic remains 15
4. Outline of research on lithic remains in 1988 16

Chapter II Archaeological strata in the Nagahara Site 17
S.1 Outline of topography and geology 17
S.2 Standard Stratigraphy at the Nagahara Site 19
A Holocene 19
1. Upper Alluvium I 19
2. Upper Alluvium II 24
3. Middle Alluvium 27
B Upper Pleistocene and Lower Holocene 28
1. NG12/13 transitional zone 28
2. Lower Alluvium 28
3. Lower Terrace Formation 29
4. Upper Middle Terrace Formation 32
S.3 Volcanic ash layer and horizon 35
1. Volcanic ash layer associated on Archaeological sites 35
2. Correlation of volcanic ash at the Nagahara Site 35
S.4 Age of Formation 37
1. Age of Upper Alluvium I 37
2. Age of Upper Alluvium II 37
3. Age of Middle Alluvium 39
4. Age between NG12/13 transitional zone to Lower Alluvium 39
5. Age of Lower Terrace Formation 39
6. Age of upper Middle Terrace Formation 40
S.5 Terms of Stratigraphy and Sedimentology used in this report 41

1. Terms from stratigraphical relation of detecting feature planes 41
2. Terms from formative process of feature planes 42
3. Description of forming materials of strata and feature 44

Chapter III Results of research ; First part 45
S.1 General view of research results at South-eastern sector of the Nagahara Site 45
S.2 Results of researches at South-eastern sector of the Nagahara Site 49
A Research area NG88-1 and NG88-59 49
1. Stratigraphy 49
2. Features and it's remains 51
3. Remains from strata 75
B Research area NG88-15-1 77
C Research area NG88-15- 2 82
D Research area NG88-22-1 88
E Research area NG88-22- 2 90
F Research area NG88-22-3 93
G Research area NG88-42 99
H Research area NG88-29 and NG88-37 105
I Research area NG88-69 114
J Research area NG88-36 131
K Research area NG88-57 137
L Research area NG88-66 141
S.3 General view of research results at Central and Western sectors of Nagahara Site 145
S.4 Results of researches at central sector of Nagahara Site 147
A Research area NG88-20-1 147
B Research area NG88-20-2 161
C Research area NG88-27 171
D Research area NG88-17 180
E Research area NG88-54 181
F Research area NG88-16 228
S.5 Results of research on animal remains 233
1. Outlines of remains 233
2. Method of investigation 233
3. Diescription 235
4. Conclusion 241
S.6 Analysis of grain size and composition of depositional materials 242
1. Samples and method 242
2. Results of analysis 245
3. Discussion 246

4. Conclusion 238

Chapter IV Results of research ; Later part 249
S.1 Excavated situation of lithic remains 249
1. Outline of research results and recognition of horizon 249
2. Research area NG88-69 250
3. Research area NG88-37 257
4. Research area NG88-29 263
S.2 Observation of lithic remains 267
1. Aims of observation 267
2. Terms of description and marking method 247
3. Lithic material from research area NG88-69 268
4. Lithic material from research area NG88-37 293
5. Lithic material from research area NG88-29 303
S.3 Tanged point and other stone tools 312
1. Tanged point 312
2. Other lithic tools 314

Chapter V Investigation of features and remains 325
S.1 Attributive analysis of flakes unearthed from 88AB, AC, AE areas
..... Kinugawa K., Cho C. and Shimizu K. 325
S.2 Stone arrow heads from Jomon to Yayoi period strata
..... Suga E. 367
S.3 Reconstraction of outside view of Minamiguchi Burial Mound and
examination of it's position in Ngahara Tumb claster ..... Tanaka K. 389
S.4 Classification of cylindrical haniwa excavated from Minamiguchi
Burial Mound and it's significance ..... Tsuji M. 397
S.5 On sacrifice of horse in Minamiguchi Burial Mound
..... Kubo K. 407
S.6 Conclusion of report 414

Bibriography 416

Postscript
Index
English summary
Abstract of report

English summary

1. Introduction

The Nagahara and adjoining Uriwari site are located in the southeastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan (Fig.1). They have been discovered to be well-preserved composite sites dating from the Late Palaeolithic to the Modern Period. A rezoning project in the site's area has been underway since 1981 to accommodate rapid residential growth.

This report details the achievements of the excavations prior to the rezoning project, carried out at the Nagahara site in the fiscal year of 1988 (beginning April 1st.). The research in the fiscal year was carried out at twenty places in sixteen areas, and covered more than five thousand six hundred square meters (Table 1).

2. Stratigraphy, horizon of Features and Remains

The Nagahara site is situated in the marginal area ranging from the southern part of the Kawachi Plane, consisting of alluvium deposits, to northeastern part of Uriwari Plateau, consisting of the Middle and Lower Terrace Formations (Fig. 6).

The depositional sediments are divided into sixteen archeological bed-groups at the site and surrounding areas. Each bed is subdivided into several layers (Table 4).

Upper Alluvium (Late Jomon Period to Modern age)

This group consists of Beds 1 to 11. Beds 1 to 7A, named Upper Alluvium I, are composed of alternating beds of thick sand with gravel and thin mud, and large artificial features are observable. Beds 7B to 11, named Upper Alluvium II, are composed of alternating beds of thick mud and thin sand with wide variety of sedimentary faces formed by the interaction of artificial and natural sedimentation. These eleven beds correspond to the Upper Namba Formation and belong to the upper Holocene, underlaying the standard area of central Osaka plain.

An volcanic ash layer is interbedded in lower part of Bed 9Ciii and fell in the Late Jomon Period, dating to ca. 3,000 years ago. It possibly corresponds to the BB7 volcanic ash layer found in the Lake Biwa boring core.

In Bed 4, the remains of many houses along with a numerous variety of pottery were found in a small settlement. Several paddy fields were located in association with the settlement, all dating to the Medieval period.

Beds 6 and 7A contained many paddy fields and several houses dating from the Kofun to Asuka Periods. The paddy fields bear evidence of at least three occurrences of flood deposited sand and gravel, and were reconstructed after each instance.

In Bed 7Bi, more than 200 small, Kofun period, burial mounds were located, now referred to as the Nagahara Tomb Cluster. Bed 7Biii featured the remains of late Yayoi Period pit dwellings. Several of them show evidence of destruction by fire.

On the surface of Bed 9A, we found the oldest paddy field in the Osaka area. It was cultivated from the Early, to early-Middle Yayoi Periods. In Beds 9B and 9A, the latest type of Jomon pottery used in the western part of Japan, namely Nagahara Type Pottery, was found. It was used during the time of transition between the Final Jomon and Early Yayoi periods.

Middle Alluvium (Initial to Middle Jomon Period)

This group consists of the Bed 12 subgroup and the transition zone 12/13. The Bed 12 subgroup is composed mainly of dark silt and clay with sand. Transition zone 12/13 is composed of weathered silt. These two layers correspond to the Middle Namba Formation and belong to the lower Holocene.

The Yoko-oji volcanic ash layer is interbedded in the transition zone 12/13 and mainly consists of buble wall type (H type) volcanic glass ; a little of them is colored brown. This volcanic ash fell in the Early Jomon Period, 6,300 years B.P., by ^{14}C dating.

Lower Alluvium (Latest Palaeolithic age to Incipient Jomon Period)

This group consists of Bed 13A, is composed of silt and clay, and disconformably covered the lower beds. The bed corresponds to the Lower Namba Formation and belongs to the Latest Pleistocene.

The Sakate volcanic ash layer is interbedded in Bed 13Ai and mainly consists of feldspar, fiber type (C and T type) volcanic glass, and hornblende. This volcanic ash fell in the Latest Palaeolithic age, ten and some thousand years B.P., by ^{14}C dating.

In Bed 13A, we found many stone tool factories with knife-shaped tools, so call backed blades, whose technological tradition might have derived from the Setouchi technique. The date was estimated in Late glacial substage.

Lower Terrace Formation (Middle to Late Palaeolithic age)

This formation consists of Bed 13B, 14, and 15. Bed 13B is composed of dark silt, Bed 14 is composed of silt with sand and gravel, and Bed15, composed of sand and gravel, becomes finer from bottom to top, and disconformably covered the lower beds. These beds correspond to the Temma Formation distributed under the central Osaka plain belong to the uppermost Pleistocene.

The Heian-jingu volcanic ash layer is interbedded in Bed 13Bii and mainly consists of H type volcanic glass. This volcanic ash fell in the Late Palaeolithic age, 24,000-25,000 B.P., by ^{14}C dating.

Bed 14 was formed more than 25,000 years ago, possibly as long as 30,000 years ago. We found some stone tools in the bed manufactured by a techonomogical tradition derived from the technique of so call Daikei-yo knife that preceded the Setouchi technique.

On the basement plane of Bed 15, we found some fossil footprints of Naumann's elephant (*Palaeoloxodon naumanni*) and giant deer.

Middle Terrace Formation (Early to Middle Palaeolithic)

This formation consists of the Bed 16 subgroup and unnamed beds. Bed 16A is composed of sand and mud, and disconformably covered the lower beds. Bed 16B is

Table 4 Stratigraphy at Nagahara Site, Osaka, Japan, in 1995

Stratigraphic Succession			Facies		Thickness (cm)	Fossils & Natural Phenomena	Main Archaeological Features and Human Remains	Dating	Period
Holocene	Upper Alluvium I	Bed 0	Banking		–				Present
		Bed 1	Arabule soil		15-25				Modern
		Bed 2	grayish brown silty sand		6-24	dark band	↓ Small Ditches, Spade track — China, Porcelain	(400)	Edo
		Bed 3	light yellowish brown-gray clayey silt with granule		12-20		↓ Small Ditches, Plowed field, Spade track — Gashitu-ware, China Ga-ware(Ⅳ-Ⅴ)		Muromachi
		Bed 4 A	dark grayish brown sand & gravel	medium sand with granule	8-15		Ga-ware, Smoked Haji, Porcelain, Ceramic, Sue-ware, Haji-ware: ← Paddy field — Ga-ware(Ⅲ-Ⅳ)		
		Bed 4 B i		brownish gray sandy silt	av.20		↓ Small Ditches, Spade track — Ga-ware(Ⅱ-Ⅲ)		Kamakura
		ii		medium sand with granule	av.5		← Paddy field		
		iii		gray sandy silt	av.15		↓ Small Ditches — Smoked Haji, Ga-ware(Ⅰ-Ⅱ)	(800)	
		Bed 4 C i		yellowish brown sandy silt	av.20		← Paddy field — (Heian Ⅰ-Ⅲ)		Heian
		ii	10-45cm	yellowish brown silty sand	av.20		▽Building with pillars embedded directly in the ground	(1200)	
		Bed 5 A	gray sand & gravel. silty fine sand layer intercalating		10-80		← Hoe track — Haji-ware, Sue-ware(Heijo-kyu Ⅴ-Ⅵ)		
		Bed 5 B	fine-very fine sand		2-8		← Paddy field		Nara
		Bed 6 A i	dark bluish gray clayey silt		≦20	Mud snail	Haji-ware, Sue-ware(Heijo-kyu Ⅲ)	(1300)	
		ii up.	dark greenish gray medium-fine sand		≦5		← Human and Artiodactyla Footprints		
		ii lw.	dark olive gray cly. silt & very f. sand alt.		av.10		← Paddy field		
		Bed 6 B i	brownish black silty clay with sand		≦15	Mud snail	Haji-ware, Sue-ware(Asuka Ⅲ-Ⅳ)		Asuka
		ii	gray clay, silt & c. sand with granule		≦5	← sun cracks	Haji-ware, Sue-ware(Asuka Ⅲ)		
		Bed 7 A i	gray clay with sand		av.10		← Paddy field	(1400)	
		ii	brownish black silty clay with sand		av.15		← Paddy field — Haji-ware, Sue-ware(Asuka Ⅰ) ↓ Building with pillars embedded directly in the ground		Late Kofun
	Upper Alluvium II	Bed 7 B i	brownish black sandy clay		≦35		← Nagahara mounded tomb cluster — Haniwa (Ⅱ), Sue-ware (~MT15)		Middle Kofun
		ii	brown very c. sand - clayey silt		≦20			(1600)	Early Kofun
		iii	dark brown clayey silt		≦5		← Paddy field(Yaominami Site) — Syonai type, Yayoi pottery Ⅴ ↓ Square-shaped mound burial, Building	(1700)	Late Yayoi
		Bed 8 A	bluish gray sand & gravel		≦40		← Square-shaped mound burial, Ditch		
		Bed 8 B	dark brown silty medium sand		av.10		Stone arrow head, Yayoi pottery Ⅲ, Ⅳ	(2000)	Middle Yayoi
		Bed 8 C i	dull yellowish brown v. c.-m. sand		av.25		Stone arrow head		
		ii	yellowish brown silty clay		≦15	← sun cracks	← Human track		
		Bed 9 A'	gray silty clay		av.10		← Paddy field, Ditch ← Stone tool factory — Yayoi pottery, Ⅰ		
		Bed 9 A	brownish black sand & silty clay		3-15		Yayoi pottery Ⅰ, Jomon pottery(Nagahara-type)		Early Yayoi

Holocene	Upper Alluvium II	Bed 9 B i	grayish olive sand & gravel		≦90				
		ii	dark grayish yellow silty clay		10-40		Clay figurine Stone rod	Yayoi pottery Ⅰ, Bow, Pestle	
		iii	grayish olive silty clay		3-14		▽Ceramic coffin		(2300)
		iv	dark grayish olive silty clay		8-50	Quercus glauca Cephalotaxus harringtonia	Jomon pottery(Nagahara-type), Axe, Bow		Final Jomon
		v	grayish olive silty clay & sand		10-35	← sun cracks	▽Strange pit ▽Pit dwelling	← Jomon pottery(Shigasato Ⅳ type) Stone arrow head	
		Bed 9 C i	brownish black silty clay		2-8				(3000)
		ii	gray silty clay - sand & gravel		2-10		Jomon pottery(Yotsuike-type)	(Fukuda K Ⅱ type;Yaominami Site)	Late Jomon
		iii up.	olive black silty clay with sand		7-25				
		iii lw.	dark gray silt - clayey c. sand		av. 5	← volcanic ash horizon "BB7 Ash Layer" ?!			
		Bed 10	sand & gravel, very fine sand & silt		≦80	← earthquake			
		Bed 11	greenish gray silty clay		≦16	← sun cracks			← 4020±110Sl(GaK-11323)
	Middle Alluvium	Bed 12 A	brownish black clay silt with gravel		≦15		Jomon pottery(Kitashirakawa C type), Stone arrow head		← 4740±140Sl(GaK-14942) ← 4900±140Sl(GaK-14941)
		Bed 12 B i	dark gray fine silt-clayey silt 5-20cm	dark gray fine sandy silt	av.20	← earthquake ?			
		ii		yellowish gray sty. volc. glass	av.10	(derived ash)			Middle Jomon
		iii		gray tuffacious silt	av.10			Jomon pottery(Funamoto Ⅱ type)	
		iv		yellowish gray sand & gravel	≦15		▽Earthen pit ▽Stone tool factory	Stone arrow head	← 4900±100Cb (GaK-14940)
		Bed 12 C		greenish gray sty. v. f. sand	≦45	← sun cracks			
	12 / 13 transited zone		dark gray fine silt & volcanic grassy silt (black weathered soil)		≦5	← volcanic ash horizon "Yoko-oji Volcanic Ash Layer"			← 6300
	Lw. Alv.	Bed 13 A i	pale yellow silt		≦5			Micro blade, Tanged point, Flake	Initial Jomon
		ii	grayish yellow fine silt		av. 7	← volcanic ash horizon "Sakate Volcanic Ash Layer"	▽Stone tool factory	Scraper, Knife blade, Flake, Core	(15000)
Late Pleistocene	Lower Terrace Formation	Bed 13 B i	yellowish brown silty clay		≦5	← sun cracks		? Flake, Core	
		ii	yellowish gray silty volcanic ash		≦5	← volcanic ash horizon "Heian-Jingu Volcanic Ash Layer"			← 25000
		Bed 13 C	dark grayish brown silty clay		av.12	← sun cracks			Late Palaeo-lithic
		Bed 14 up.	greenish gray silty sand - clay		20-80			Flake	
		lw.	gray sand & gravel - sandy silt				▽ Stone tool factory	End scraper, Backed blade, Retouched Flake tool	
		Bed 15 up.	bluish gray clay - sand & gravel		150 - 450				
		lw.	sand & gravel			Picea bicolor var. acicularis ← footprint fossils of Naumann's elephants			
	Middle Terrace Formation	Bed 16 A	sand & silt alternation with gravel		≦150	← petrified forest, footprint fossils of Naumann's elephants & giant deer			
		Bed 16 B i	dark brown peaty clay		≦20	← volcanic ash horizon "Asaka Volcanic Ash Layer"			← 87000
		ii	gray tuffacious sandy clay with granule		≦20	← volcanic ash horizon "Kitahanada Volcanic Ash Layer"			← 91000
		iii	gray coarse sand & gravel		≦40				
		un-named bed	sand & gravel - sandy st		40-70				Middle Palaeo-lithic
			dark green coarse sandy clay			← footprint fossils of elephants like pits			

Wd ; Wood Cb ; Carbon Sh ; Shall Pt ; Peat Sl ; Soil ← ; Features excavated on top plane ↓ ; Features excavated on basement plane ▽ ; Features excavated inner bed

composed mainly of dark clay. The unnamed beds are composed of mud, sand and gravel. This group corresponds to the Uemachi Formation, distributed on the Uemachi Upland and belongs to the late Pleistocene.

The oldest volcanic ash that could be recognized in the area is interbedded in Bed 16Bii and is characterized by beta quartz and H type volcanic glass. This is called the Kitahanada volcanic ash layer and its date is estimated at 91 ka. The Abiko Volcanic ash layer is interbedded in the lower part of Bed 16Bi. This volcanic ash layer is characterized by brown hornblende and H type glass. Its date is estimated at 86 ka.

On the surface of Bed 16B, a petrified forest was unearthed, the age of the petrified forest had been estimated at over 80,000 years, though the ^{14}C dating of the woods indicates only ca. 31,000 years. Fossil elephant and giant deer tracks on the surface were also found. Evidence of human activity is anticipated as these animals are known to have been hunted.

3. Research results in 1988

3-1 Southeastern Sector of the Nagahara Site (Fig. 3, Table 6)

Late Palaeolithic Period

Lithic remains, including backed knives and cores, were found in Bed 13. There were three lithic concentrations (LC1301 - 1303) in research area 37 and four (LC1304 - 1307) in research area 39. These concentrations were distributed around a small buried gully, called Old Kawanabe-dani (Fig. 152-158, Plates 18-19).

Incipient to Middle Jomon Period

Many lithic remains were also excavated from the transition zone 12/13 to Bed 12A. In research area 29, evidence of a concentration of lithic remains was discovered for the first time. LC1203 and LC1204 includes scraper-like retouched flakes, cores, numerous arrow heads, and tanged points. These objects were discovered in the area where Old Kawanabe Gully changes its form into Old Kawanabe Stream, NR1205b (Fig. 159-161, Plate 18).

Early-Middle Jomon period pottery was discovered in research area 15-2 (Fig. 42, Photo. 6). Final-Middle Jomon period pottery was discover in bed 12A, in research area 69 (Fig. 67, Photo. 7). Although this find consists only of very small fragments, it provided precious information as to the date of the zone 12/13 to Bed 12A (Fig. 42, 67).

Two subsidiary streams, NR1206 and NR1207, were found in the flood plain layer (Bed 10/11) of Old Kawanabe Stream, in research areas 69 and 36. At the time of the initial sedimentation of Beds 10 and 11, final-Middle Jomon or initial-Late Jomon period, there is presumed to have been a large earthquake, the results of which we can observe in research area 69, from the intraformational folding, liquefaction and the eruption of sand between the strata (Fig. 64, Plate 25).

Late to middle-Final Jomon Period

A functionally unknown pit, SX905, was excavated from the top plane of Bed 9C in research area 15-2 (Fig. 40, Plate 10). Middle-Final Jomon pottery was found in research area 42 (Fig. 52). This provided us with information to identify the latest

period of Bed 9C.

Late-Final Jomon to initial-Middle Yayoi Periods

We could not find evidence of human activity at the horizon of Bed 9B, but at the time of sedimentation of Bed 9A, there is much evidence of activity. The paddy field discovered on the top plane of Bed 9A', in research area 22-3, is one of the earliest fields in Osaka area. It is thought to be a drained-field type. In research area 15-2, a large earthen bank was discovered, presumed to have bounded one edge of the paddy field (Fig. 49, Plate 9,15).

The west Kawanabe Stream, NR901, which was discovered in research areas 1, 37, 42 and 57, is thought to be the area's main life stream (Fig. 55, Plate 17). Two possible subsidiaries, named Kawanabe Ditches 1 and 2, SD902 and SD906, were found in areas 1 and 42 (Fig. 12, 50). These may have functioned to irrigate the shallow gully area to the west (Fig. 210).

Late-Middle Yayoi Period.

Two square-shaped moated burial precincts, SX801 and SX802, were discovered at the top plane of lower part of bed 8B (Fig. 24, Plates 5-7). Although little remained of the mounds, it could be determined that they were relatively large and were equipped with numerous pieces of ceremonial pottery. The internal structure is thought to be located in the as yet unexcavated area.

Late Yayoi to Nara Period

Ditches SD714 and SD715 were excavated from the bottom face of Bed 7 in research areas 42, 57 and 69 (Fig. 61, Plate 22). They were aligned north-south and date to the Late Kofun Period. From that period through the Asuka Period, numerous small ditches were dug throughout the area and they are thought to be associated with paddy field development. Pits for the burial of pottery were also found, in research areas 1, 37 and 59 (Fig. 20, 22, 72., Plate 4).

Early Medieval

The north-south aligned ditch SD402, which is presumed to have been dug in forming age of Bed 4C, appears to be a land dividing ditch, which shows evidence of the use of the Jori system during the Early Heian period in this area (Plates 1, 2). Another land dividing ditch SD403, dating to the Kamakura - early Muromachi period, was discovered in research areas 22-3, 57 and 69 (Fig. 75). Numerous pieces of pottery were retrieved from this ditch.

Late Medieval to Early Modern Periods

Dispite some questions as to the classification of stratigraphy from the beds 2-3, ditch SD205, which follows the coarse of SD403, was excavated in research areas 22-3 and 57. It is thought to have also been located in research area 69, but was possibly destroyed by a modern land dividing ditch, SD101 (Plate 21).

Island fields were found, a feature characteristic to this area at this time. Only the field ditches were excavated, but in the southern part of this area, a cluster of fields and an irrigation well were found in research area 22-2 and others (Fig. 75).

3-2 Central and Western Sectors of Nagahara Site (Fig. 4, 5., Table 7)

Late Palaeolithic to Yayoi

No features were identified for these periods, but natural depressions were discovered in research area 20-1, filled up with bed 13B (Plate 30).

Kofun Period

The Minamiguchi Burial Mound (Nagahara Kofun 181), discovered in research area 54, on the top of the lower part of Bed 7B, should be given attention as a final stage, keyhole shaped mound in the Nagahara Tomb Cluster (Fig. 112, Plates 34-38). At an outer bank, in the side of the square section of the Kofun, cylindrical haniwa were discovered in a standing position, and numerous haniwa, pottery and remains of sacrificed horse were recovered from the moat. In research area 54, buildings, well and other features, dating to prior to the construction of the burial mound, were discovered (Fig. 140, Plates 40, 41). In research area 27, a block of earth, SX711, was discovered, piled onto Bed 7 (Fig. 91). It may have been a part of the Kofun.

In the research area 20-1 and 20-2, pits, wells, fence, and ditches, which are thought to be features of this period, were discovered associated with the bottom face of Bed 7 (Fig.89, 97, Plate 29, 32). In research area 20-1, on Bed 7, a regularly shaped depression was discovered and could be associated with land development (Fig. 82).

Asuka to Nara Periods

A paddy field of the Asuka period, on the top of Bed 6B, was excavated in research areas 20-2, 27 and 54 (Fig. 93, Plate 31, 33, 42). In particular, two Asuka period baulks, situated on either side of the ditch SD601, in research area 27, should be given attention, as features associated with then paddy field division system. A Nara period paddy field on Bed 6A was excavated in research areas 20-1 and 20-2 . This feature indicates that a vast paddy field once extended around the entire settlement in this area. A ditch was also found in research area 16, in the western sector of the site (Plate 43).

Early Medieval

The Bed 4 subgroup, representing this period, was almost completely a cultivated strata, and some features associated with cultivation were found. In research area 27, from the middle part of Bed 4Biii, the partial remains of an ancient baulk, from an earlier period was found. From Bed 4B, in research areas 20-1 and 20-2, a Kamakura Period paddy field was excavated, this had been preserved by Bed 4A, which deposited after a flood of the former Higashiyoke River (Fig. 82, 92, 102., Plate 29).

Late Medieval to Early Modern

The beds representing the stratification of this period (Beds 2-3), were again an almost completely cultivated stratum. In each research area, wells, ditches and regularly shaped steps, were discovered in great numbers, all of which could be associated with cultivation. It seems that in this period also, the Higashiyoke River, often flooded. Evidence of this was discovered in research area 54, where a part of the Minamiguchi Kofun was eroded by the actions of the flood water, resulting in the deposition of a massive sand layer (Fig. 82, 92, 102, 109).

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはっくつちょうさほうこく8
書　　名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ
副 書 名	1988年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	趙哲済・田中清美・松尾信裕・大庭重信・辻美紀・宮本康治・寺井誠・瀬尾真由美・久保和士・櫻井久之・清水和明・絹川一徳・小田木富慈美・松本百合子・細川富貴子・菅榮太郎・鳥居信子・伊藤幸司・岡村勝行・Robert Condon・京嶋覚・永島暉臣慎
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所 在 地	〒540　大阪府大阪市中央区法円坂 1-1-35　　TEL　06-943-6833
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長原遺跡（ながはらいせき）	大阪市平野区（おおさかしひらのく） 長吉長原（ながよしながはら）	27126	—	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	1次　880520～880806 15①次　880523～880712 15②次　880520～880906 890111～880208 16次　880525～880610 17次　880526 20①次　880606～880903 20②次　880913～881125 22①次　880607～880801 22②次　880621～880810 22③次　880801～881013 27次　880701～880731 29次　880706～881102 37次　880801～881227 36次　881025～881219 42次　880912～881026 54次　881020～890310 57次　881101～881224 59次　881104～890110 66次　881203～881227 69次　881215～890319	522㎡ 88㎡ 431㎡ 110㎡ 8㎡ 263㎡ 375㎡ 93㎡ 150㎡ 255㎡ 190㎡ 955㎡ 229㎡ 134㎡ 255㎡ 595㎡ 288㎡ 55㎡ 668㎡	土地区画整理事業（長吉瓜破地区）施行に伴う調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
長原遺跡	墓	旧石器	石器製作跡7	ナイフ形石器・削器	接合資料多数
	集落	縄文草創～中		有茎尖頭器2・石鏃	層位に基づく石鏃編年
	古墳	縄文晩期		深鉢1	
	田畑	弥生前～中初	水田・用水路1		当地における初期水田
	その他	弥生中期	方形周溝墓2基	大型甕・広口壺・水差	加工時に土器供献?!
		古墳中期	掘立柱建物7・井戸1	日曜雑器・石製品	
		古墳後期	前方後円墳1・溝	各種埴輪・刀形木製品	ウマ供儀の可能性
		飛鳥・奈良	畦畔・水路	土師器・須恵器	大規模水田開発
		平安	坪境溝・畦畔・用水路	土師器・黒色土器	条里の完成時期
		鎌倉	坪境溝・畦畔・耕作痕	瓦器	
		室町・近世	島畠・坪境溝	瓦質土器・近世陶磁器	旧東除川の氾濫

原 色 図 版

石器調査グリッド（88－29次調査地；北から）

有茎尖頭器（左からAC5・AH47）　×1

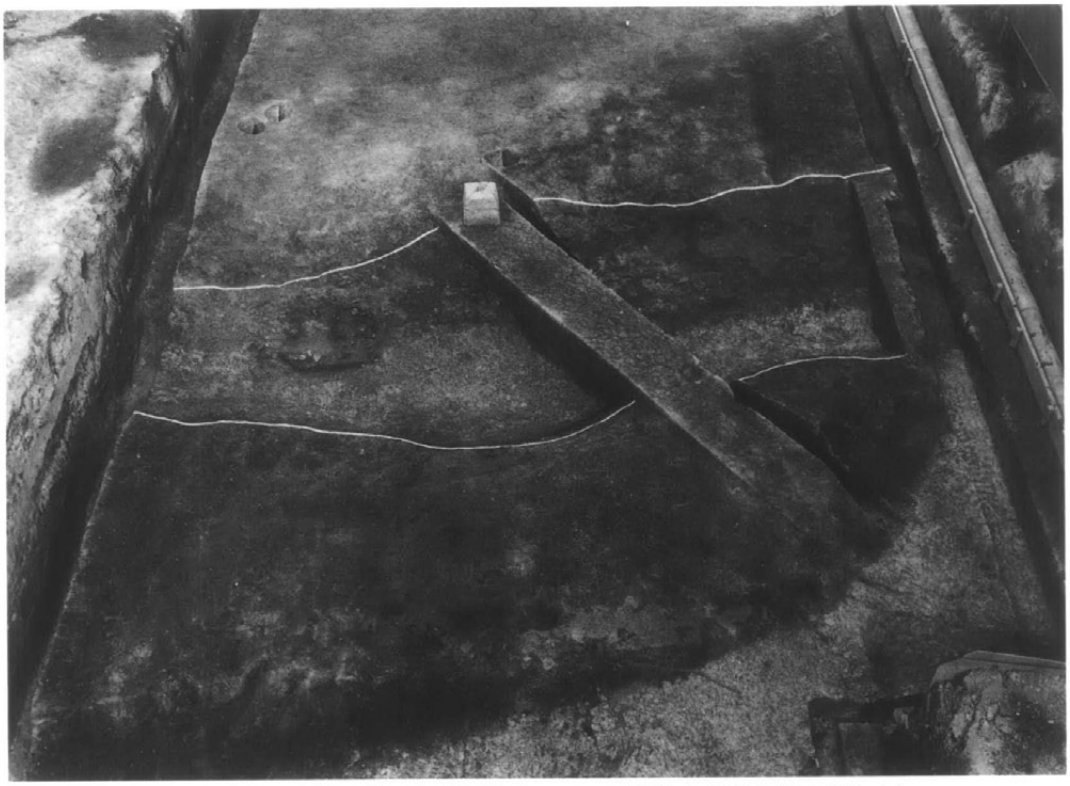
方形周溝墓（88－1次調査地；西から）
手前が１号方形周溝墓SX801
奥は２号方形周溝墓SX802

南口古墳遠景（手前は古墳築造前の建物群、88－54次調査地；南から）

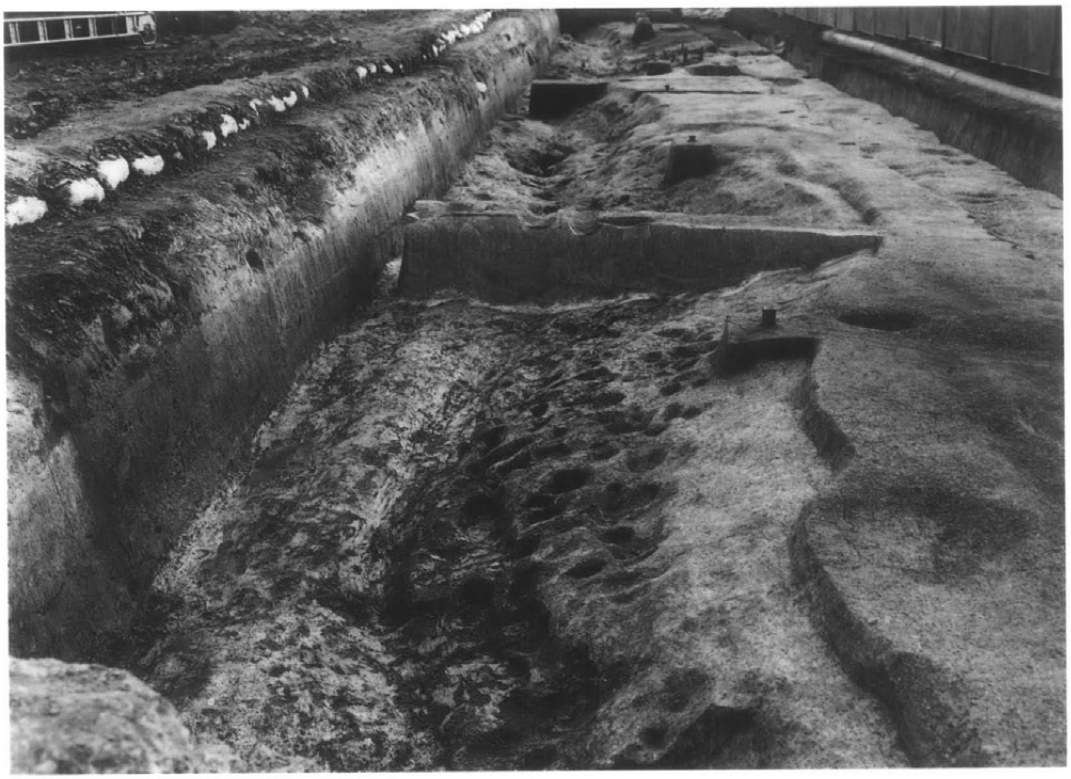
図　　版

図版一　長原東南地区88－59次調査地　全景

手前の暗色の帯は方形周溝墓SX801の周溝



坪境溝SD402　下に重なる暗色の帯は方形周溝墓SX801の周溝（1次調査地；西から）



坪境溝SD402（59次調査地；北から）

土壙SK601（1次調査地；南から）

土壙SK602・603（南から）

図版四　長原東南地区88－59次調査地　飛鳥時代の遺構

ピットSP704（東から）

窪地SX705の須恵器出土状況（断面；東から）

図版五　長原東南地区88－59次調査地　弥生時代中期の遺構

方形周溝墓SX801（西コーナー付近；南東から）

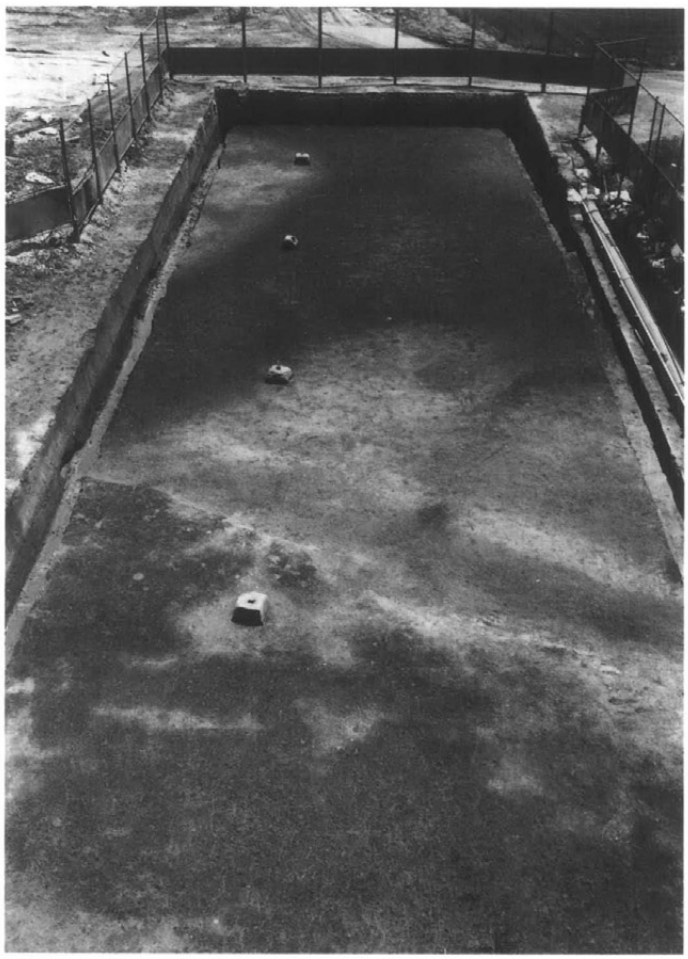
方形周溝墓SX801弥生土器出土状況（西コーナー付近；南から）

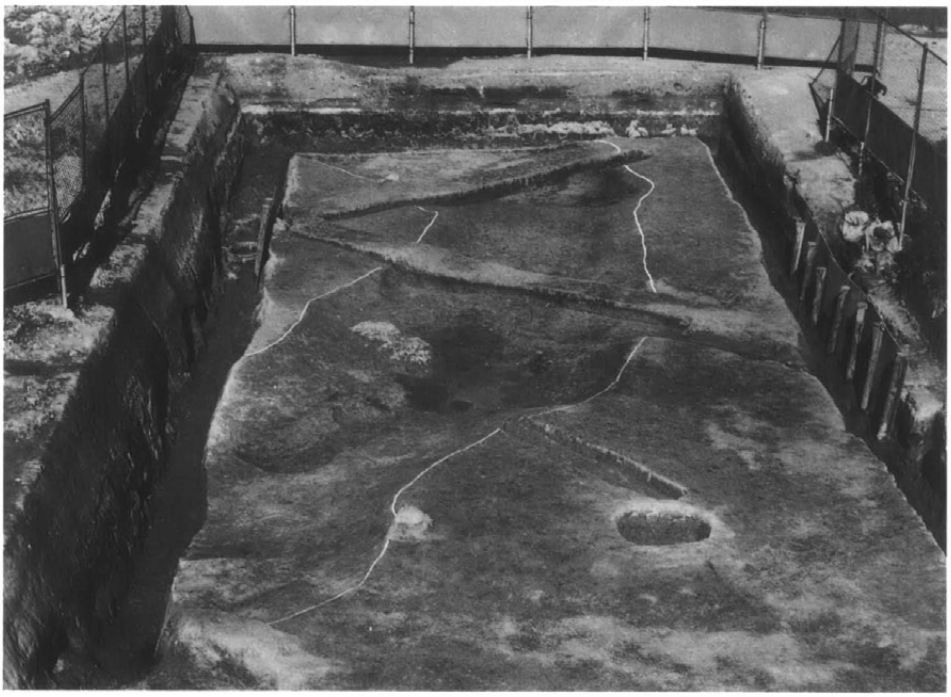
方形周溝墓SX801弥生土器出土状況（大型甕80ほか、59次調査地；西から）

方形周溝墓SX801弥生土器出土状況（広口壺79、周辺にはSX705の遺物が残る。1次調査地；西から）

図版七　長原東南地区88－1次調査地　弥生時代中期の遺構

方形周溝墓SX802検出状況
（西から）

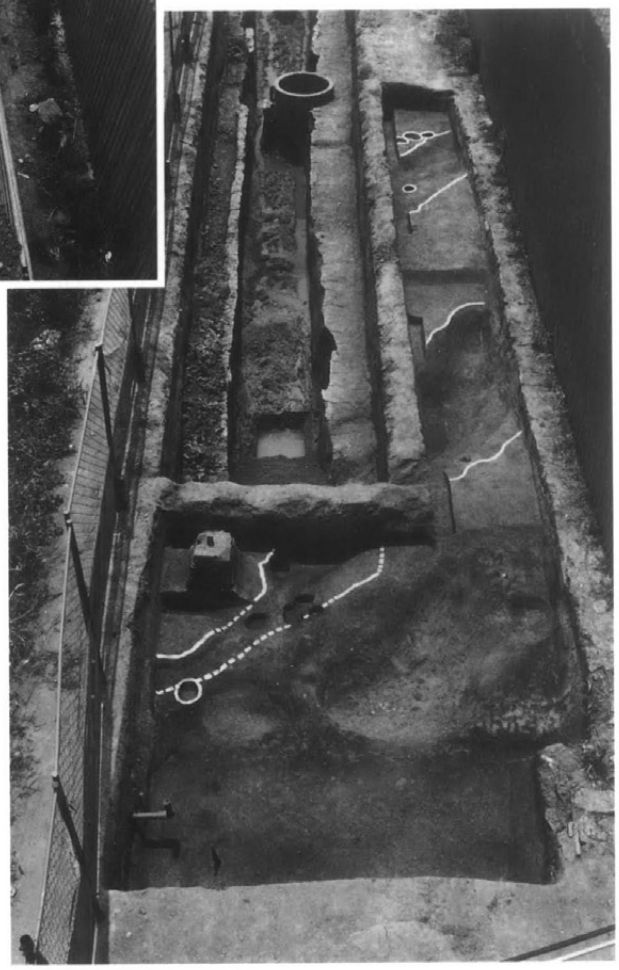




同上（発掘後；西から）

図版八　長原東南地区88－15①次調査地

中・近世の島畠溝SD304～06ほか（北から）



古墳時代の溝SD707・708（北から）

図版九　長原東南地区88－15②次調査地　弥生時代中期初頭の遺構

畦畔状の高まり（2区北西から）

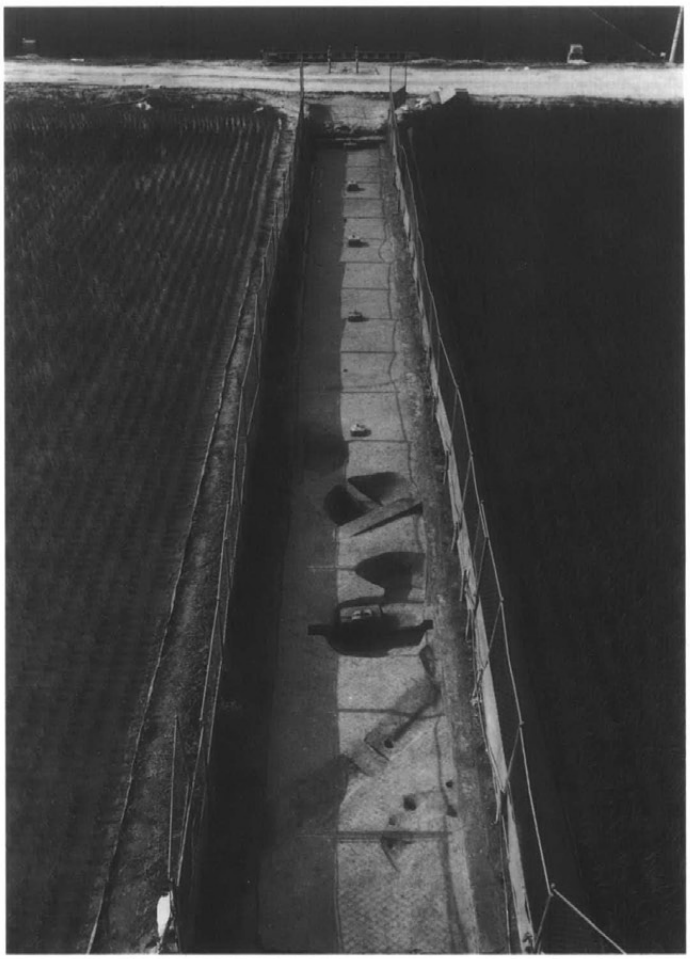
溝SD904a（3区北から）

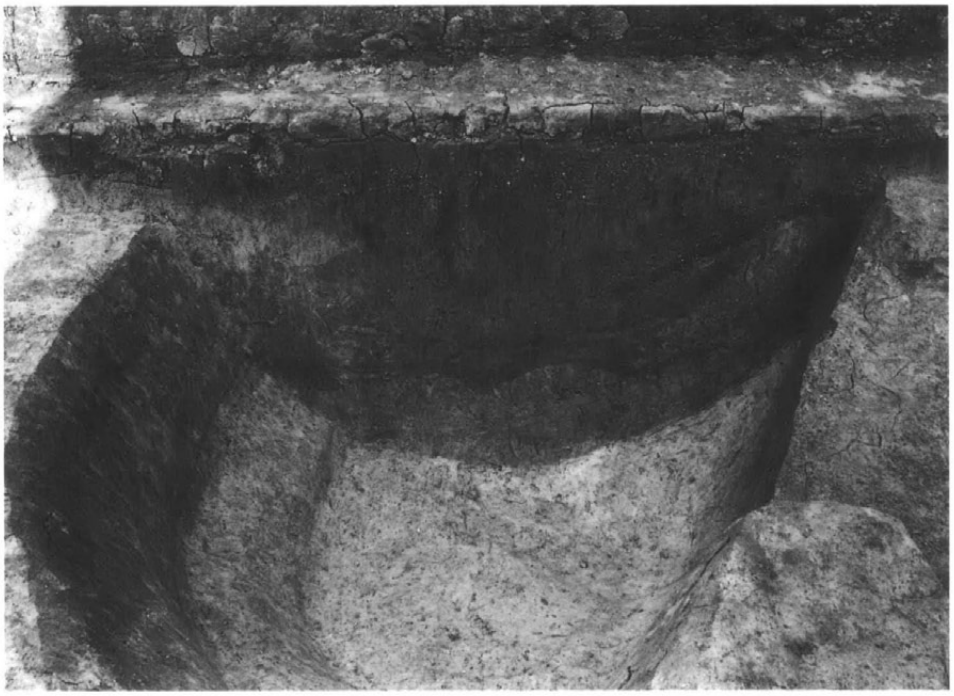
図版一〇　長原東南地区88－15②次調査地　縄文時代晩期の遺構ほか

未詳遺構SX905（2区北東から）

調査地1区南壁断面（下部の砂層は自然流路NR1201aを埋る長原10･11層）

土壙SK803～806
（斜に延びる溝は長原6-7層下面のSD606；南から）





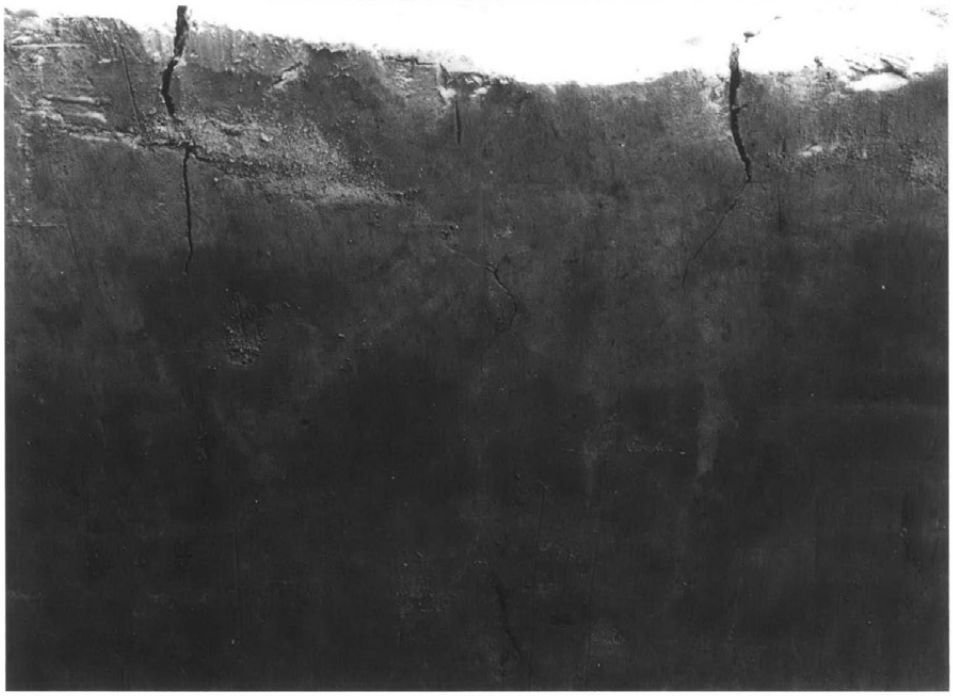
土壙SK805（西から）

調査地全景（南の大和川堤防から）

古墳時代の偶蹄類の足跡

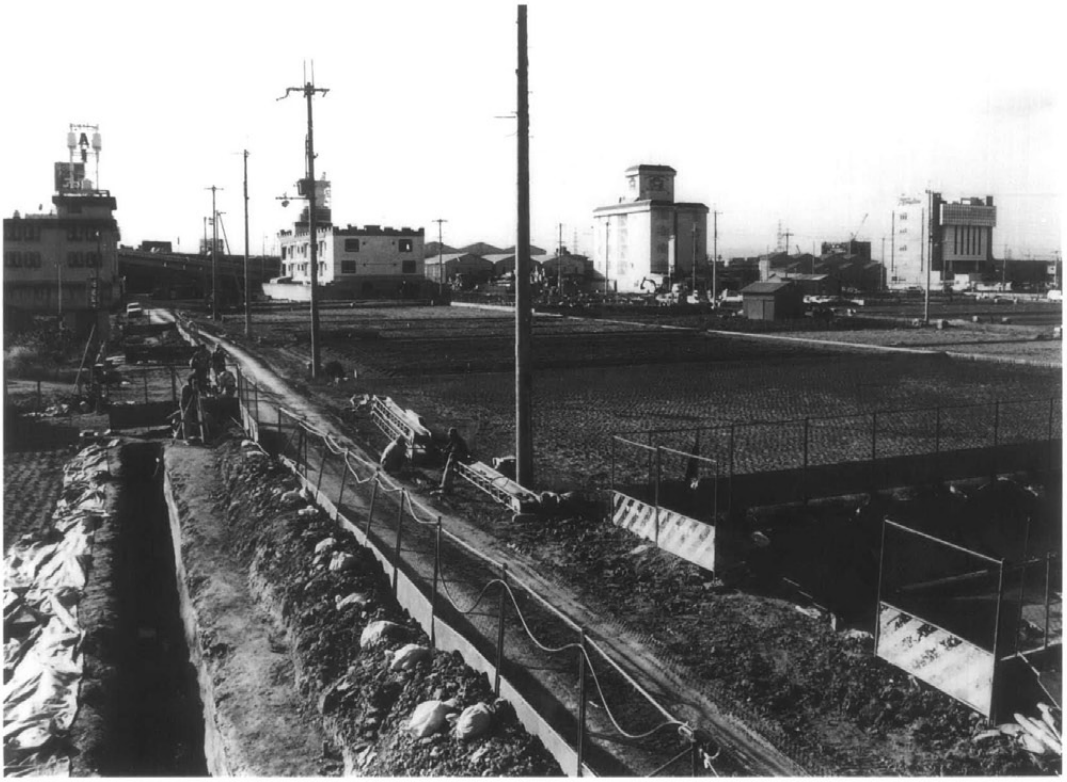
図版一三　長原東南地区88－22③次調査地　弥生時代中期初頭の遺構

水田畦畔と足跡（北から）



乾痕がみられる水田作土層の断面

図版一四　長原東南地区88－42次調査地



調査地近景（東から）

縄文晩期土器170出土状況（ＶＢ区）

全景
（手前は堅溝SD209群；南から）

ピット列SP211（29次調査地；北西から）

図版一六　長原東南地区88－29・37次調査地　飛鳥・弥生時代の遺構

飛鳥時代の溝SD711・712（29次調査地；南から）

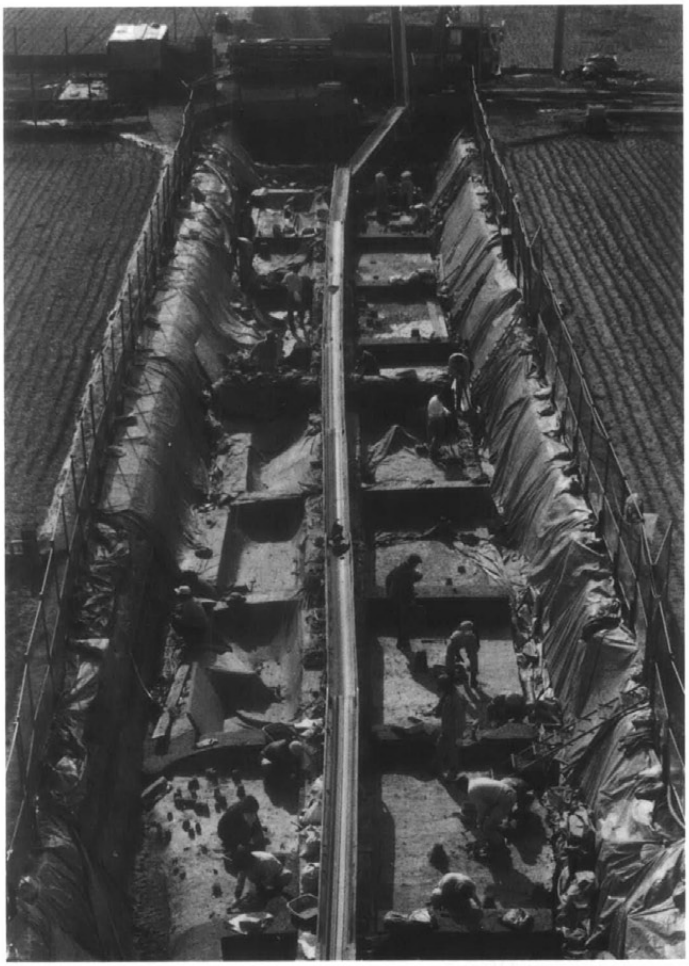
弥生時代の溝SD809と自然堆積の砂の帯（29次調査地；北から）

図版一七　長原東南地区88－29・37次調査地　弥生時代中期初頭に埋った川

自然流路NR901
（37次調査地；南から）

同上断面（西から）

図版一八　長原東南地区88－29・37次調査地　縄文～旧石器時代の遺構



石器調査遠景
（37次調査地；北から）

石器密集部LC1302・1303（37次調査地；西から）

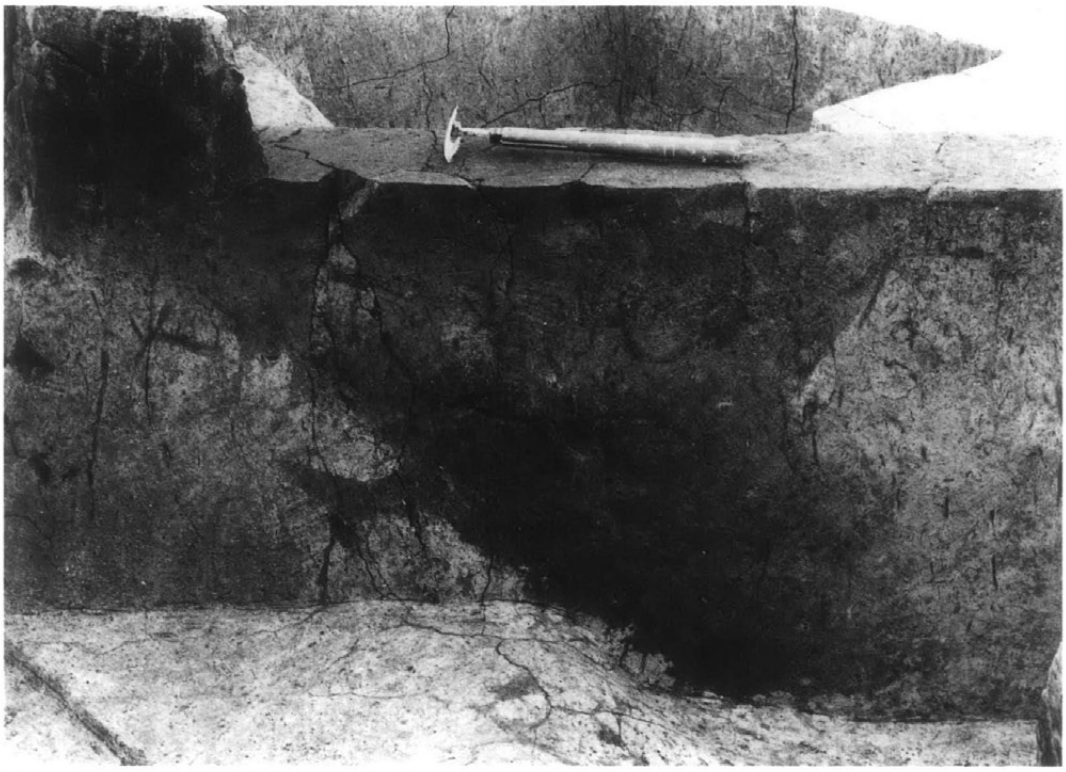
図版一九　長原東南地区88－29・37次調査地　縄文～旧石器時代の遺構

石器密集部LC1203（29次調査地；西から）

石器密集部LC1301（37次調査地；西から）

図版二〇　長原東南地区88－29・37次調査地　地層ほか

29次調査地東壁断面（石器調査後；北から）



倒木の痕断面（37次調査地；北東から）

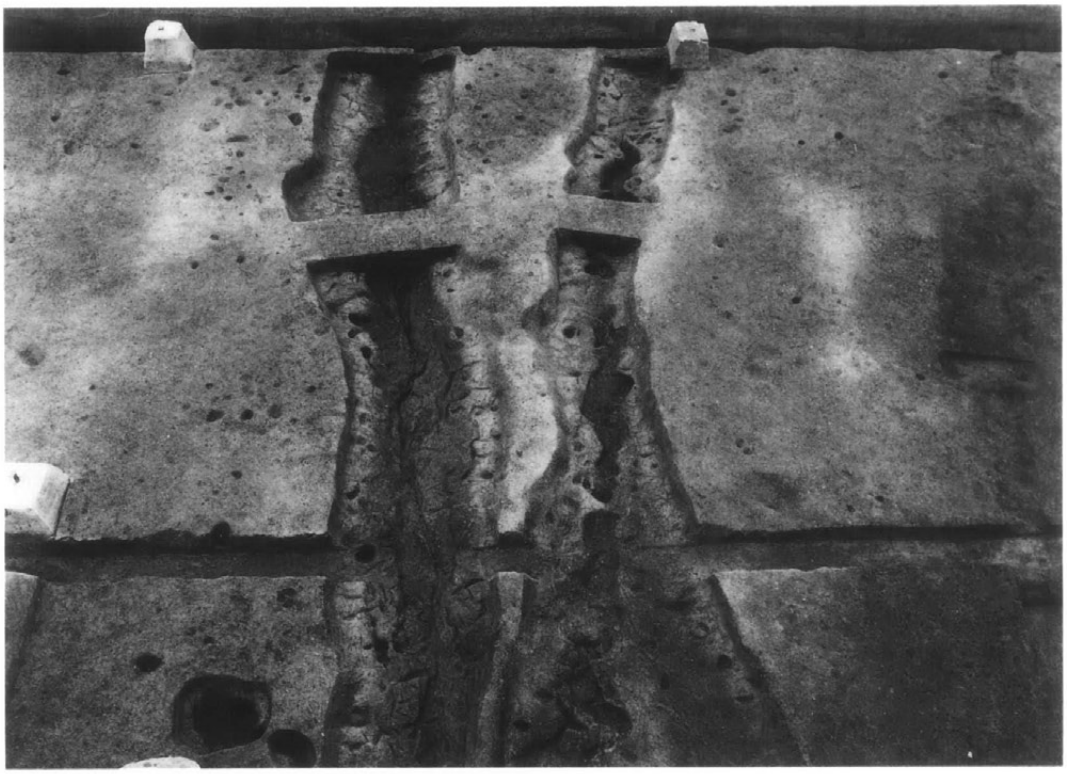
図版二一　長原東南地区88―69次調査地　鎌倉・平安時代の遺構

鎌倉時代の坪境溝SD403
（断面；北から）

平安時代の水田の足跡群？（西から）

図版二二　長原東南地区88－69次調査地　飛鳥～古墳時代の遺構

全景（西から）

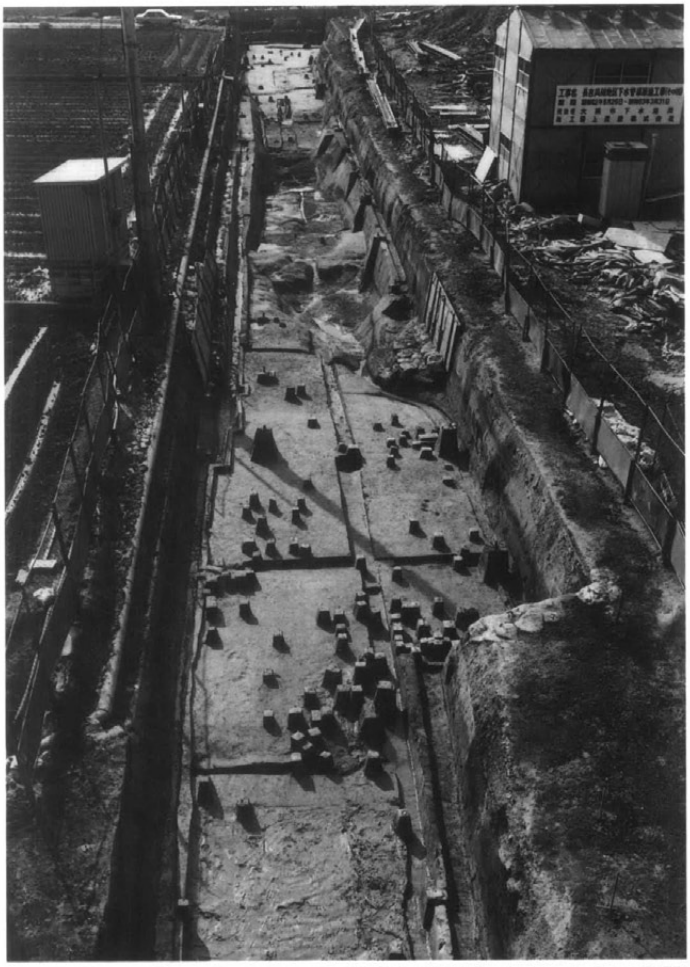


溝SD714・715（北から）

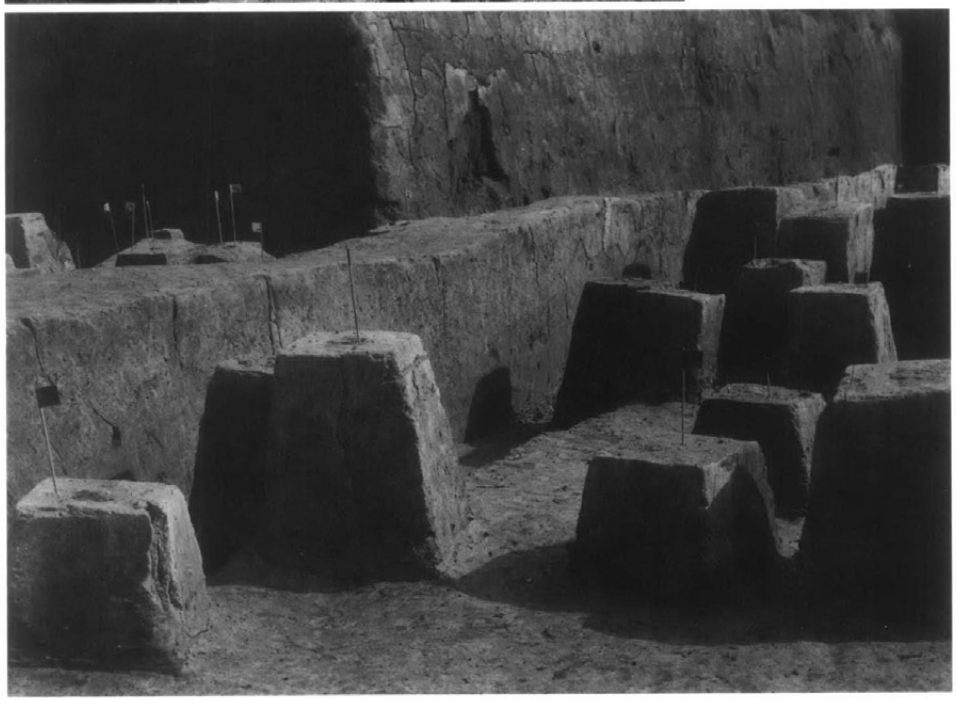
方形周溝墓SX802、自然流路NR908、NR1206の重なり（北東から）

古川辺川NR1205b（断面；北西から）

図版二四　長原東南地区88－69次調査地　旧石器時代の遺構



全景（東から）



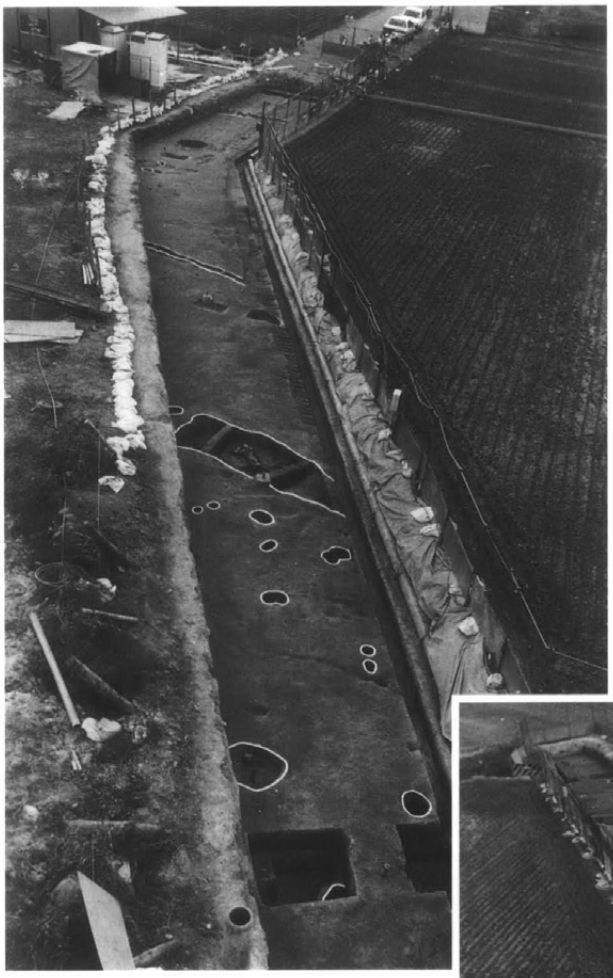
石器密集部LC1304

図版二五　長原東南地区88－69次調査地　地震の痕

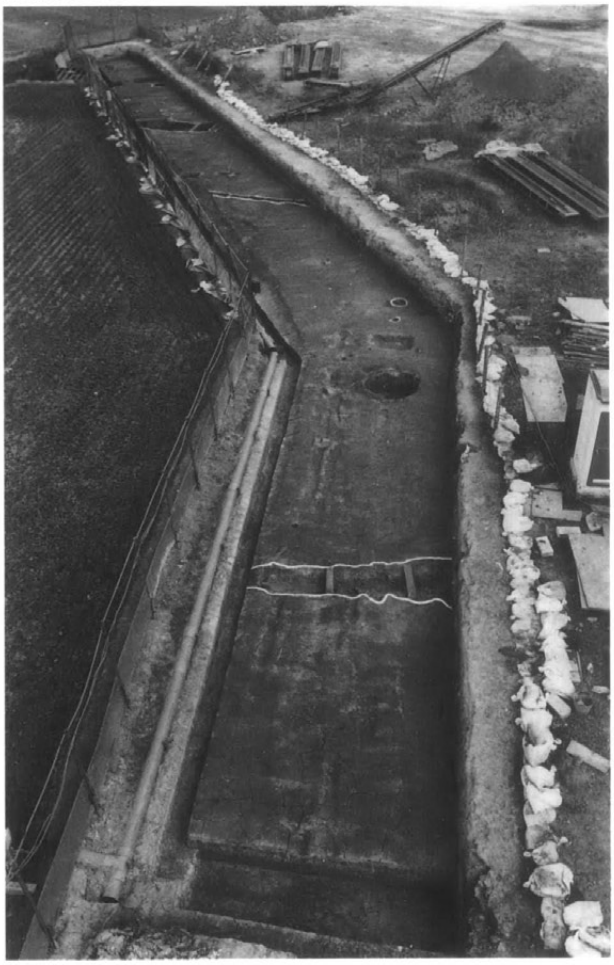
層内褶曲によってできた畦状の高まり（断面；北から）

地層の変形、断裂、噴砂がみられる地層の断面（南から）

図版二六　長原東南地区88－36次調査地　中世～古墳時代の遺構



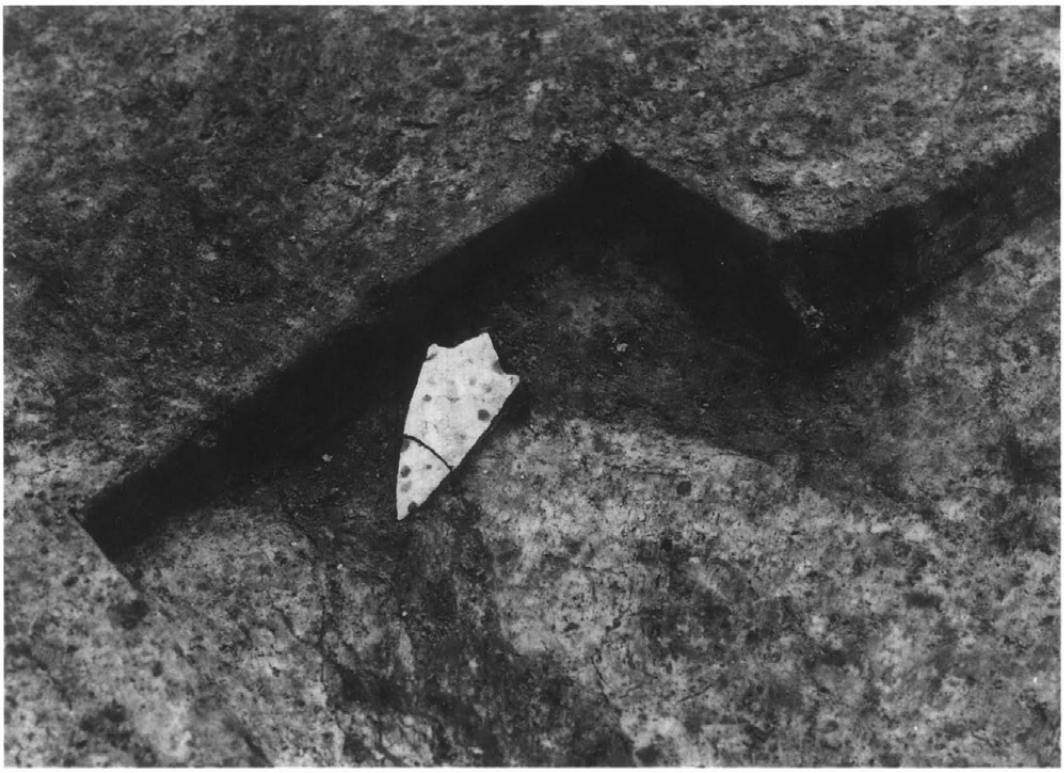
全景（中央の土壙はSK718；北東から）



全景（中央の溝はSD716；西から）

図版二七　長原東南地区88－36次調査地　古墳時代の遺構ほか

土壙SK718（北東から）



長原１２層基底付近から出土した有茎尖頭器（88AH47）

図版二八　長原東南地区88－57・66次調査地　飛鳥時代の遺構ほか

水田？の踏込み痕
（57次調査地；東から）

66次調査地全景（南西から）

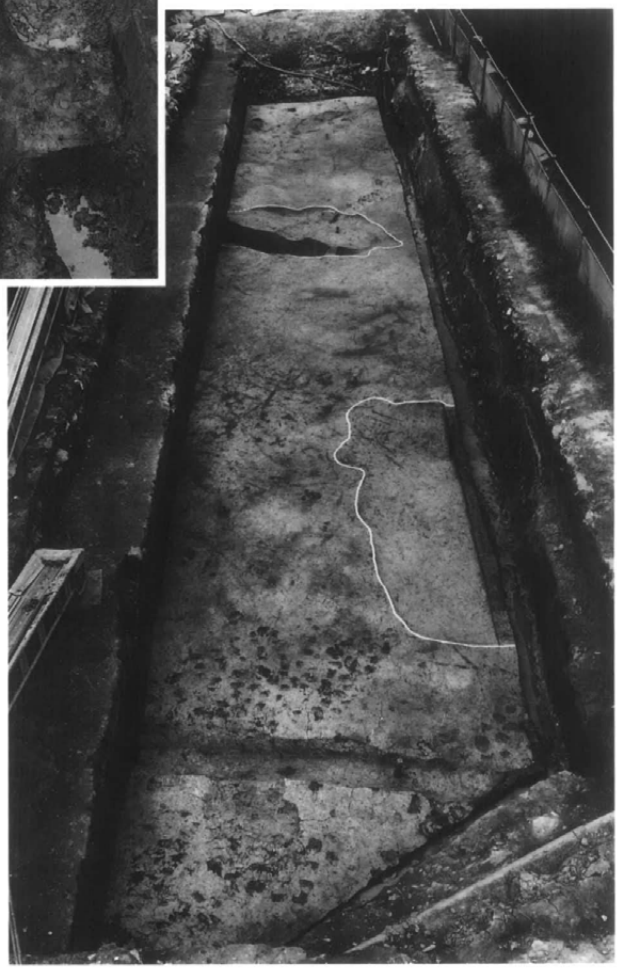
図版二九　長原中央地区88－20①次調査地　鎌倉・飛鳥～古墳時代の遺構

鎌倉時代の水田（南から）

飛鳥～古墳時代の溝SD706・707ほか
検出状況（南から）

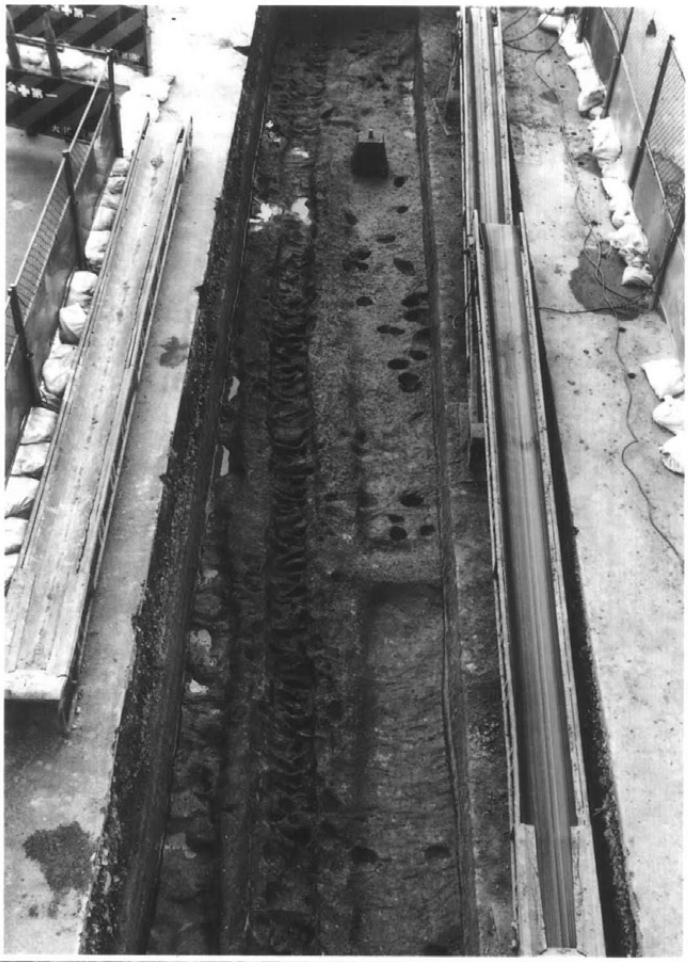
図版三〇　長原中央地区88－20①次調査地　飛鳥時代以前の遺構ほか

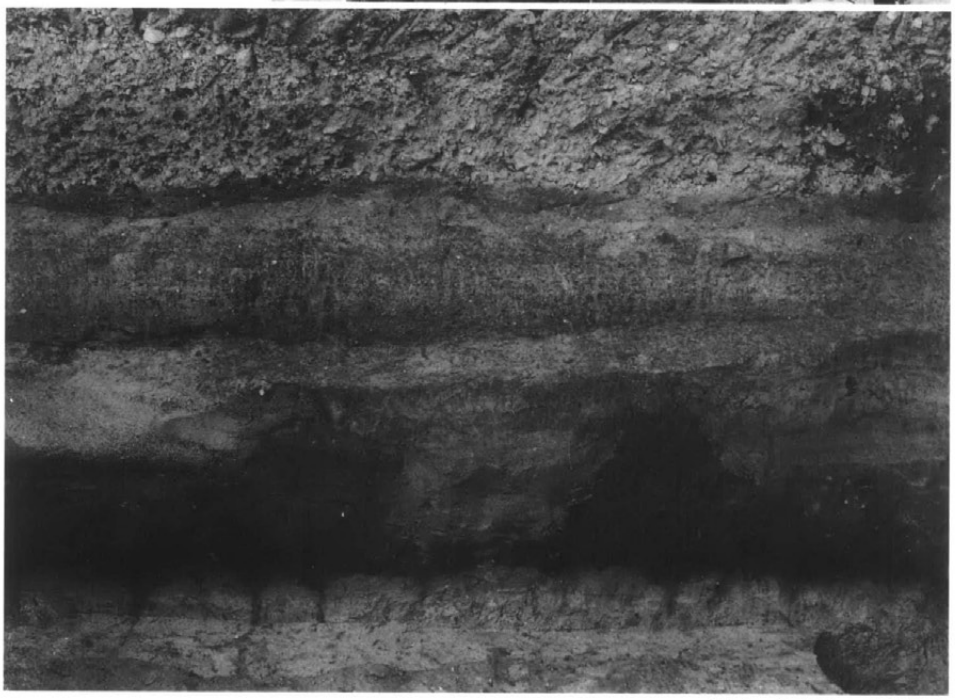
窪地SX702検出状況（3区北から）



旧石器時代？の窪地（1区南から）

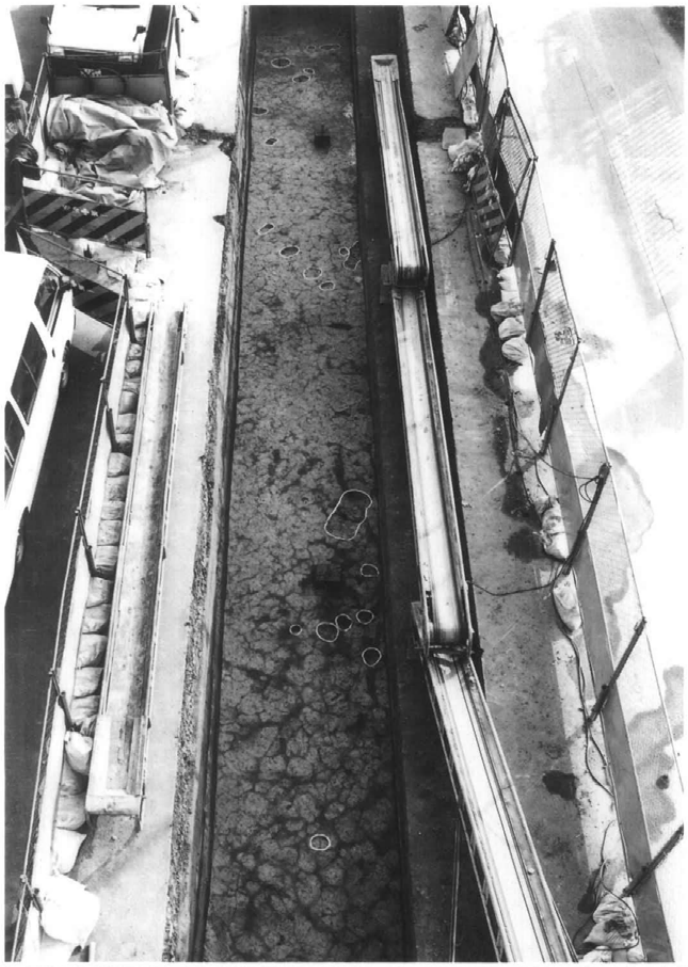
溝SD601と水田畦畔（4区北から）





同上（断面；4区南壁）

図版三二　長原中央地区88－20②次調査地　飛鳥時代以前の遺構

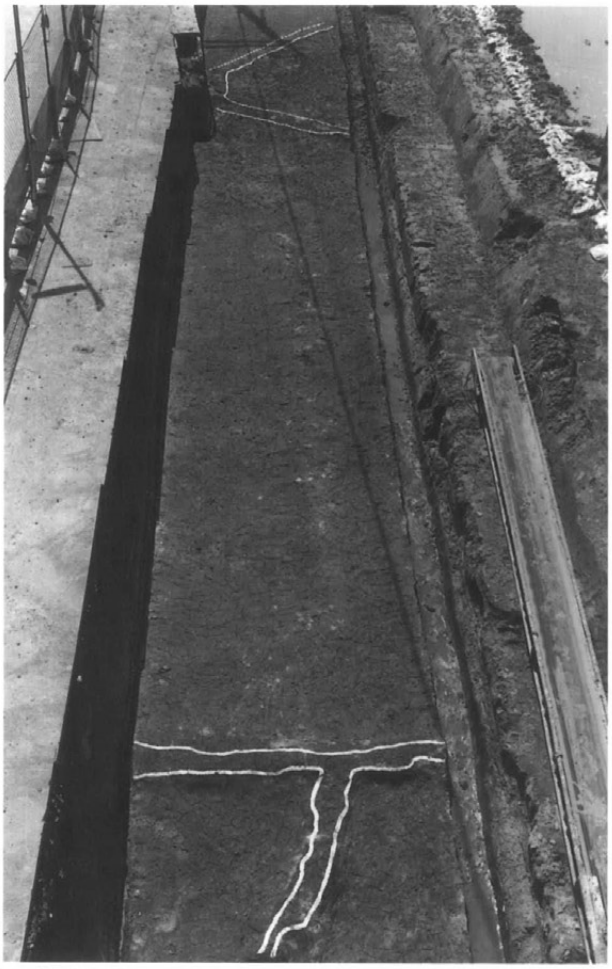


4区全景（北から）

古墳時代の土壙SK714（6区）

図版三三　長原中央地区88－27次調査地　飛鳥時代の遺構

水田畦畔（東区東から）



土壙列SK602群（西区西から）

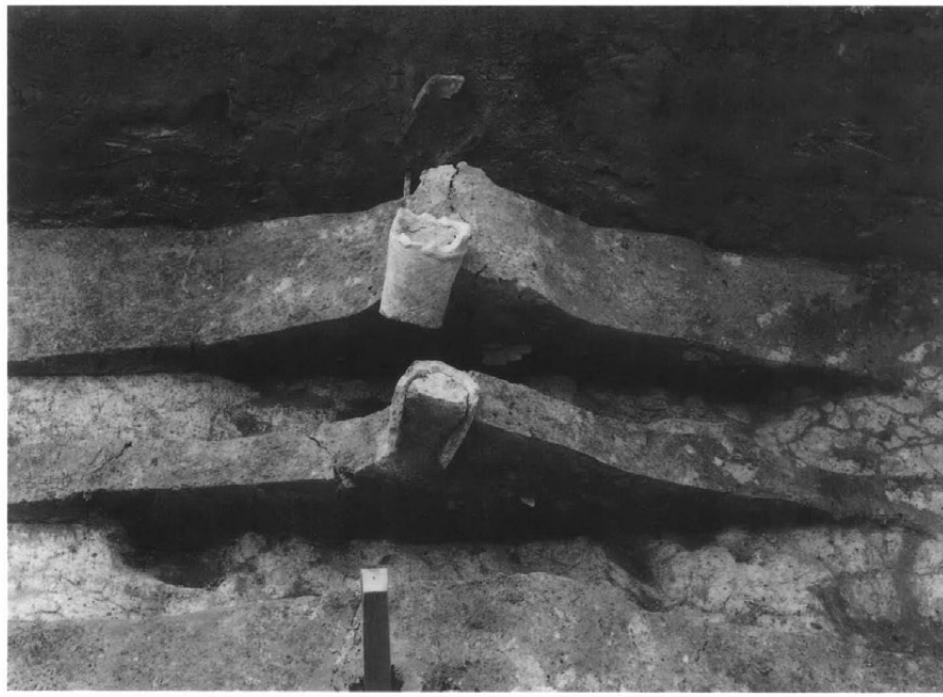
図版三四　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳（1）

遠景（手前が前方部；南から）

近景（手前が後円部；北から）

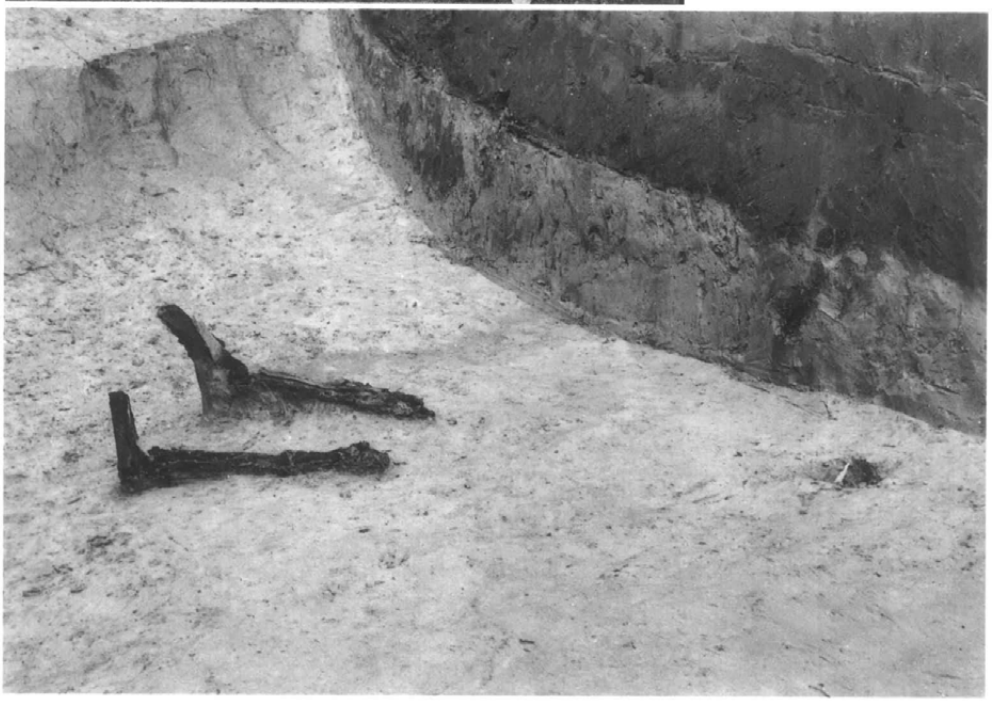
図版三五　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳（2）

円筒埴輪が並ぶ南周濠外堤
（2区東から）



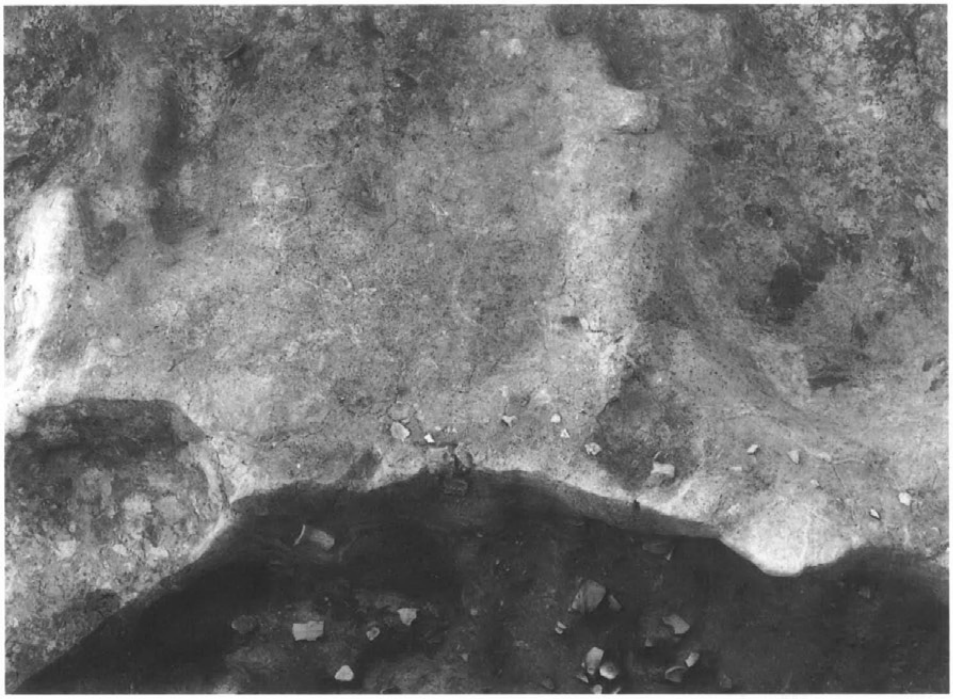
同上（断面；東から）

南周濠の遺物出土状況
（2区南から）



南周濠底から出土したウマの前肢骨（2区南西から）

図版三七　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳（4）



くびれ部の遺物出土状況
（2区東から）

北周濠の遺物出土状況（5区南から）

図版三八　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳（5）

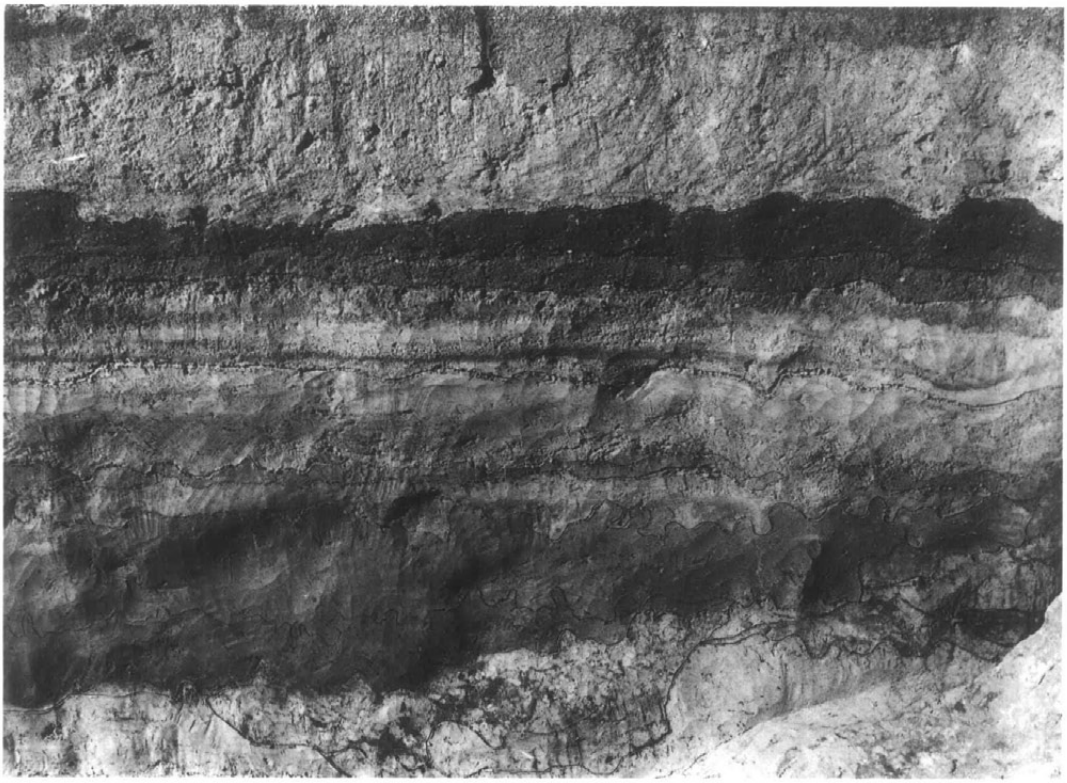
東周濠の遺物出土状況
（4区東から）

同上　刀形木製品542（北から）

墳丘盛土断面（前方部；２区東から）

同上（後円部；３区東から）

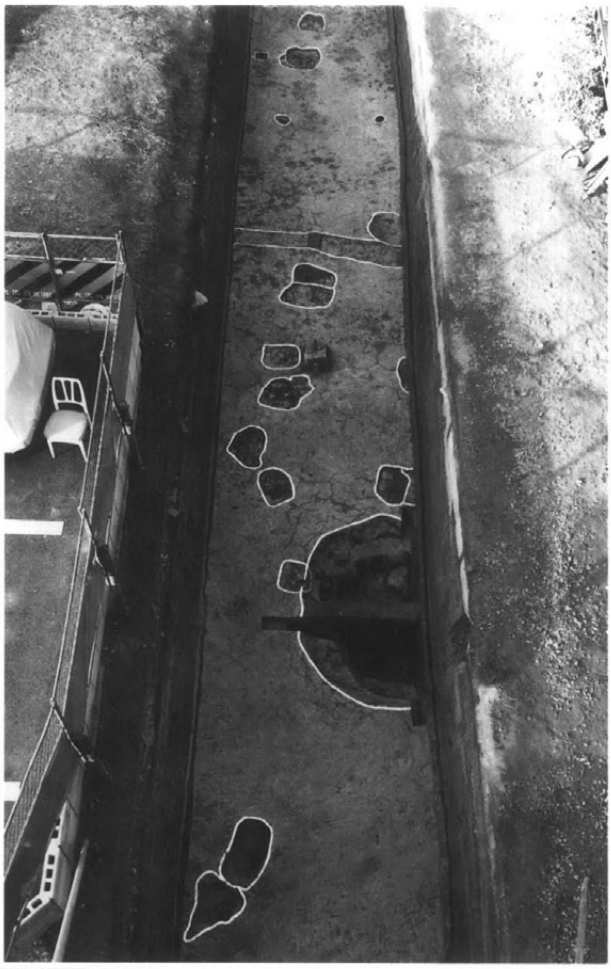
図版四〇　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳（7）ほか



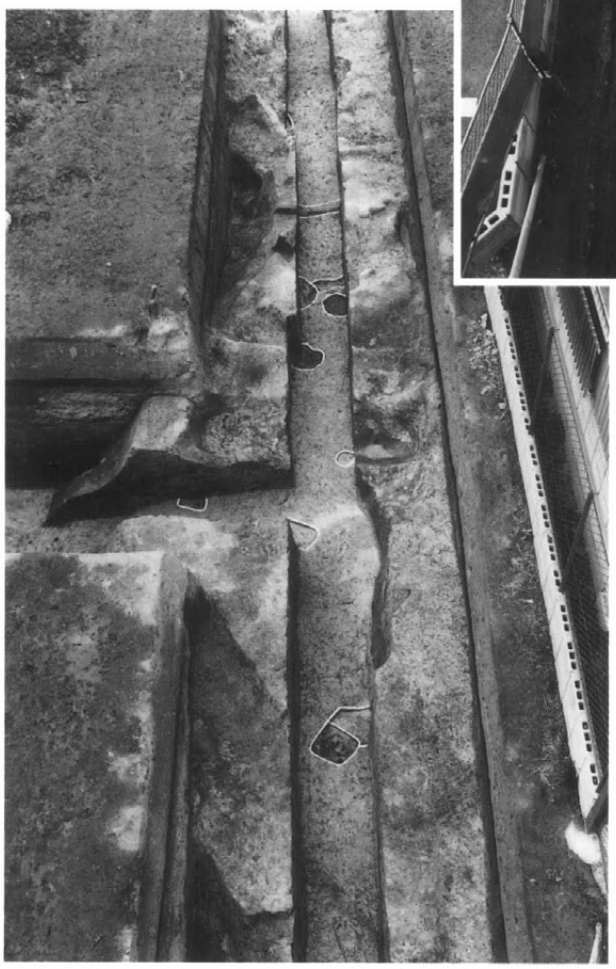
南周濠の地層断面（2区東から）

古墳時代中期の井戸SE723断面（1区西から）

図版四一　長原中央地区88－54次調査地　古墳に埋もれた古墳時代中期の遺構

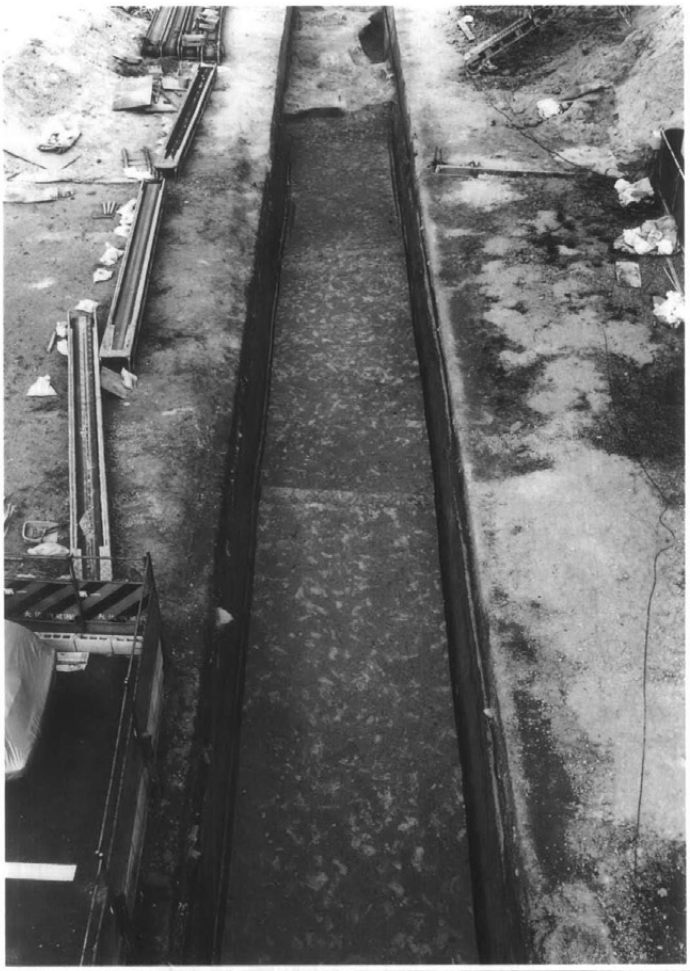


井戸SE723、掘立柱建物SB715・716ほか
（1区南から）



掘立柱建物SB721ほか（3区北から）

図版四二　長原中央地区88－54次調査地　古墳を壊した飛鳥時代の水田



水田（1･2区南から）

周濠外堤を利用した畦畔（2区南から）

図版四三　長原西地区88－16次調査地

調査地近景（南から）

飛鳥時代ごろの溝SD603（西から）

図版四四　長原東南地区88－1・59次調査地　弥生時代の遺構出土の土器

78

75

76

77

79

81

87

80

方形周溝墓SX801（75～81・87）

図版四五　長原東南地区88－1・59次調査地　古墳時代の遺構出土の須恵器

45

46

50

51

47

49

58

71

56

70

57

55

窪地SX705（45・46・49～51・55～58・71）、SX706（47・70）

図版四六　長原東南地区88―1・59次調査地　平安・古墳時代の遺構出土の土器

13

63

9

20

4

21

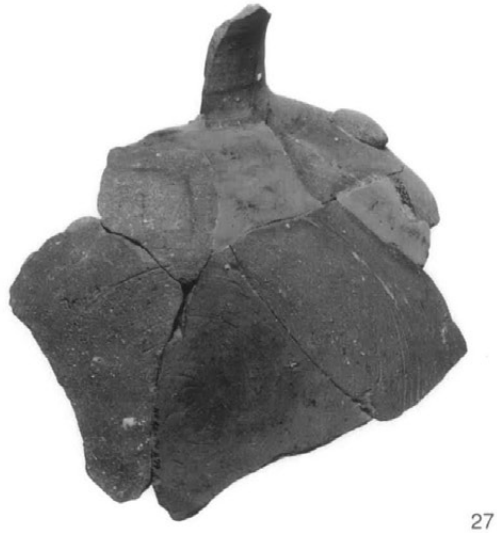
30

24

32

23

25


27

坪境溝SD402（4・9・13・20・21・23～25・27・30・32）、窪地SX705（63）

33

35-a

35-b

36

123

36

坪境溝SD402（33・35a・b・36）、長原４層（123）

図版四八　長原東南地区88－1・59・15①・22③次調査地　弥生～江戸時代の遺構出土の土器

土器埋納ピットSP704（42）、土器埋納土壙SK601（43・44）、方形周溝墓SX802（88・89）、溝SD707（120）、坪境溝SD207（138・139・155）、坪境溝SD403（153・154・156・157・160・163）

158

144

159

141

151

152

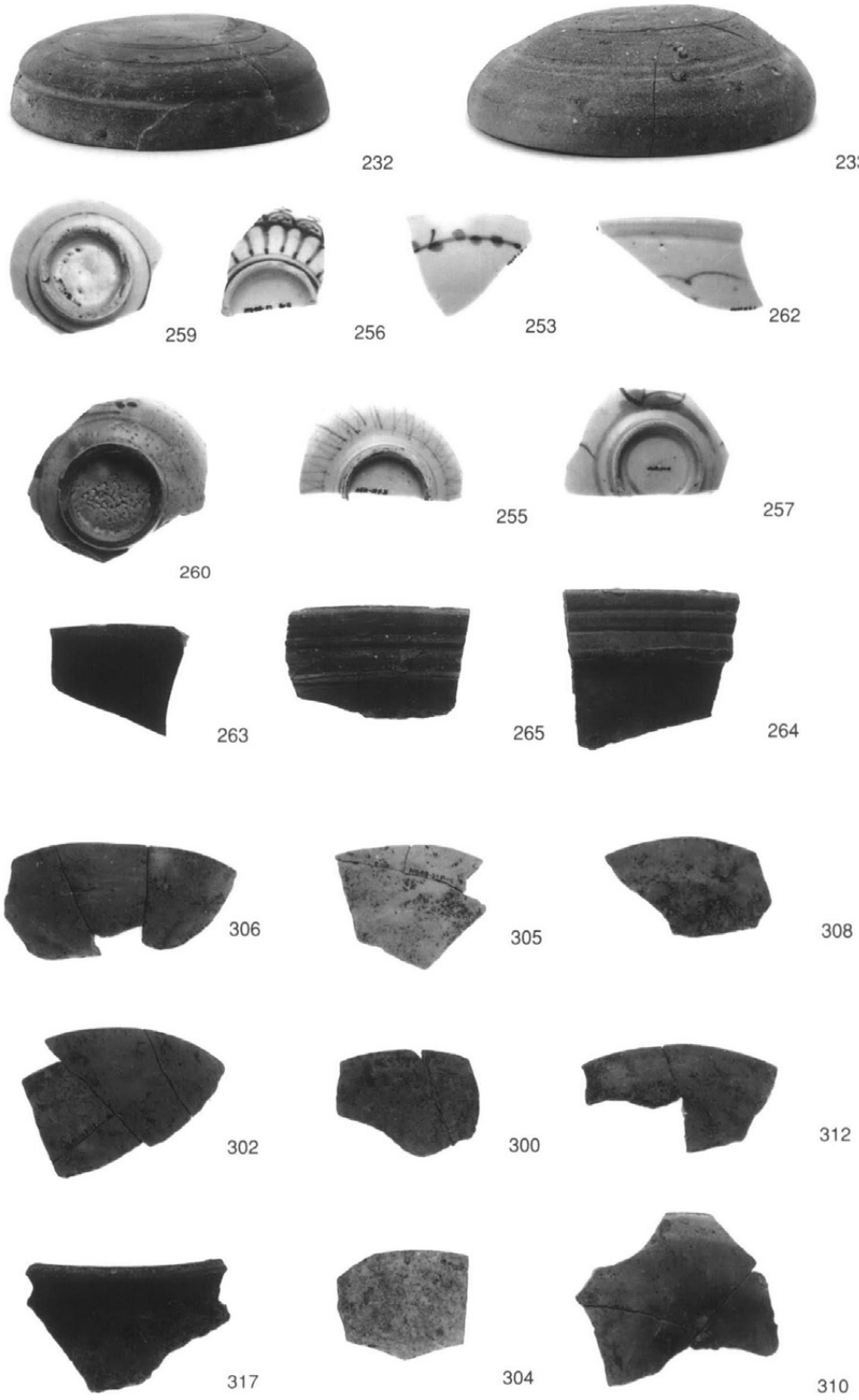
170

坪境溝SD207（141・151・152）、坪境溝SD403（144・158・159）、長原 9C層上面（170）

図版五〇　長原東南地区88—29・37・69・36次調査地　古墳時代の遺構および江戸～古墳時代の包含層出土の土器

土器埋納ピットSP721（226）、土壙SK718（220）、長原2～4層（183）、長原4B層（175・177）、長原4Biii層（196・216）、長原7層（179・181・184・215）

図版五一　長原東南地区88－57次調査地、中央地区88－20①②次調査地　古墳時代の遺構および江戸～鎌倉時代の包含層出土の土器



溝SD714（232・233）、長原２層（253・255・256・257・259・260・262～265）、長原4A層（300・302・304・305・308・310・317）、長原4Bi層（306・312）

図版五二　長原中央地区88－20①②次調査地　平安・古墳時代の遺構および室町・飛鳥時代の包含層出土の土器

高まりSX711（292）、溝SD705（250）、長原4A層（269・272・299・303・311）、
長原4B層（267・273）、長原5層（284）、長原6B層（280）

図版五三　長原中央地区88－20①②・27次調査地　平安・古墳時代の遺構および江戸～鎌倉時代の包含層出土の土器

295

290

298

248

327

326

297

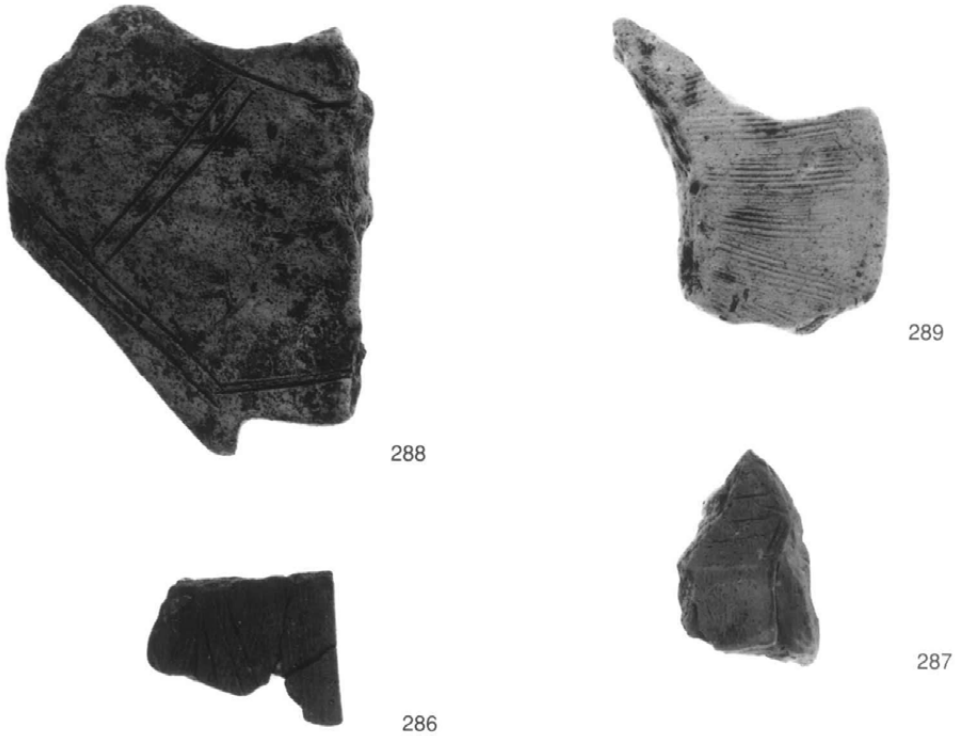
296

294

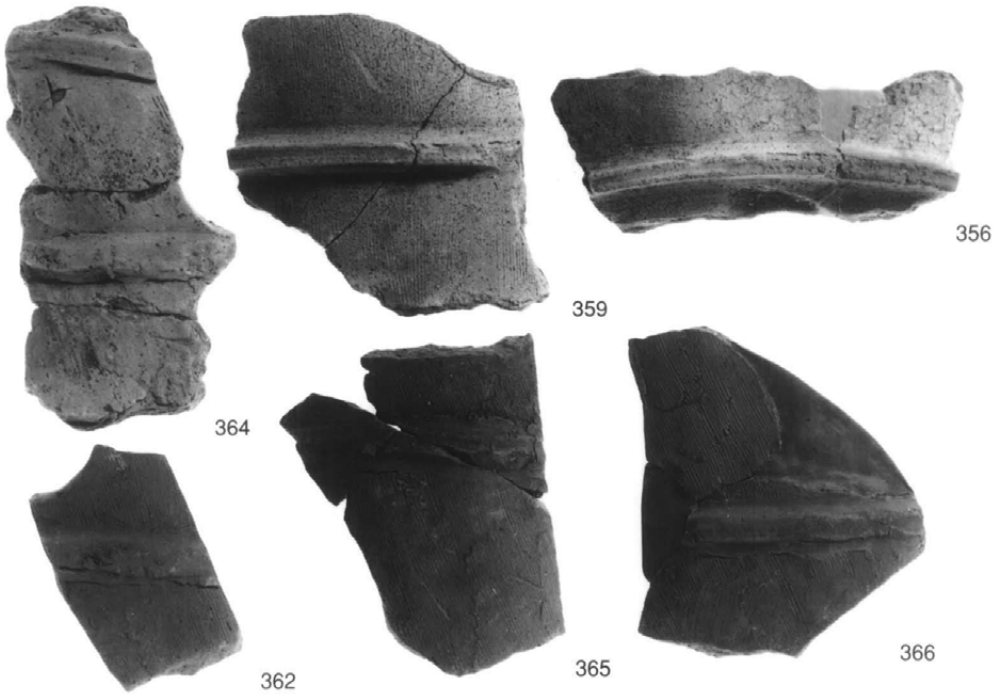
358

窪みSX410（290）、溝SD704（248）、井戸SE712（294～297）、土壙SK714（298）、長原２層（326）、長原4A層（327）、長原4Biii層下部（358）

図版五四　長原中央地区88－20①・27次調査地　飛鳥時代の包含層出土の埴輪

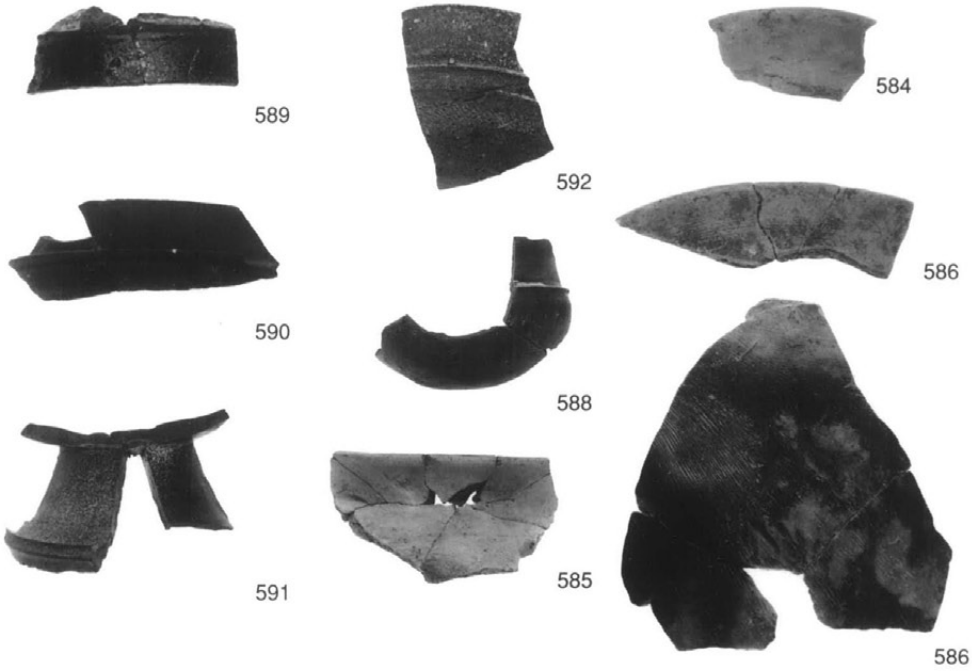


長原 6B 層（286～289）

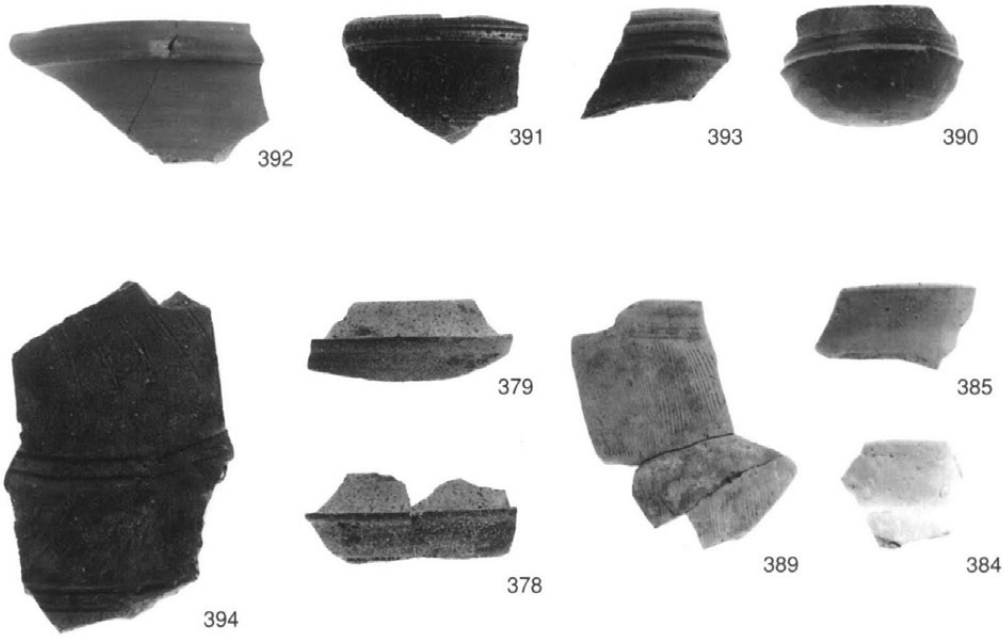


長原 6B 層（356・359・362・364～366）

図版五五　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の土器



東周溝（584～586・588・592）

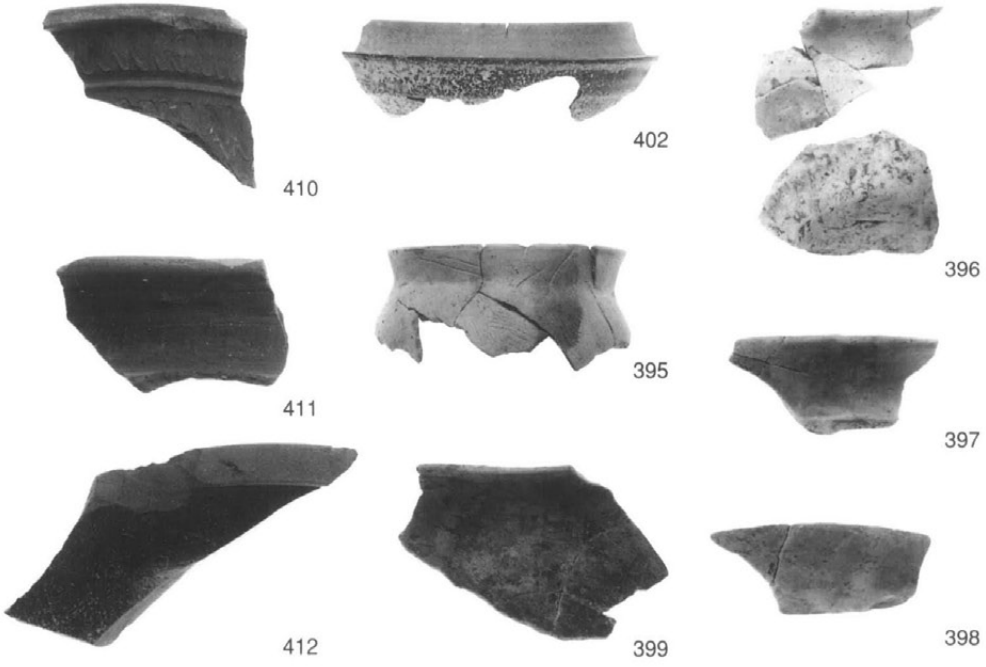


くびれ部（378・379）、墳丘盛土内（384・385・389～394）

図版五六　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の須恵器

南周濠（413）、くびれ部（375・376・380・382・408）、墳丘上面（383）、北周濠（400）、東周濠（403）

図版五七　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の土器



南周濠（397～399・412・416）、くびれ部（402）、東周濠（395）、北周濠（396・410・411）

図版五八　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の円筒埴輪（1）

423

435

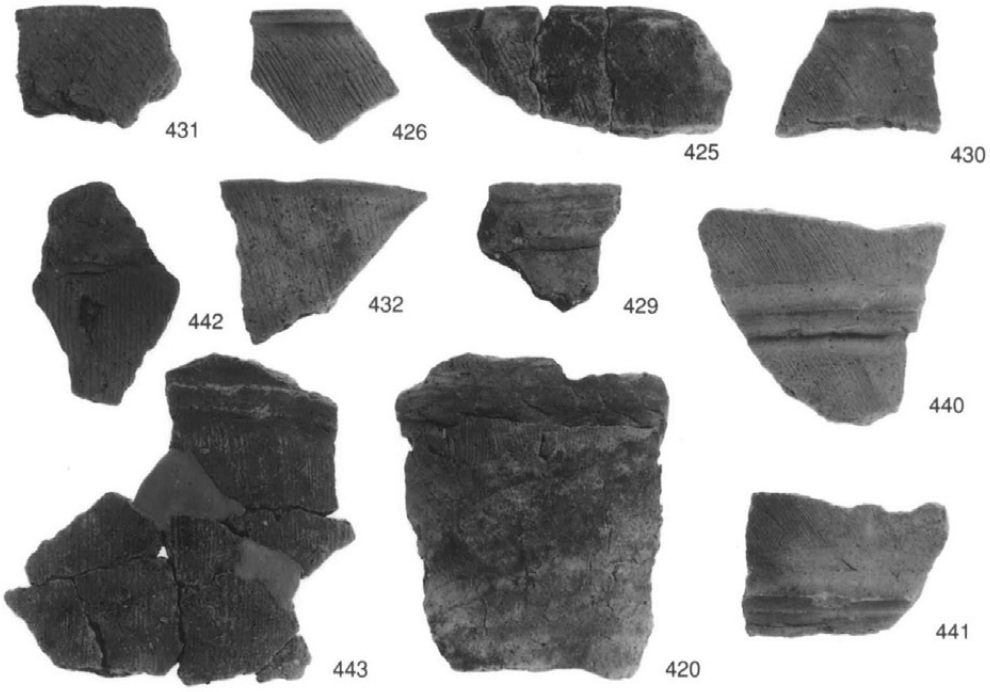
434

521

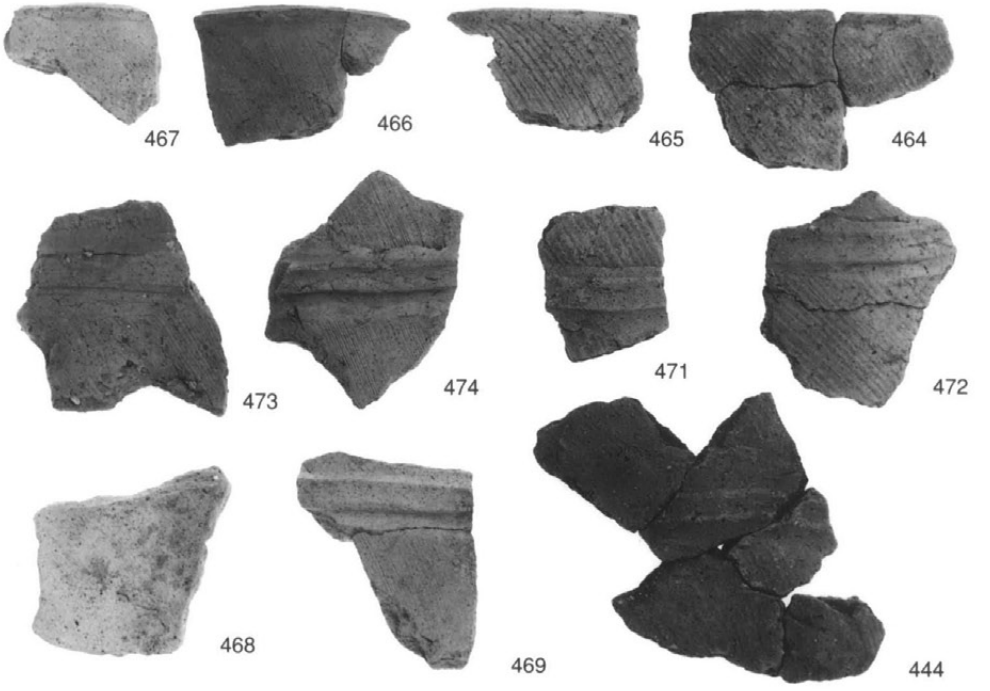
419

417

南周濠外堤（417・419）、南周濠（423・434・435）、北周濠（521）

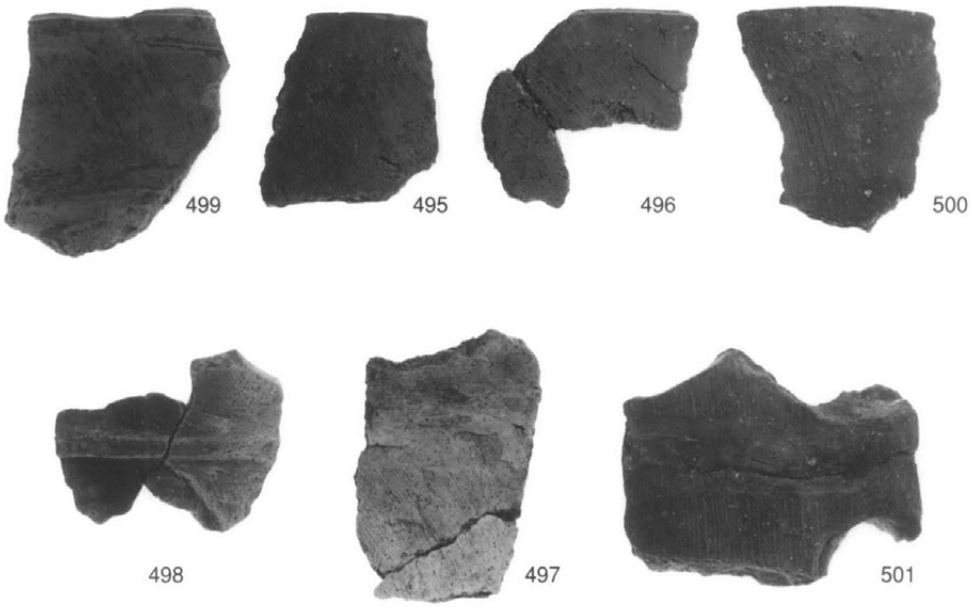


南周濠外堤（420）、南周濠（425・426・429～432・440～443）

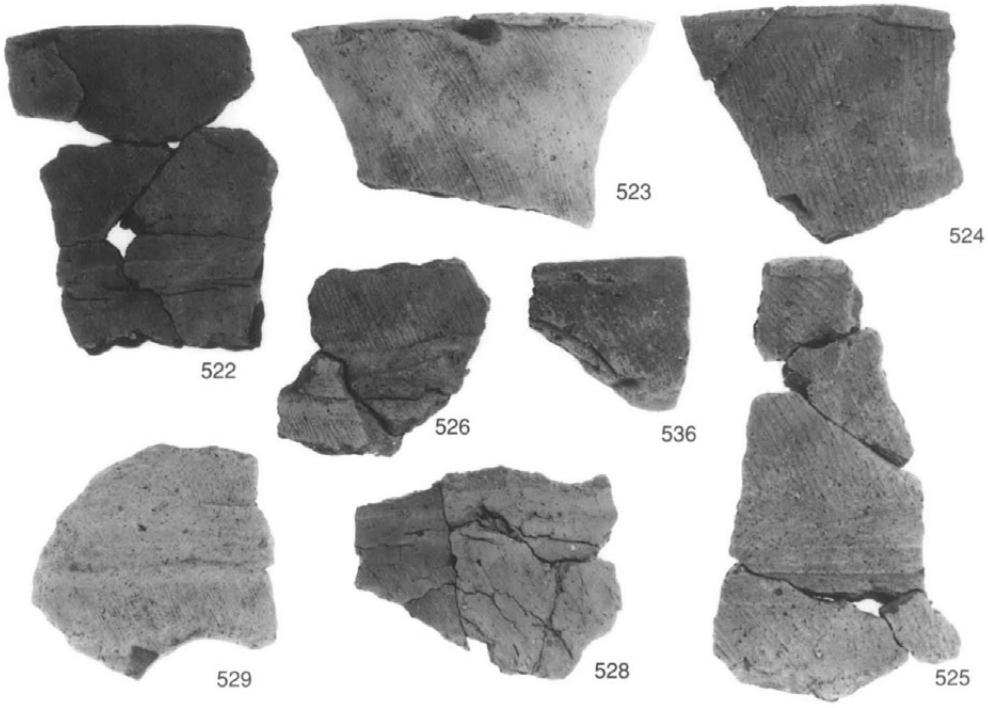


くびれ部（464～469・471～474）、南側墳丘斜面（444）

図版六〇　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の円筒埴輪（3）



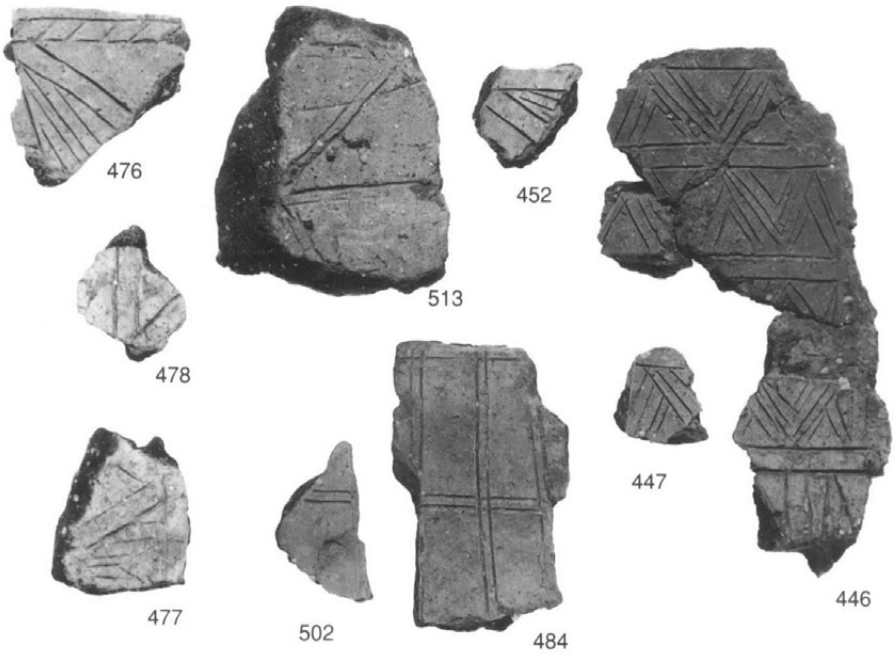
東周濠・東側墳丘斜面（495～501）



北周濠（522・525）、北側墳丘斜面（524・526・529・536）、墳丘上（523・528）

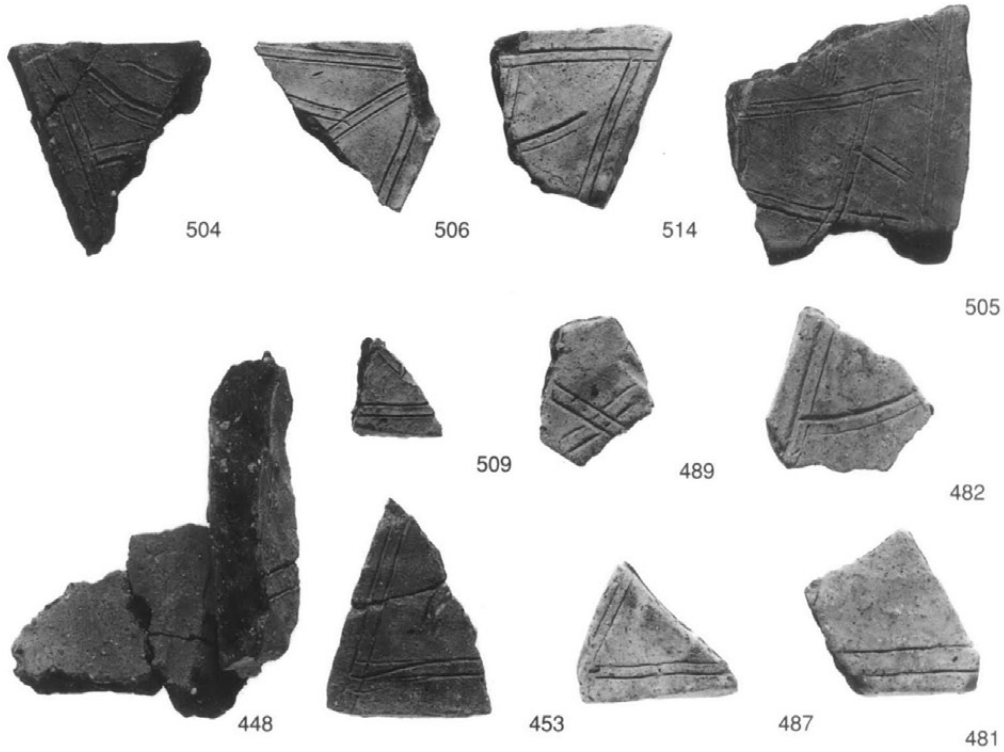
図版六一　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の形象埴輪（1）

甲冑形埴輪（456～458）

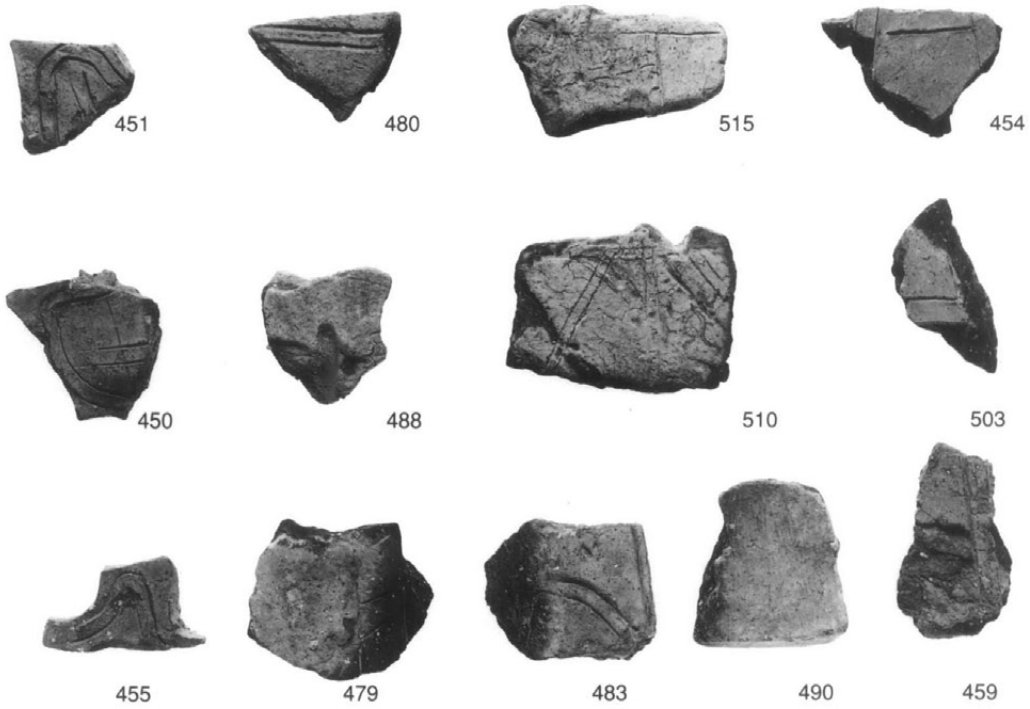


盾形埴輪（446・447・452・476～478・513）、石見型盾形埴輪（484・502）

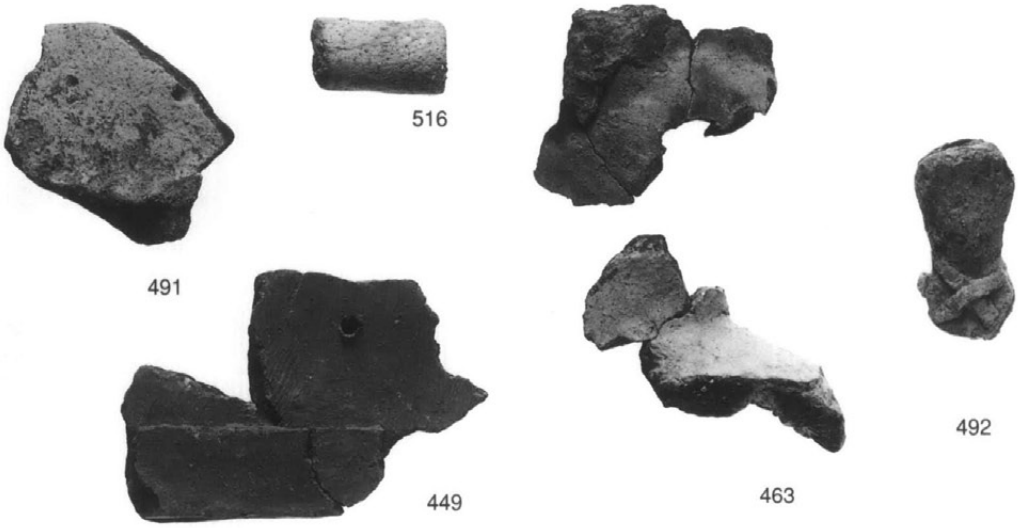
図版六二　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の形象埴輪（2）



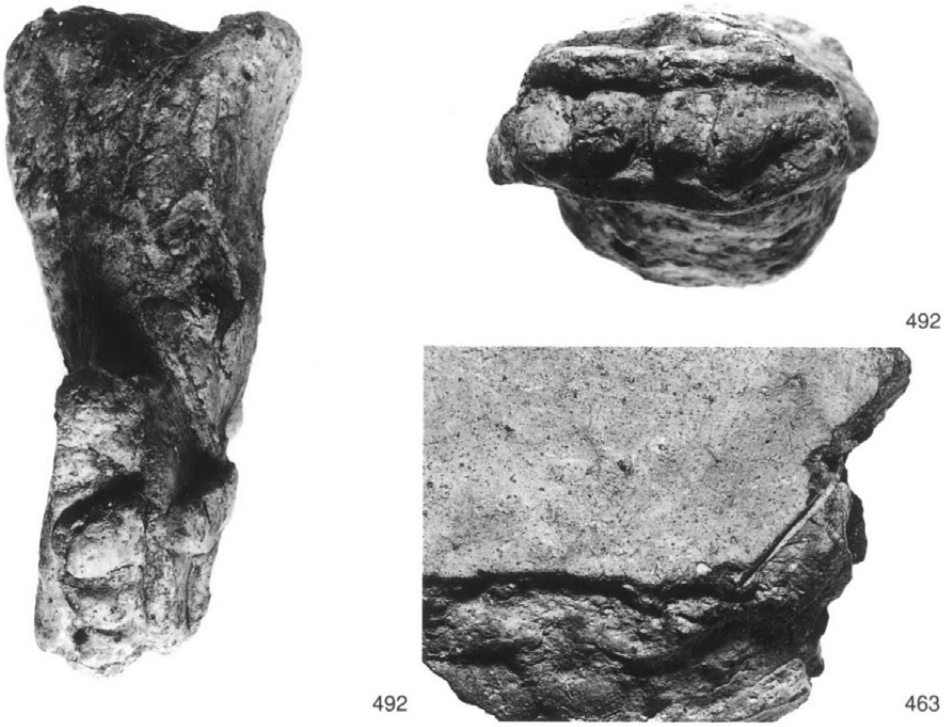
盾形埴輪（448）、石見型盾形埴輪（453・481・482・487・489・506・509・514）、石見型器材埴輪（504・505）



盾形埴輪（479）、衣蓋形埴輪（490）、石見型器材埴輪（450・451・455・480・483・488・510・515）、その他（454・459・503）



家形埴輪（449・491・516）、人物埴輪（463・492）



人物埴輪細部（463・492）

図版六四　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の形象埴輪（4）

左側面

右側面

上　面

正　面

下　面

馬形埴輪（494）

図版六五　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の形象埴輪（5）

517

460

519

517

493

518

493

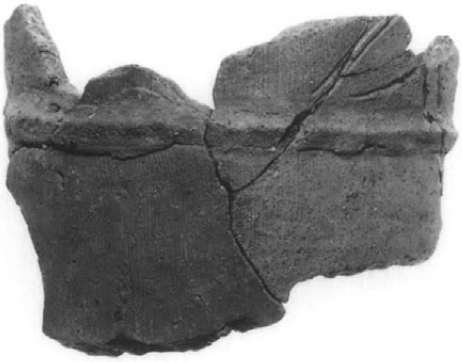
馬形埴輪（460・493・517～519）

図版六六　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の埴輪の特徴（1）

434

521

424


437

539

532

531

535

534

540

538

円筒埴輪ヘラ記号

図版六七　長原中央地区88－54次調査地　南口古墳出土の埴輪の特徴（2）

520

520

541

541

438

438

円筒埴輪製作技法

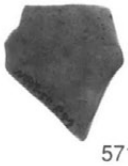
図版六八　長原中央地区88－54次調査地　古墳時代の遺構出土の土器

550

556

551

555


571

572

573

574

575

576

577

578

579

580

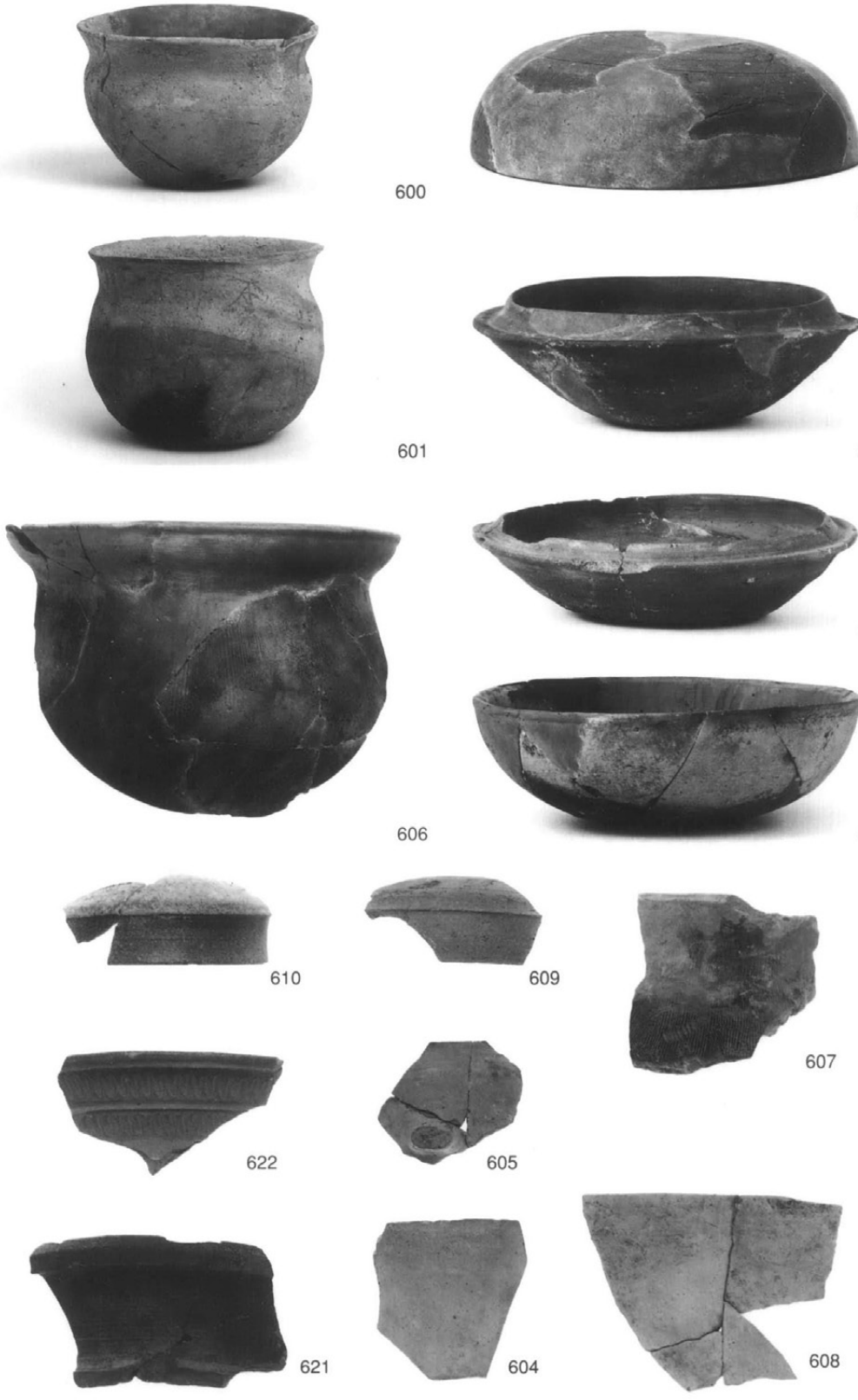
581

582

583

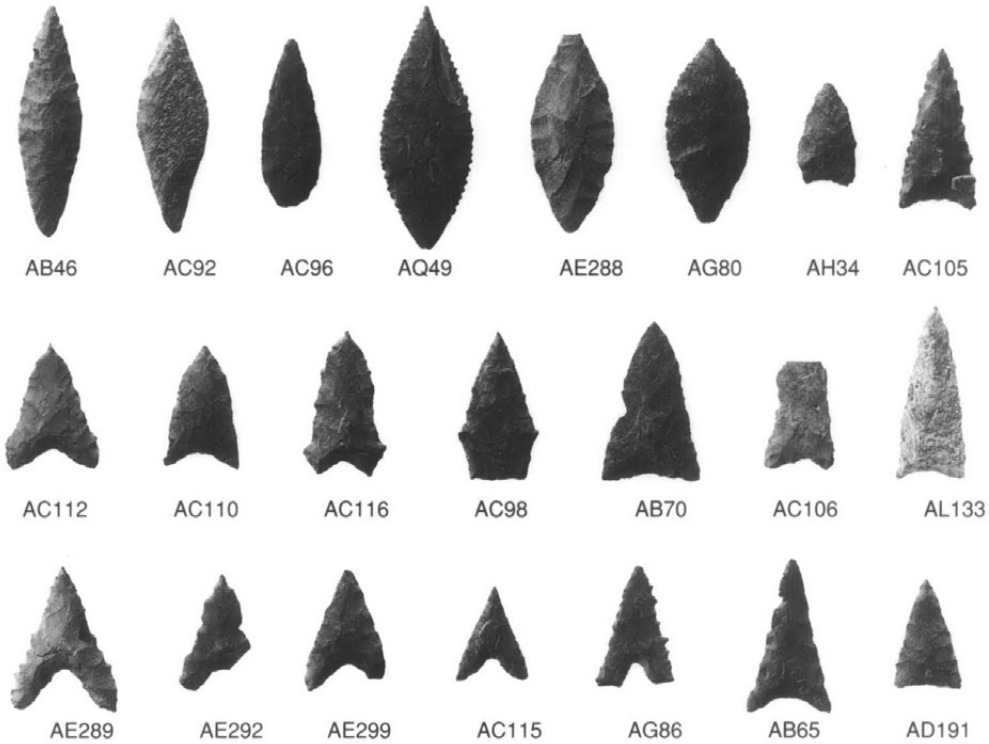
井戸SE723（550・551・555・556・571～583）

図版六九　長原中央地区88－54次調査地　飛鳥～室町時代の包含層出土の遺物

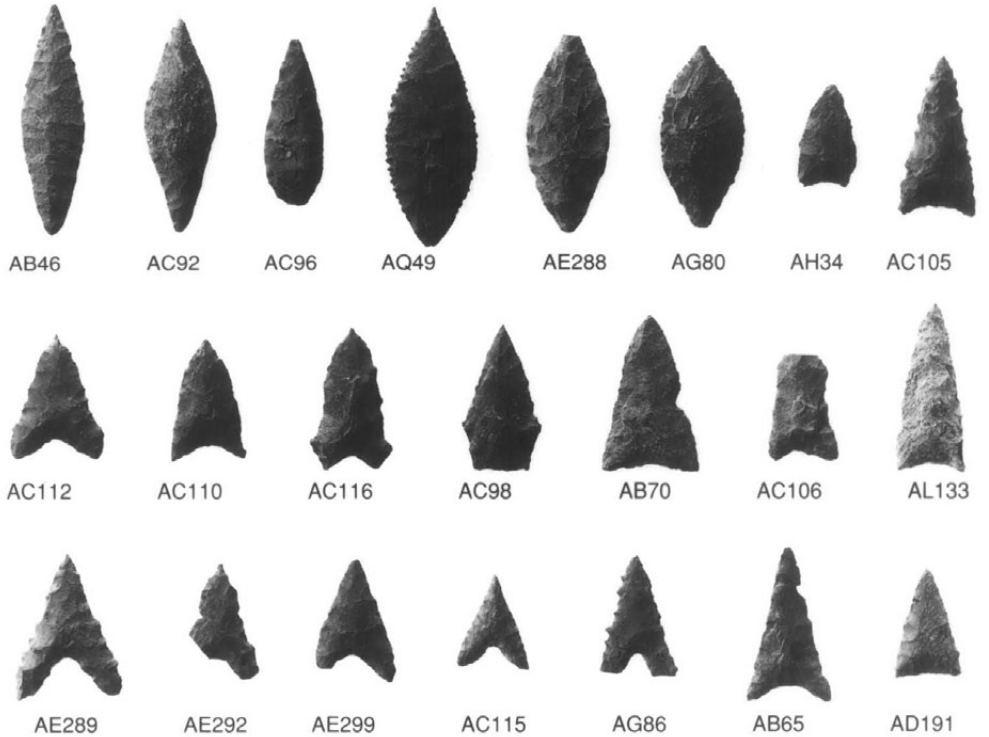


長原４Ａ層（600・601・622）、長原６Ａ層（604～607・609～611・613・614）、長原６Ｂ層（603・608）

図版七〇　長原東南地区　縄文時代後期～弥生時代中期の石鏃

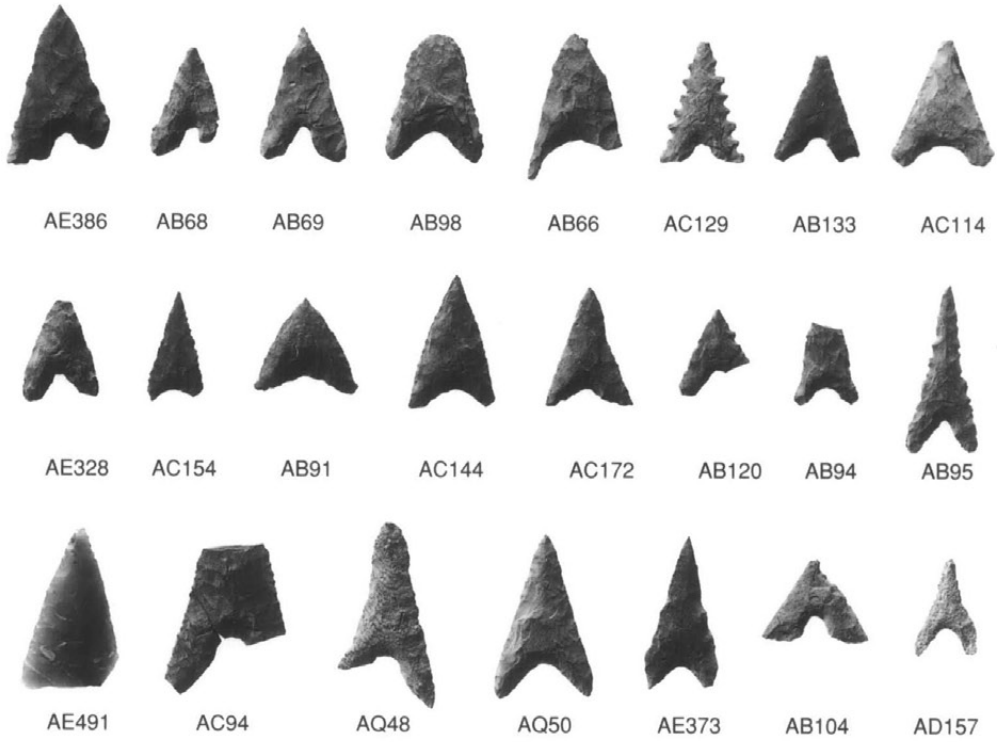


長原 8B 層（上段左２）、長原 9A 層（上段右６・中段右１）
長原 9C 層（中段左６・下段）

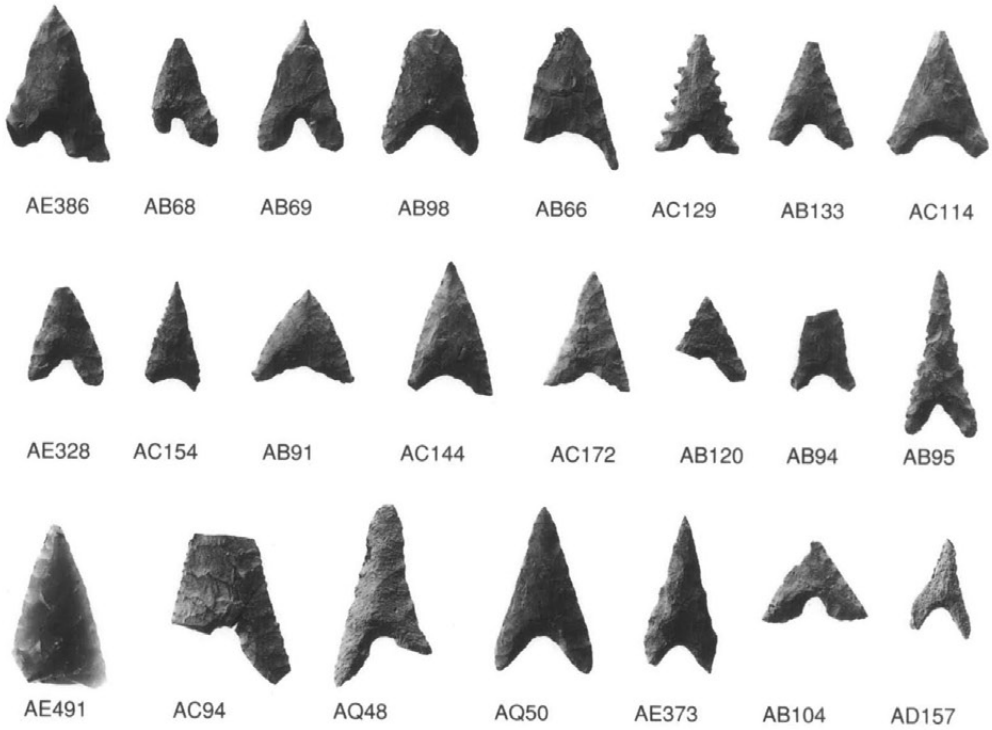


同上　×2／3

図版七一　長原東南地区　縄文時代中期以前の石鏃（1）

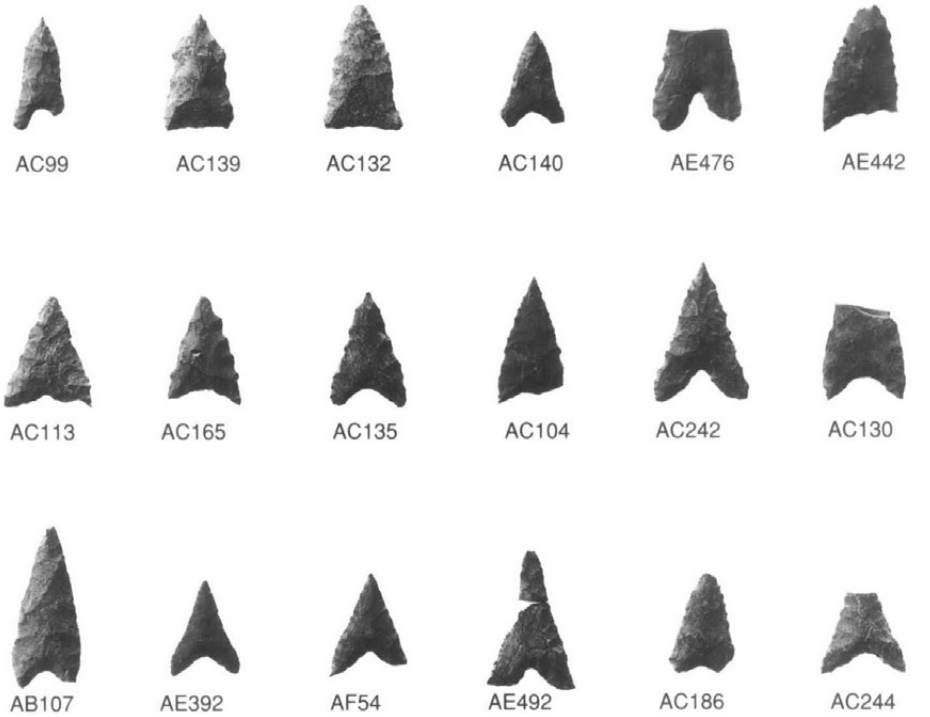


長原 12A 層（上段）、長原 12BC 層（中段・下段右 1）
長原 12／13 層漸移帯（下段左 6）

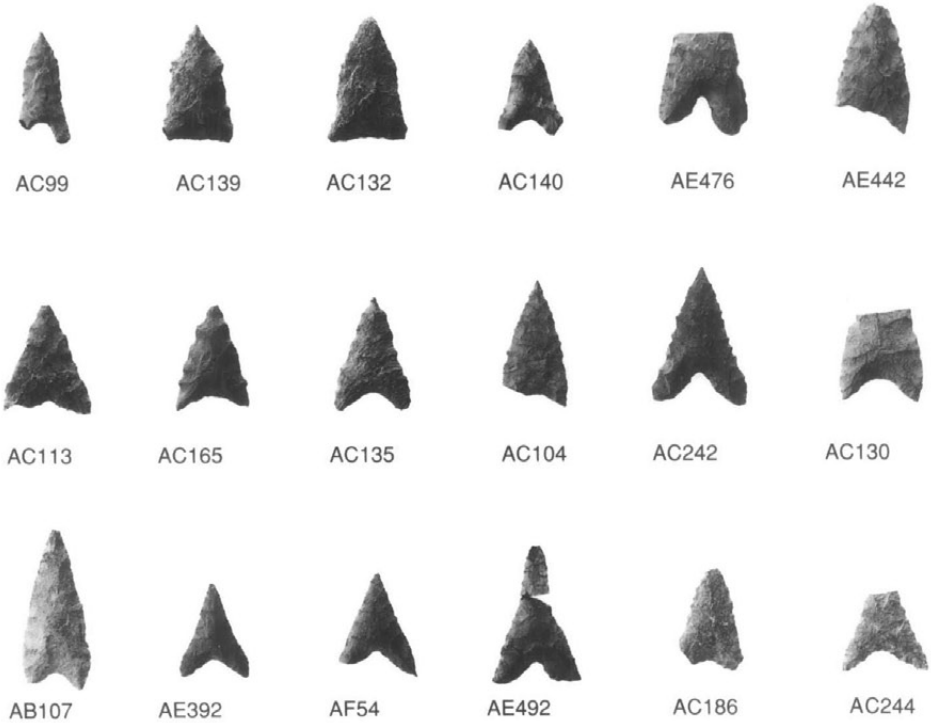


同上　×2／3

図版七二　長原東南地区　縄文時代中期以前の石鏃（2）

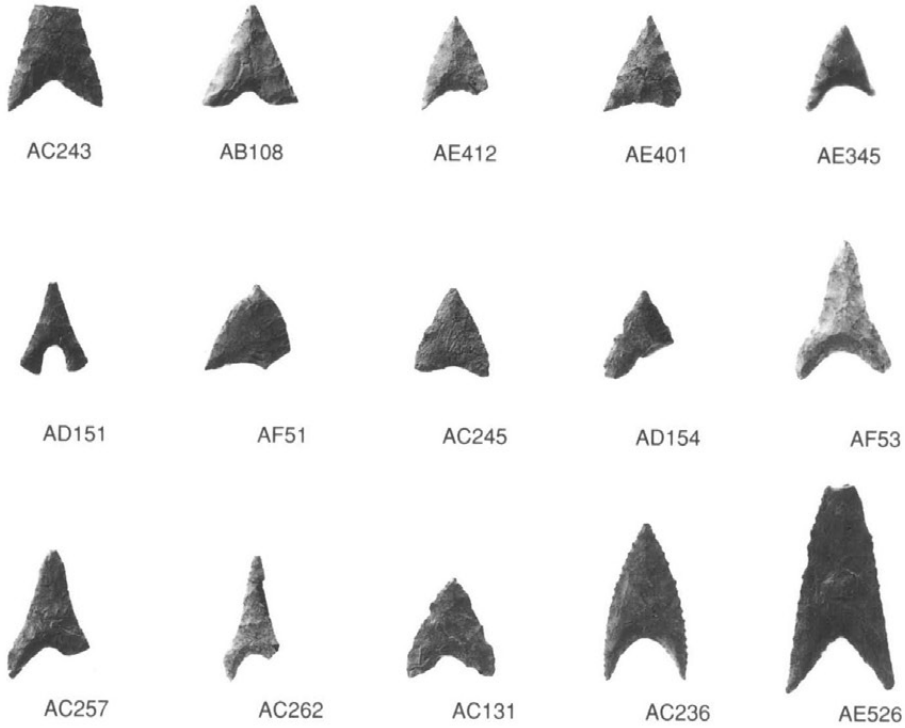


長原 12A ～ 12／13 層漸移帯一括

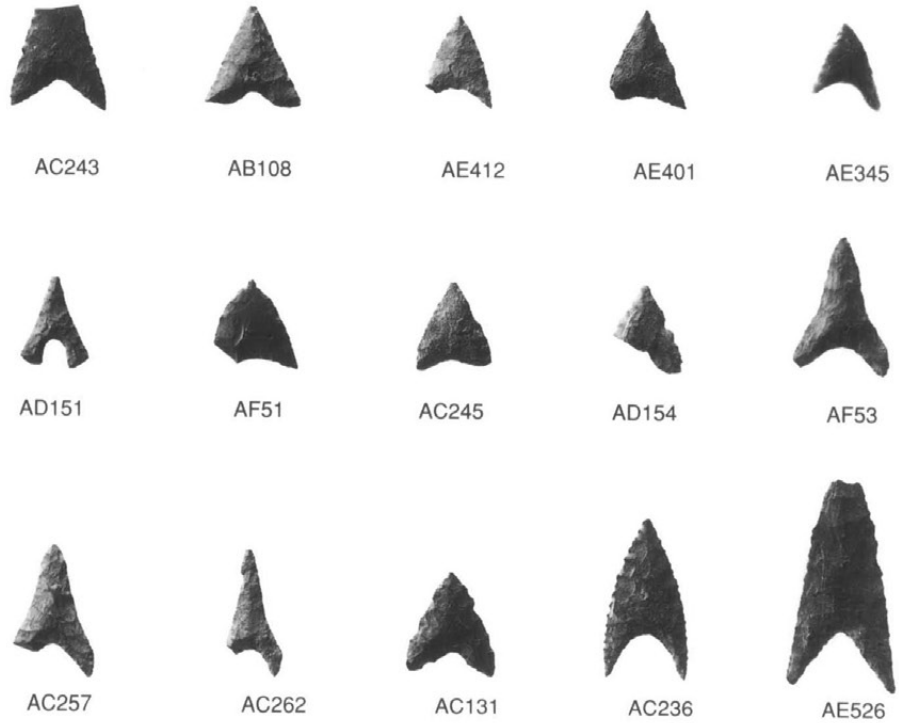


同上　　×2／3

図版七三　長原東南地区　縄文時代中期以前の石鏃（3）

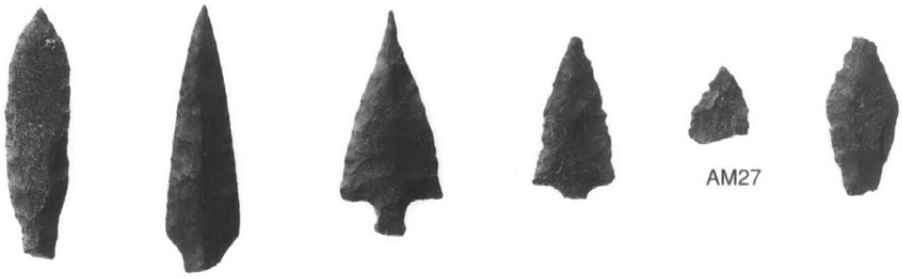


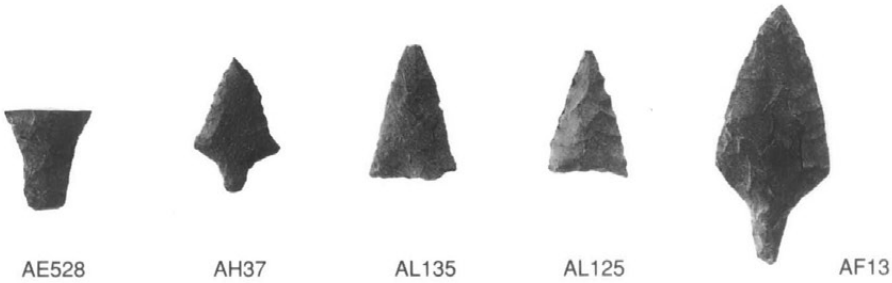
長原 12A ～ 12／13 層漸移帯一括



同上　×2／3

図版七四　長原東南地区　弥生時代の石鏃ほか

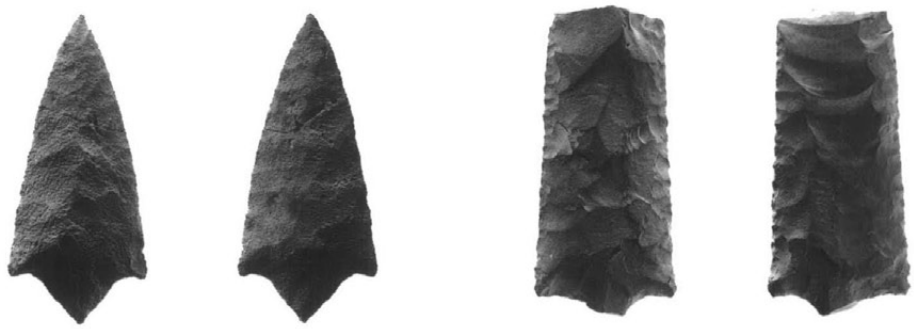




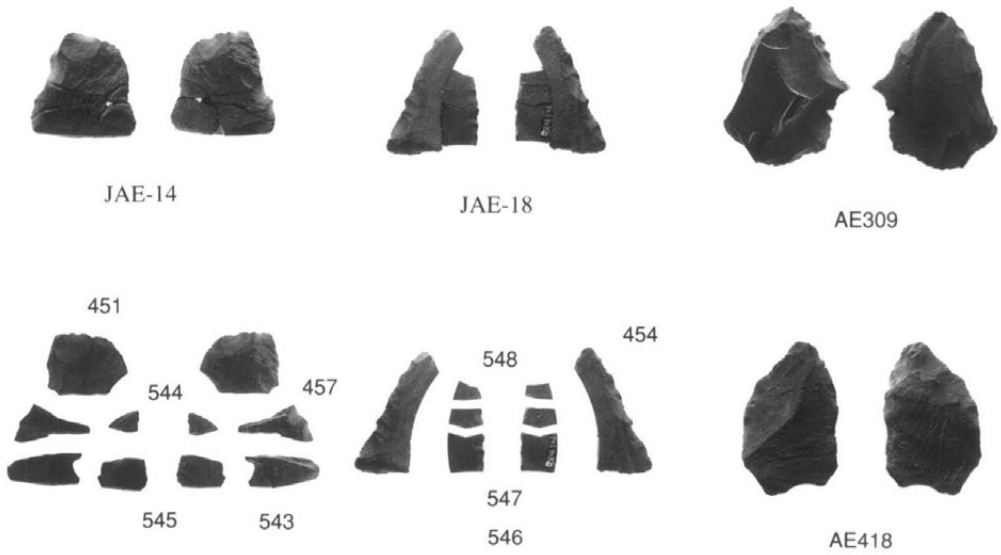
長原９層（縄文～弥生時代前期；AL135）、長原８Ｂ層（AF13）
長原７層（AL194・AE212）、遊離資料及び層準不明（上記以外）

同上　　×2／3

図版七五　長原東南地区　縄文時代早期の有茎尖頭器・中期以前の石鏃未製品

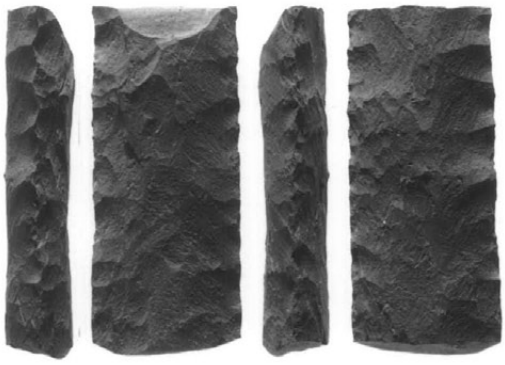


有茎尖頭器（ともに長原 12／13 層漸移帯層準）×2／3



石鏃未製品（AE309；長原 12A 層、JAE-14・18・AE418；長原 12 ～ 12／13 層漸移帯）×2／3

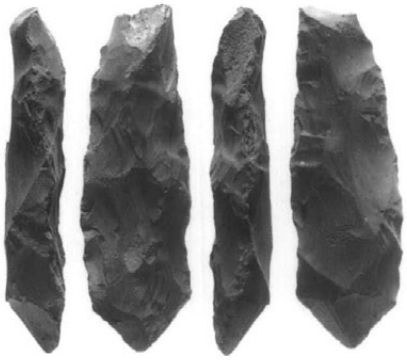
図版七六　石剣・石槍・クサビほか



AL238

AL223

AE304



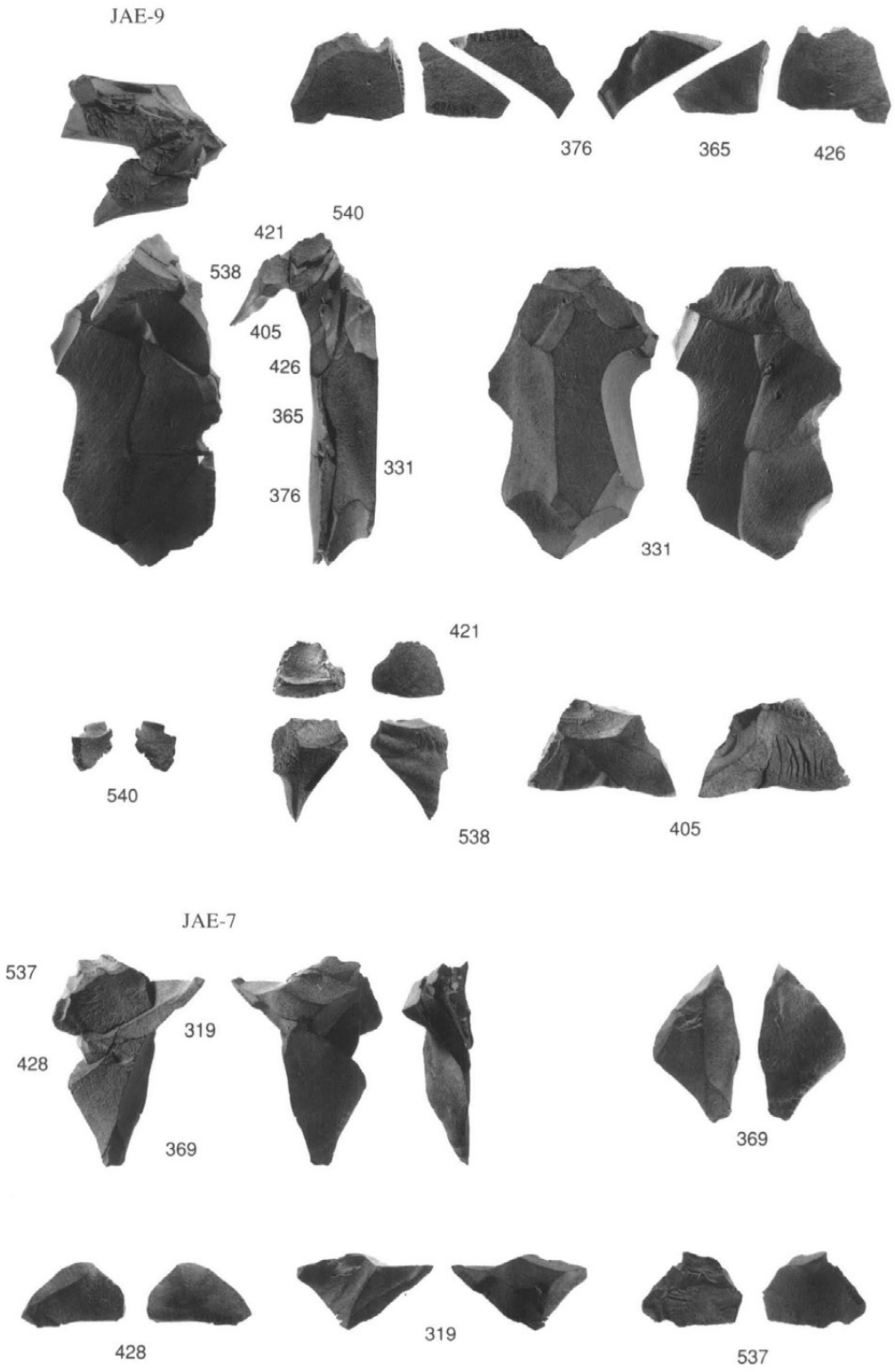
AL201

AG3

AP175

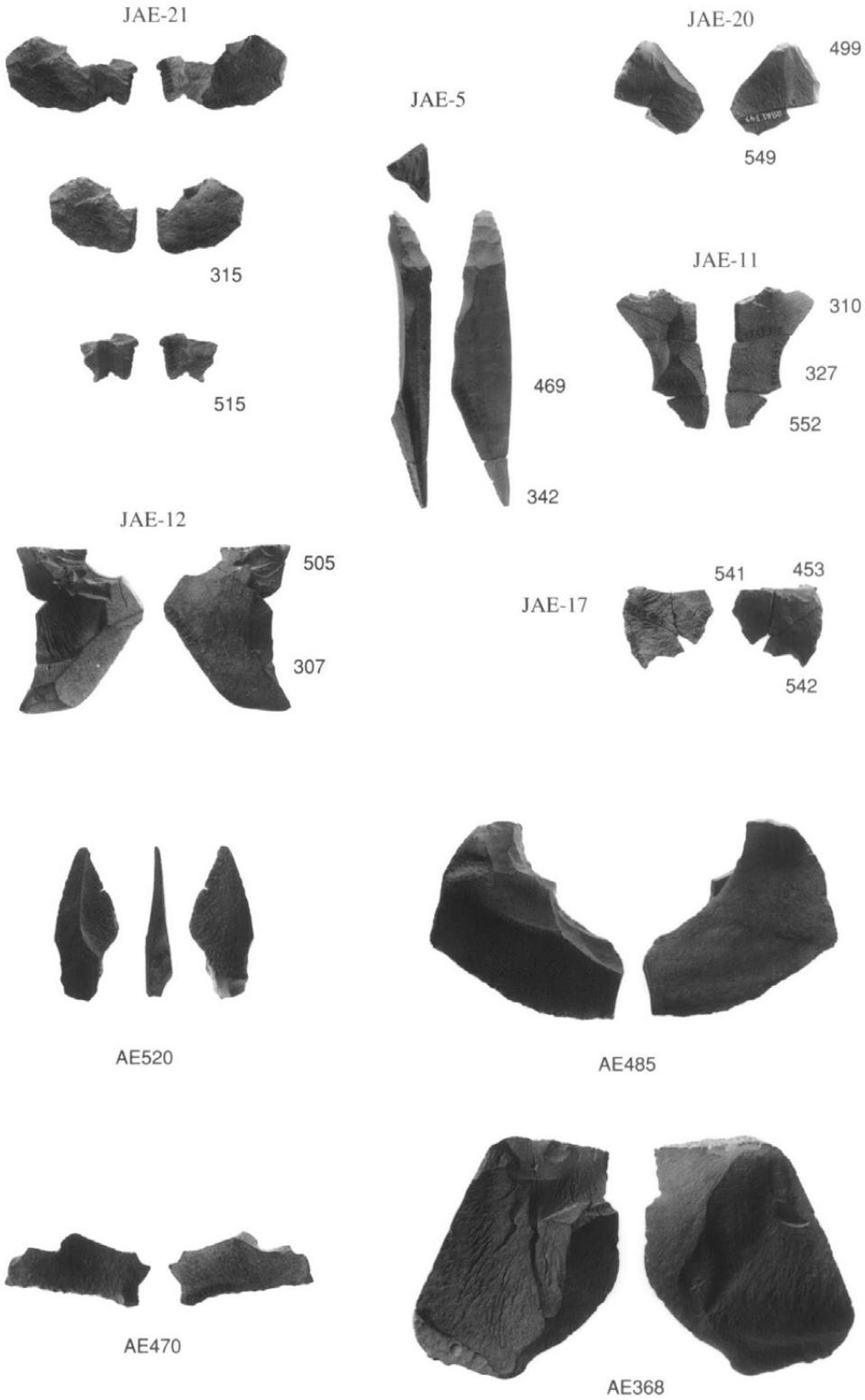
×2／3

石剣（AL238；SX801周溝内）、石槍（AE304；長原 8C 層）、石匙（AG3；長原 4B 層）、叩き石（AL223；長原 9 層）、クサビ（AL201；SX706、AP175；長原4Biii層）



×2／3

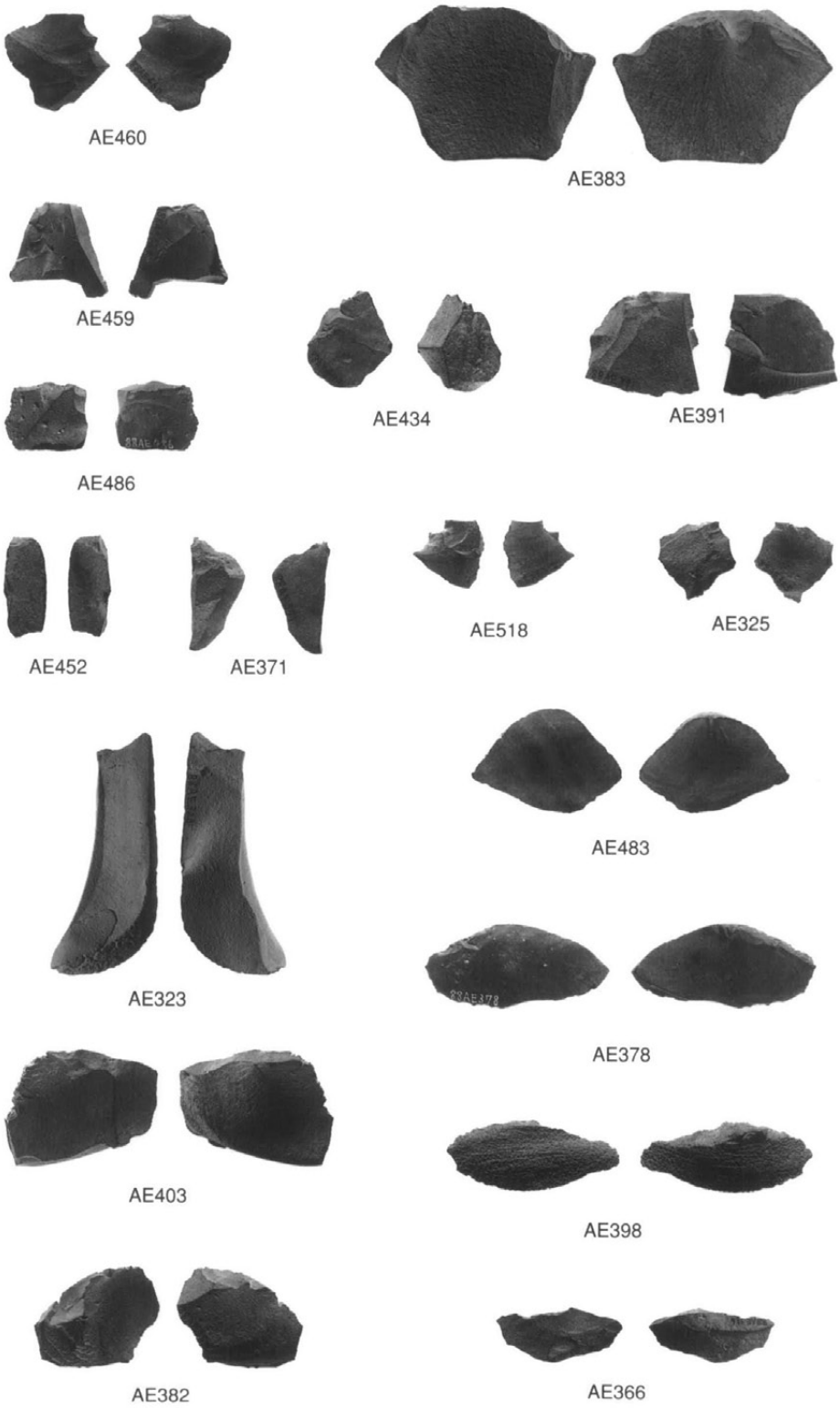
石器密集部LC1304内の接合資料（JAE-7・9）



×2／3

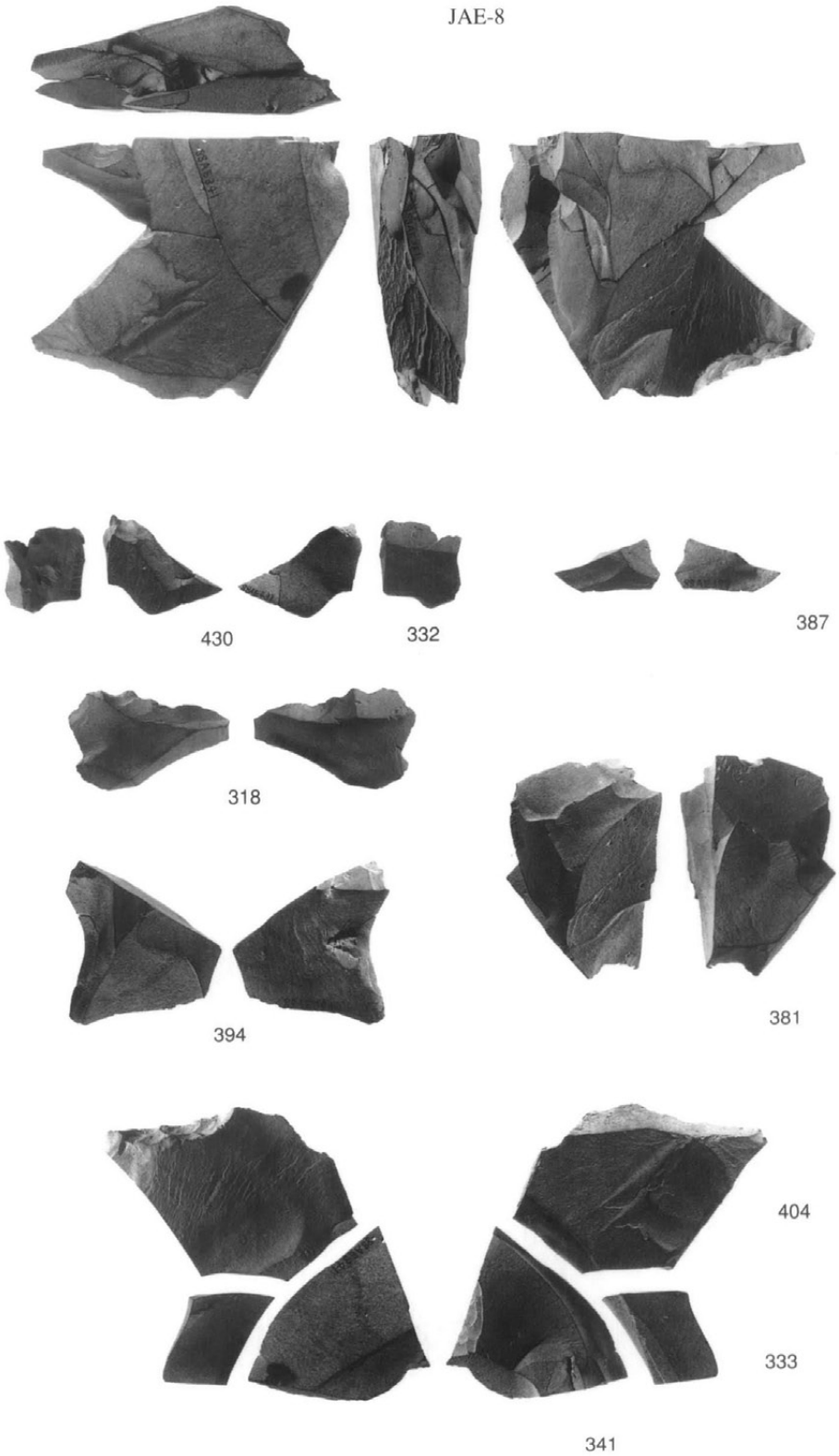
石器密集部LC1304内の接合資料（JAE-5；石錐・11・12・17・20・21）、ナイフ形石器（AE520）、細部調整剥片（AE470・485）、使用痕をもつ剥片（AE368）

図版七九　長原東南地区88－69次調査地　旧石器時代の石器遺物（3）



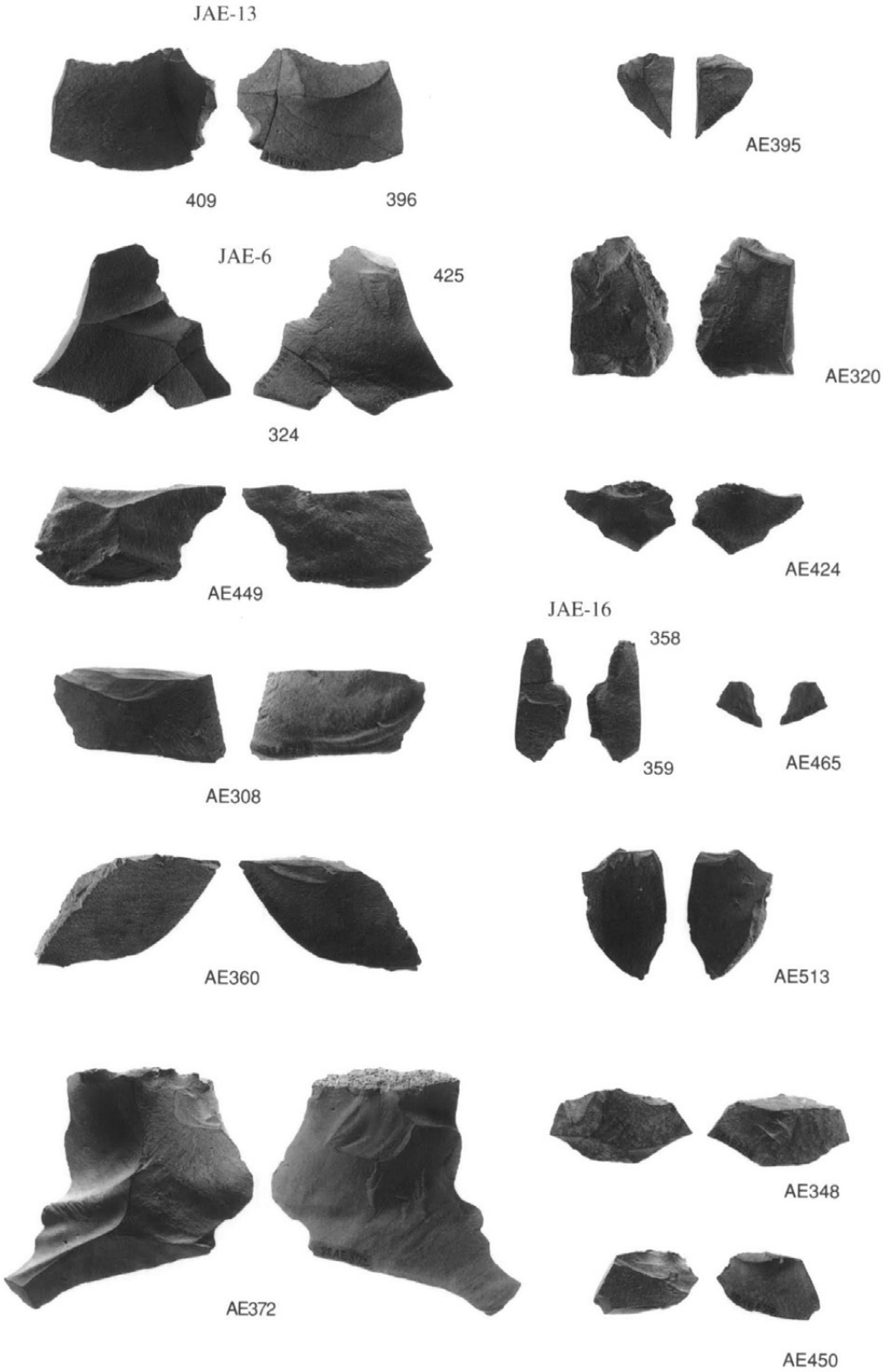
×2／3

石器密集部LC1304内の剥片



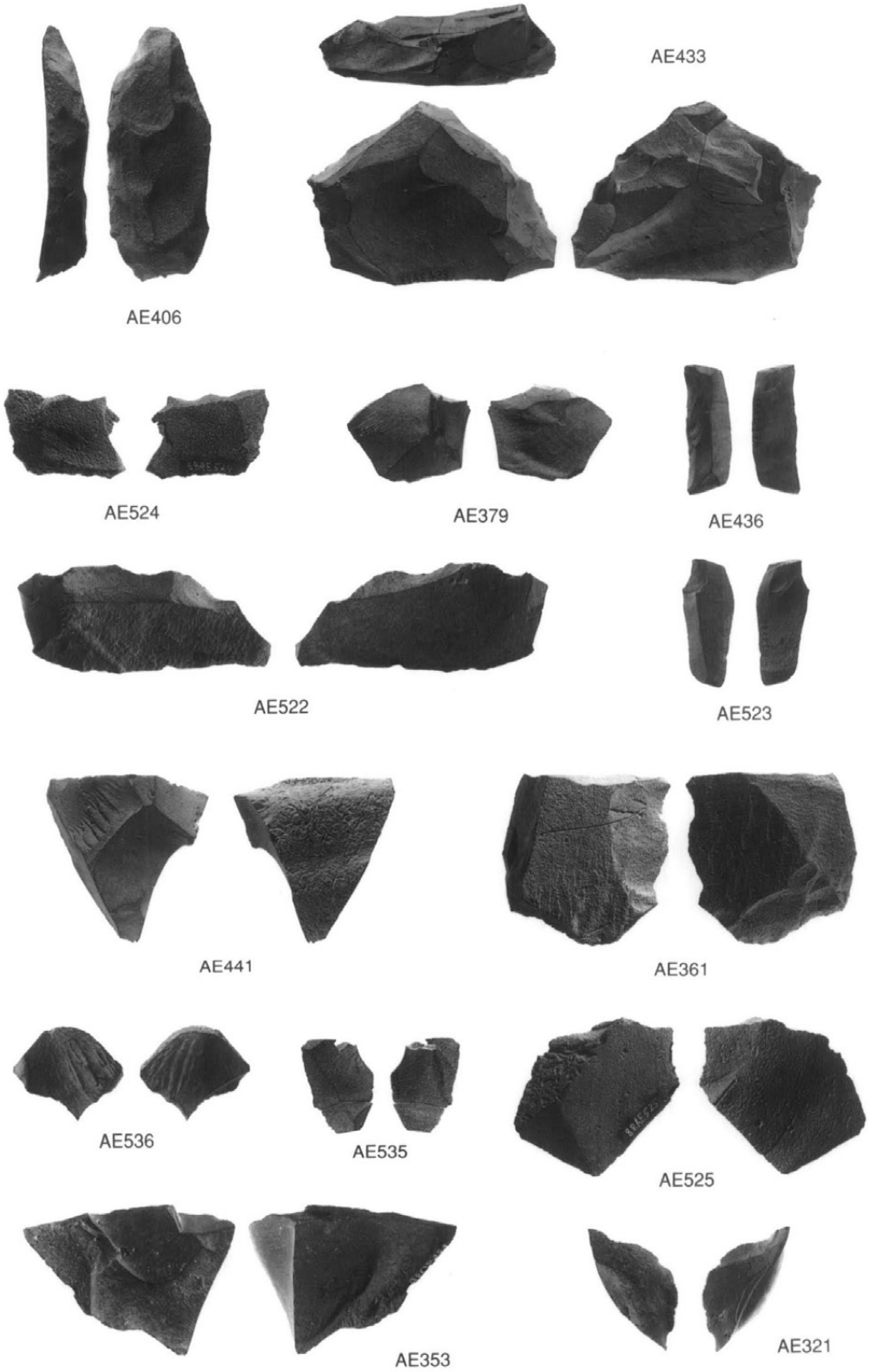
×2／3

石器密集部LC1305内の接合資料（JAE-8）



×2／3

石器密集部LC1305内の接合資料（JAE-6・13）、剥片（AE320・395・424）
石器密集部LC1306内の接合資料(JAE-16)、使用痕をもつ剥片(AE449)、剥片（AE308・360・465・513）
石器密集部LC1304～06周辺の剥片（AE348・372・450）



×2／3

石器密集部LC1304～06周辺の削器（AE406）、石核（AE361・433・441・524）、細部調整剥片（AE536）
使用痕をもつ剥片（AE379）、細石刃状剥片（AE436・523）、剥片（AE321・353・522・525・535）